

骨寺村莊園遺跡確認調査報告書

白山社及び駒形根神社・慈恵塚・山王窟

令和6年3月

一関市教育委員会

序

一関市巖美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として著名であり、「日本の原風景」ともいえる農村景観を今に伝えています。平安時代以来、中尊寺きょうぞうべつとうりょう経蔵別当領であったことが、中尊寺の古文書群や鎌倉幕府が編纂した歴史書『吾妻鏡』あづまがみによって証明されており、平成17年には国史跡「骨寺村ほねでらむら荘園遺跡」に指定、平成18年には国重要文化的景観「一関本寺の農村景観」に選定されています。

さて、骨寺村荘園遺跡と深い関係にある「平泉」は、平成23年6月に世界文化遺産に登録されました。その関連資産として位置付いている骨寺村荘園遺跡について、当教育委員会では継続して調査研究を行っています。

本年度は、国指定史跡骨寺村荘園遺跡のうち、白山社及び駒形根神社、慈恵塚、山王窟の3地点で確認調査を実施し、その成果を本報告書にまとめました。特に駒形根神社境内では、鉄磬や灯明皿が出土し、今後の骨寺村荘園遺跡研究に貢献する大きな成果となりました。

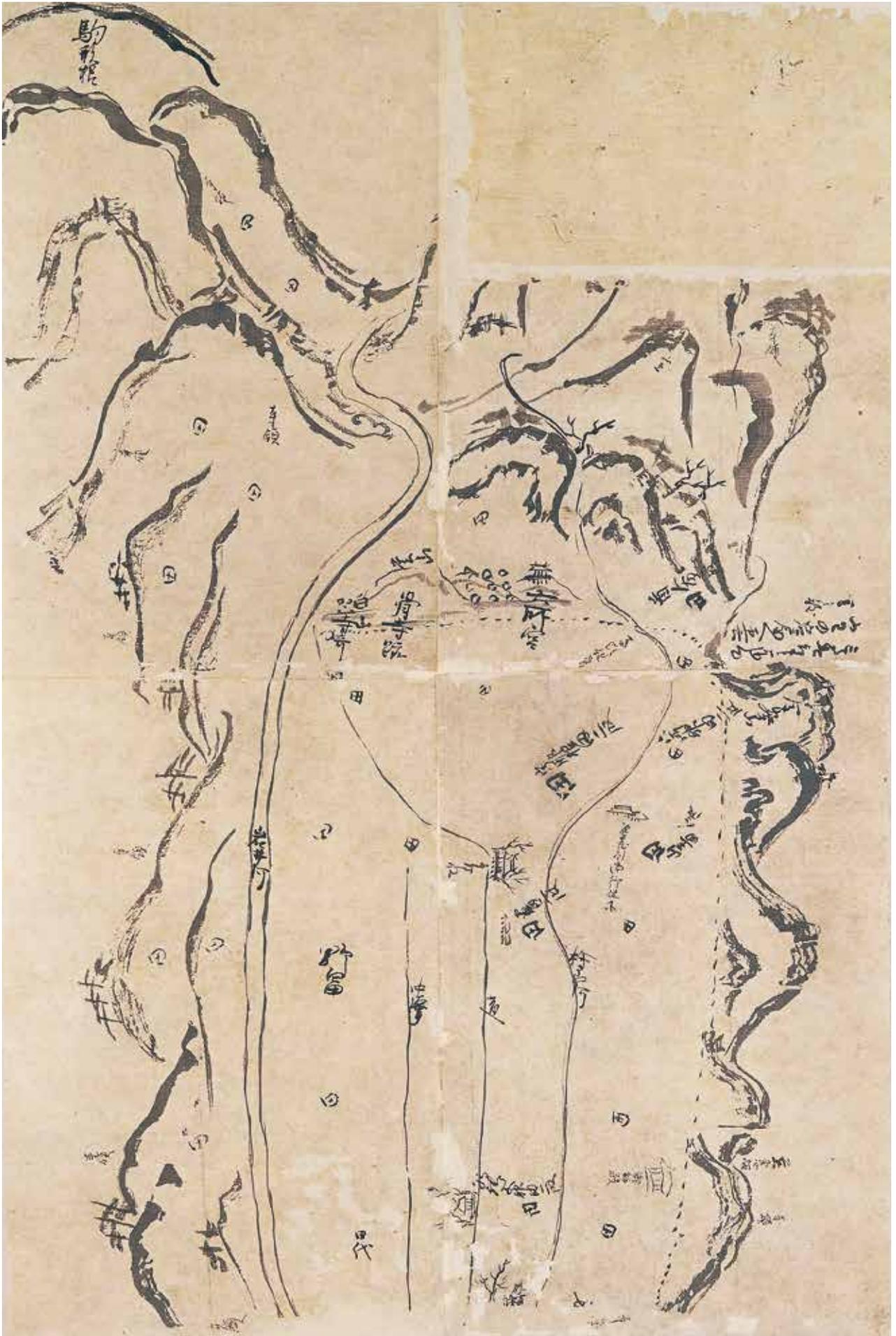
本報告書により調査成果を広く公開し、市民ならびに全国の方々にも当市の文化財を知っていただき、関心が高まることを期待するとともに、地域のルーツを紐解いていくことが、より良い地域づくりの一助になれば望外の喜びです。

結びに、調査に際してご協力を頂きました地権者、地域住民の皆さまをはじめ多くの方々に衷心より感謝を申し上げ、本報告書発行のあいさつといたします。

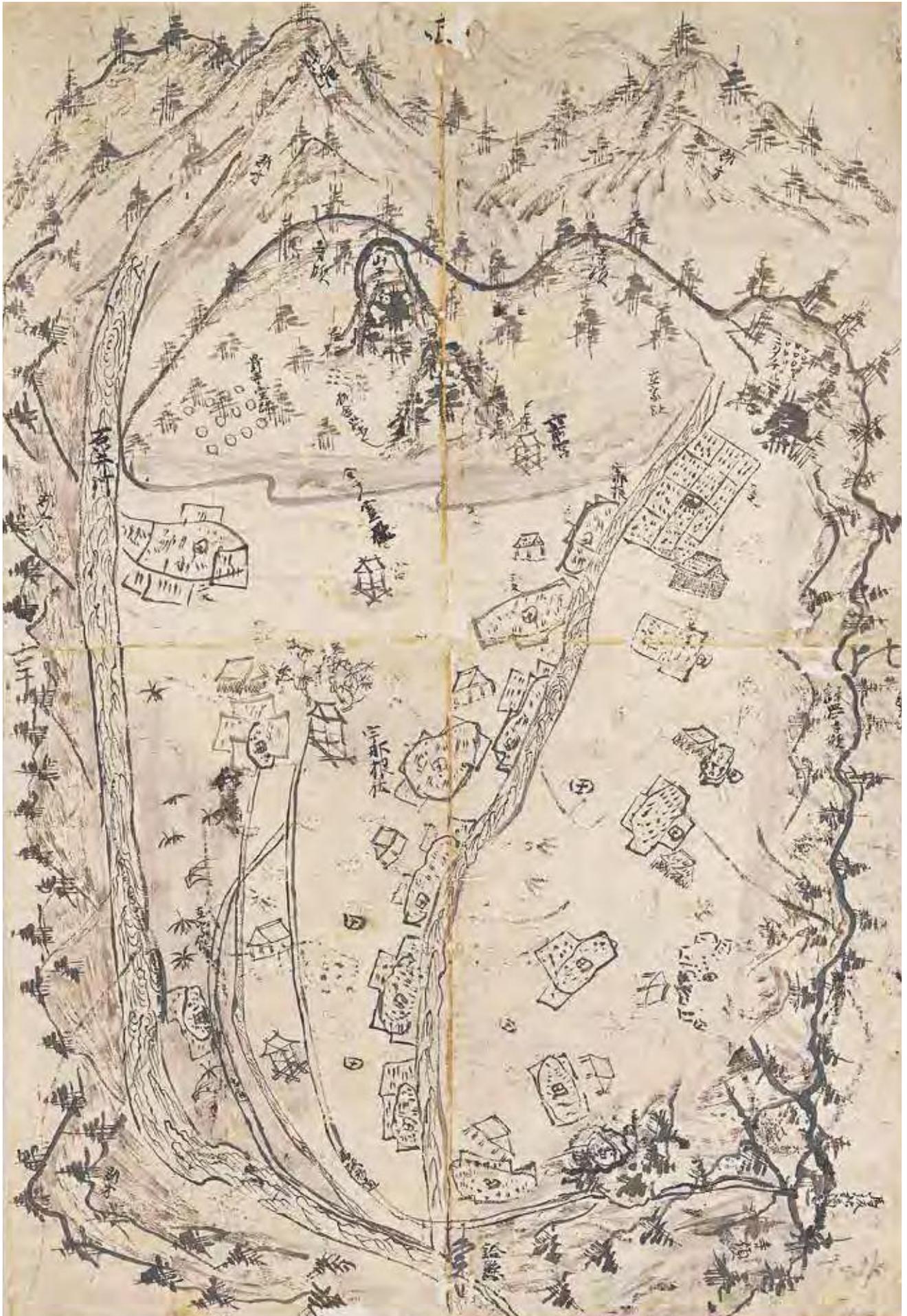
令和6年3月

一関市教育委員会

教育長 時 枝 直 樹



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』簡略絵図（複製） 原典は中尊寺蔵



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』詳細絵図（複製） 原典は中尊寺蔵



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』紙背絵図（複製） 原典は中尊寺蔵



鉄磬（駒形根神社出土遺物）



かわらけ（灯明皿）



かわらけ底部（回転糸切り痕）

例 言

1. 本書は、岩手県一関市教育委員会が令和5年度に行った骨寺村荘園遺跡に係る調査報告書である。
2. 調査は、国庫補助事業及び県補助事業を活用した。
3. 調査は、平成7年に国の重要文化財に指定された『陸奥国骨寺村絵図』（中尊寺蔵）の現地として、一関市巖美町本寺地区に所在する国指定史跡骨寺村荘園遺跡の範囲及び内容の確認のための発掘調査を実施したものである。
4. 令和5年度調査対象地は、骨寺村荘園遺跡のうち「白山社及び駒形根神社」の駒形8-1地点（駒形根神社境内）、「慈恵塚」の下真坂25-7地点、「山王窟」の若井原194-33地点である。
5. 調査主体は、一関市教育委員会 教育長 時枝直樹であり、現地調査は文化財課が担当した。
6. 調査体制は以下のとおり。

一関市教育委員会	文化財課	課長	氏 家 克 典
		課長補佐兼文化財係長	金 野 修
		学芸主査	菅 原 孝 明
		文化財調査研究員	光 井 文 行
			阿 部 充
		会計年度任用職員	小 岩 誠 也
7. 本書の作成は文化財課が行い、担当箇所の文末に執筆者名を付した。編集は光井が行った。
8. 本書図3、11、17に使用した地形図は、一関市長の承認を得て、測量成果を使用したものである。（許可番号 令和6年2月16日政第11007号）
9. 土層断面図の土色表示は新版標準土色帳2002年度版（日本色研事業株式会社）を用いている。
10. 調査補助及び調査区刈り払い業務は、本寺地区地域づくり推進協議会に委託した。また、山王窟仮設階段設置等の環境整備を、有限会社寿工業に委託した。
11. 報告書作成にあたっては、一関市骨寺村荘園遺跡指導委員会及び同世界遺産推進部会、岩手県教育委員会平泉遺跡群調査整備推進会議の指導と助言を得ている。また、出土した石製品の石材鑑定について佐々木繁喜氏（一関市文化財調査委員）の指導を頂いた。
12. 調査協力者・機関（敬称略・50音順）
阿部勝則、井上雅孝、岩渕計、及川幸子、金子佐知子、菊池貴、小岩寿男、国生尚、佐々木一治、佐々木源輔、佐藤健爾、佐藤昌悦、佐藤光雄、鈴木永樹、鈴木タミ子、羽柴直人、初村武寛、福島正和、平山勇、村田淳、茂庭文朝、山川純一、八重樫忠郎
岩手県教育委員会、岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンター、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、（公財）元興寺文化財研究所、（地独）岩手県工業技術センター、文化庁、骨寺村ガイダンス運営協議会、本寺地区地域づくり推進協議会

目 次

序	1
カラー図版	3
例言	7
目次	8
1 位置と環境	9
2 調査に至る経緯	14
3 白山社及び駒形根神社の調査	21
4 慈恵塚の調査	34
5 山王窟の調査	43
6 総括	52
遺物観察表	54
写真図版	59

1 位置と環境

(1) 一関市の位置と環境

一関市は、岩手県の南端に位置する。平成17年(2005)9月20日に一関市、花泉町、大東町、千厩町、東山町、室根村、川崎村の7市町村が合併、さらに23年(2011)9月26日に藤沢町と合併した。東西に約63km、南北に約46kmの広がりを見せる市の総面積は1,256.42km²である。

中央部を北上川が南流する市域は、西側に奥羽山脈、東側に北上山地がある緑豊かな農山村である。著名な記念物は、コニーデ型二重火山である栗駒山(須川岳)を中心とする火山性山岳風景地の国指定「栗駒国定公園」(昭和43年(1968))や北上川水系磐井川流域の国指定史跡「骨寺村荘園遺跡」(平成17年)および国選定重要文化的景観「一関本寺の農村景観」(平成18年(2006))、下流部には磐井川によって滝或いは急流、深淵となって変化に富んだ溪谷景観をなす国指定名勝及び天然記念物「巖美溪」(昭和2年(1927))がある。市の東側には同じ北上川水系の砂鉄川流域に、古生代の石灰岩層が浸食されてできた国指定名勝「狛鼻溪」(大正14年(1925))がある。

(2) 骨寺村荘園遺跡の位置と環境

骨寺村荘園遺跡は須川岳を見上げる中山間地にある。遺跡のある一関市巖美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として、中世以来の農村景観を良好に継承した地域で、須川岳から流れ出る磐井川の左岸に形成された小盆地に集落が点在する。平地部分の平均海拔高は約160m、南側を磐井川に接し、三方は海拔230m~260mの丘陵に囲まれている。

骨寺村荘園遺跡を取り巻く自然環境については、骨寺村荘園遺跡村落調査研究の一環である自然班(総括: 広田純一(岩手大学教授))による一連の研究成果がある。地形・地質を担当した土井宣夫によると、磐井川に沿う地形の特徴は、須川岳北斜面から北上川へ合流する間に、いくつもの狭窄地による数珠状の小盆地が形成されている点にある。磐井川の流域には硬質の巖美層が広がる。この層は褶曲により磐井川の下底と河岸に交互に出現するため、下底(縦方向)と河岸(横方向)への侵食速度に差異が生じて、数珠状の小盆地が形成されたとしている。また、巖美層が交互に出現する理由は、断層活動により巖美層に褶曲が生じているためであるという(土井2012)。このようにして形成された小盆地の一つに骨寺村荘園遺跡は所在する。

現在の植生について、気候と植物・植生を担当した島田直明は、北側丘陵部にはコナラやクリの広葉樹が広がり、斜面下部には植林によるスギ林、上部の尾根にはアカマツやゴヨウマツ林が分布するとしている。一部にはブナ林も確認できたという。植物相からは日本海型要素と太平洋・温暖帯要素の両方のタイプが見られ、岩手県内陸部の中山間地としての地勢を反映している(島田2012)。それと関連して、磐井川左岸の旧河道地を対象に花粉分析を行った平塚明らは、915年に降下した十和田a火山灰の上層からイネ花粉が急増することを指摘しており、この時期に水田に生息する水生植物(オモダカ・サジオモダカ属)の増加から、本格的な稲作が始まったことを想定している。同時期にクリの花粉、アサヤソバの花粉も増加している。また堆積速度から14世紀以降にはスギやマツ林の拡大が推定されている(平塚他2012)。ただし十和田a火山灰の降下以降に上記の傾向が認められるとしても、土層堆積が継続的かつ安定的であったかが検討課題となる。年代についてもやはり発掘成果との突合が不可欠である。

(3) 歴史的環境

中尊寺文書 骨寺村の中尊寺荘園としての始まりを示す文書は、『中尊寺文書』の一つ「中尊寺経蔵別当補任状案」である。そこには自在房蓮光^{じざいぼうれんこう}という僧侶が、紺紙金銀字交書一切経^{こんしきんぎんじこうしよいつさいきょう}を奉行し、8年をかけて完成させたこと、その功により蓮光は中尊寺経蔵別当に就任したこと、そして蓮光の「往古私領」であった「骨寺」を経蔵に寄進し、永代にわたって経蔵別当領としたことが記されている。日付は天治三年（1126）三月二十五日、発給者は藤原清衡である。

『中尊寺文書』には、骨寺村の伝領に関する譲状・補任状・安堵状が多数あり、室町時代まで経蔵別当領として相伝されていることが確認できる。その他、村の内部構造に関する文書として、「骨寺村所出物日記」（文保2年（1318）3月）・「骨寺村在家日記」（室町時代か）があり、貢納者と品目が書き出されている。

吾妻鏡 文治五年（1189）の奥州合戦で奥州藤原氏は滅亡し、中尊寺は庇護者を失うこととなった。『吾妻鏡』文治五年九月十日条には、中尊寺経蔵別当心蓮は所領の安堵^{あんど}を求めるため、源頼朝の宿所に参上したことが記されている。

心蓮は頼朝に対し、「中尊寺は清衡が建立したこと」「鳥羽院^{とぼいん}の祈願所となったこと」「蓮光から寺領の寄付を受け、それを御祈禱料に充当していること」「経蔵は紺紙金銀字交書一切経を納めている霊場であること」を述べている。その上で、中尊寺の存続と、合戦により住民が逃げ出した寺領の安堵を求めている。

これに対し頼朝は、経蔵別当領の一つ骨寺村の四至（村境）を定め、その上で、諸役免除の文書を下した。定められた四至は、東は鑑懸^{かぎかけ}、西は山王窟^{さんのうのいわや}、南は磐井川^{みねやまどう}、北は峯山堂（から）馬坂^{まさか}である。

陸奥国骨寺村絵図 中尊寺大長寿院には2枚の絵図が残されている。簡略絵図（仏神絵図）と呼ばれるもの（カラー図版1）、詳細絵図（在家絵図）と呼ばれるもの（カラー図版2）である。また、詳細絵図の裏にも絵図があり、紙背絵図（カラー図版3）と呼ばれている。簡略絵図と詳細絵図は西を天（上）に、山稜部に囲まれた村落景観が描かれている。絵図の描写範囲は、『吾妻鏡』文治五年九月十日条に記された村の四至とほぼ同じである。つまり、頼朝によって定められた村の範囲が描かれている。

紙背絵図は、詳細絵図の裏側に描かれたもので、絵図の他に「骨寺絵図案」「寺領□□境論」「具書」等の文字も確認されている。

これらの絵図の作成目的は、中尊寺による村支配のための資料とする説（伊藤1957・吉田2008）と裁判の証拠書類説（大石1984）が示されてきたが、紙裏絵図と文字が発見されたことにより（黒田1995）、所領争いの裁判書類であることが有力となった。そしてその作成時期は簡略絵図が鎌倉時代中期、詳細絵図が鎌倉時代後期にそれぞれ作成されたと推定されている。

磐井郡西岩井村絵図（元禄十二年（1699）） 磐井郡のうち西岩井24カ村を描いたもので、そのうち五串^{いっ}村の中に「本寺」という文字が見える。これはもとの骨寺村であり、この時すでに、「骨寺」は「本寺」と呼ばれるようになっていたことがわかる。

平泉雑記（安永二年（1773）） 平泉に関する文献の調査・掲載と考証、現地踏査や伝承を収録したもので、骨寺村は「骨寺」の項で紹介されている。「本寺」の地に骨寺という寺があったが今はなく、「骨」が「本」に変わった時期は不明、としている。

風土記御用書出（安永四年（1775）） 仙台藩が領内の各村から提出させた書出である。その一つである五串村の書出に、本寺は「端郷本寺^{はこうほんでら}」として記載され、名所や旧跡等がその由来とともに細かく書き出されている。その中には『陸奥国骨寺村絵図』や『中尊寺文書』の「骨寺村在家日記」にある

「六所明神、小名 若神子、「山王社、小名 山王山」、「不動窟、小名 真坂」の別当が中尊寺の北本坊、西谷坊、小前沢坊であるとしている。西谷坊は経蔵別当職を世襲する大長寿院である。また、中尊寺の書出である「関山風土記」には、慈恵塚が中尊寺一山の惣持である（保持されている）ことが記されている。これらの記載から、本寺（骨寺）が中尊寺の荘園ではなくなった後も、形を変えて関わりが続いていることがわかる。

（４）骨寺村荘園遺跡の発掘調査成果

骨寺村荘園遺跡からは、縄文時代中期から弥生時代中期までの土器や石器が出土している。21年度調査で逆茂木が残る陥穴を、22・23年度で楕円形の陥穴を確認している。これらは駒形根神社西方の平泉野台地で発見しており、当該地は狩り場として機能していたことが想定される。また、不動窟でも縄文土器が出土しており、遺跡は丘陵部全体に分布するものと推定できる。

28年度調査では、平泉野台地南東部で縄文時代中期中葉の竪穴住居、土坑、ピット群からなる比較的規模の大きい集落を確認した。また、29年度調査では、平泉野台地北西部で自然堆積層中から縄文時代中期から弥生時代初頭の土器片が出土した。

不動窟では、縄文時代前期と弥生時代中期の土器が出土しているが、窟が利用されていたことを推定するまでには至っていない。その後、しばらくの間、村の様相を示す考古資料は見られない。

次に確認できるのは、9世紀後半ごろの土師器や須恵器である。21年度調査では、平泉野台地から9世紀後半ごろの内面黒色処理された土師器碗や須恵器が出土している。同時期とみられる土師器と須恵器は、24年度調査（景観保全農地整備事業に伴う緊急発掘調査）でも出土している。さらに、味ヶ沢でも同時期の須恵器片が採集されており、どうやらこのあたりから村の開発が行われたようである。ただし、遺構との関係は依然として明確ではない。

12世紀に中尊寺経蔵別当領となったことと関係する調査成果もある。遠西遺跡からは、12世紀の常滑窯産三筋壺と13世紀と推定される底部糸切りの小型かわらけが出土している。梅木田遺跡からは、遺構外ではあるが13世紀中頃～後半の龍泉窯系青磁 鑄蓮弁文碗が出土している。これら在家に関わる痕跡は本寺地区の北側丘陵部の裾部に分布し、絵図に描かれた散居形態をよく反映している。現在も山裾には屋敷が建ち並び、中世以来の景観を継承している。

さて、北側丘陵部東端に慈恵塚がある。22年度調査では塚本体および周辺部の精査を行った。直径は約10m、最大高は約2.2mで、同心円状に溝と土塁を伴うことが判明した。この形態は北東北特有の巨大経塚と酷似（関根2009）しており、村を見下ろす立地からも経塚である可能性が高い。大堀相馬窯産の土瓶や瀬戸窯産の燈明具など近世以降の遺物が出土している。

周辺の慈恵大師に関わる石造物は近世後期に建てられたものである。地誌類の整理から、塚が慈恵大師伝承と結びついたのは『封内風土記』（1772）以降であることが推定できる。つまり、塚は近世後期に「慈恵塚」と称され、再顕彰されたものと推定できる。ちなみに絵図に描かれた「慈恵柄（塚）」やその図像は後筆であることが指摘されている（大石1984）が、後筆の時期も再顕彰された後であることが推定できる。

23年度には不動窟を調査した。窟は最大高約3m、奥行き約13mの自然洞窟である。壁面に燈明具を置くための穴が、入口部には貫を通した痕跡が見つかった。おそらくある時期において扉等で窟内部を閉塞し、燈明を灯した痕跡であると考えられる。

他の調査成果としては、梅木田遺跡でも掘立柱建物を確認しているが、陶磁器類も出土している。遠西遺跡でも近世と考えられる掘立柱建物が検出されているが、出土遺物が少ないため、年代の推定

が困難である。

以上のことから、骨寺村荘園遺跡は古墳時代の時期を除き、縄文時代から現代まで人々が生活を営んでいた場所であることが想定できる。

(一関市教育委員会2015『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』「1.位置と環境」を引用、加筆)



令和5年度骨寺村荘園遺跡現地説明会（6月17日開催）の様子

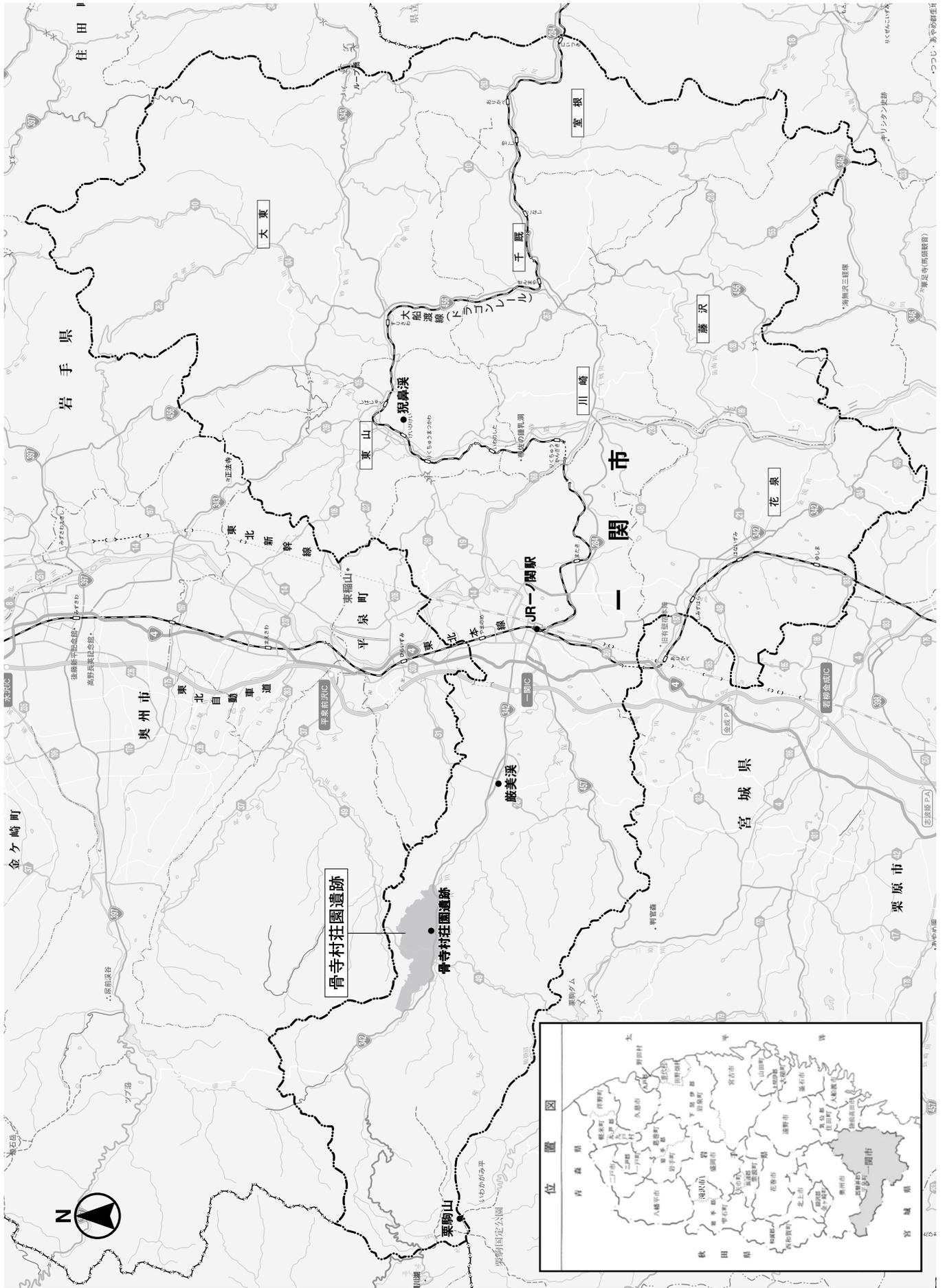


図1 骨寺村荘園遺跡位置図

2 調査に至る経緯

(1) 骨寺村荘園遺跡に係るこれまでの取り組み

平成5年2月	本寺地区全住民を会員とする美しい本寺推進本部発足、伝骨寺跡を調査
平成7年4月	『陸奥国骨寺村絵図』が国指定重要文化財となる
平成7年度	陸奥国骨寺村調査委員会（委員長、東北学院大学教授大石直正氏）発足 歴史地理・民俗、地方文書、石造物の調査部会
平成8～10年度	骨寺村荘園総合調査 一関市教育委員会主体の調査を開始、1/2000ベースマップを作成
平成11年度	中屋敷遺跡確認調査、総柱の掘立柱建物確認、用途不明の金属製品出土
平成12年度	梅木田遺跡確認調査、掘立柱建物確認 中世骨寺村荘園遺跡整備委員会、圃場整備と遺跡保存について調整を検討
平成13年度	遠西遺跡確認調査、掘立柱建物跡、かわらけ片、常滑三筋壺片出土 中世骨寺村荘園遺跡整備委員会、整備と保存の方向について答申、「骨寺村 荘園遺跡」の景観保全型の整備を提案、史跡と営農の調和を図り、文化財を 活かした地域づくりの方向性を示す
平成14年度	遠西遺跡確認調査、掘立柱建物跡確認
平成15年度	荘園遺跡属性確認調査
平成15年6月	骨寺村荘園遺跡が「平泉の文化遺産」の資産に追加
平成15年8月	骨寺村荘園遺跡調査整備指導委員会設置
平成16年3月	本寺地区地域づくり推進協議会発足、景観保全・活用、世界遺産登録に向け、 集落営農、圃場整備等の課題に取り組む
平成16年度	若神子社周辺の確認調査
平成17年3月2日	骨寺村荘園遺跡の国史跡指定が告示される 文部科学省告示第22号 (山王窟、白山社及び駒形根神社、梅木田遺跡、伝ミタケ堂跡、遠西遺跡、 要害館跡、若神子社、不動窟、慈恵塚及び大師堂(拝殿))
平成17年度	平泉野遺跡確認調査、縄文時代の石器出土
平成18年度	駒形根神社境内確認調査、字若神子東端の確認調査
平成18年7月28日	本寺地区の平野部を中心とした337.5haが国内2番目の重要な文化的景観に選 定 文部科学省告示第121号
平成18年9月14日	政府が「平泉の文化遺産」を世界文化遺産へ推薦することを決定、世界遺産 条約関係省庁連絡会議
平成18年12月26日	「平泉の文化遺産」の名称を「平泉—浄土世界を基調とする文化的景観」と した世界文化遺産登録推薦書をユネスコ世界遺産センターに提出
平成19年度	駒形151-1、153-1確認調査、縄文土器片、石器等出土
平成19年8月26～30日	イコモス現地調査
平成20年5月	イコモス「登録延期」を勧告
平成20年6月14日	岩手・宮城内陸地震（マグニチュード7.2）発生。震源地は本寺地区の西方 約3km

平成20年 7月	世界遺産委員会で「平泉—浄土世界を基調とする文化的景観」の登録延期が決定
平成21年度	平泉野遺跡（若井原188番外地点）確認調査、縄文土器、石器剥片、陥穴、9世紀代の須恵器と土師器出土
平成21年 4月 4日	国際専門家会議、推薦書作成委員会において、平成23年の世界遺産登録を目指す資産の絞り込みが提案され、世界遺産登録後の対応資産として、骨寺村荘園遺跡、長者ヶ原廃寺跡、白鳥館遺跡、達谷窟の4資産が調査の進展により段階的に拡張登録を目指す方針を確認
平成22年 1月	「平泉の文化遺産」の名称を「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」とした世界文化遺産登録推薦書をユネスコ世界遺産センターに提出
平成22年度	慈恵塚現状確認調査、精査および三次元測量の実施、近世地誌類や出土遺物、石造物の整理から慈恵大師伝承と古塚が結びついたのは近世後期と推定 平泉野遺跡（若井原194-1地点）確認調査、縄文時代の焚火跡を確認
平成22年 9月 8・9日	イコモス現地調査、調査員ワン・リジュン氏（中国イコモス国内委員）
平成23年 3月11日	14時46分頃、マグニチュード9.0の巨大地震発生（震災名：東日本大震災）
平成23年度	不動窟確認調査、精査及び三次元測量の実施、貫痕と燈明台の痕跡を確認 白山社及び駒形根神社確認調査、縄文時代の陥穴確認
平成23年 5月	イコモス「登録」を勧告
平成23年 6月29日	世界遺産委員会で「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」の登録が決定 但し、柳之御所遺跡は除く
平成23年11月14日	第1回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成24年 3月22日	第2回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成24年度	白山社及び駒形根神社確認調査、縄文時代の陥穴、十和田 a 火山灰確認 伝ミタケ堂確認調査、自然決壊による崩落岩盤確認 不動窟確認調査、基盤層とみられる自然堆積層確認
平成24年 5月18日	第3回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成24年 9月25日	骨寺村荘園遺跡を含む「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群（拡張）」が世界文化遺産暫定一覧表に記載
平成24年10月26日	「平泉の文化遺産」拡張登録に係る者（県教育長、二市一町首長）会議 開催 拡張登録に係る方針と調査計画を合意
平成25年 1月30日	第4回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成25年度	伝ミタケ堂跡確認調査、遺構・遺物ともに発見されず 不動窟確認調査、窟前面に3基の柱穴を確認 白山社及び駒形根神社（中川6地点）確認調査、土地造成と掘立柱建物確認 梅木田遺跡確認調査、13世紀とみられる龍泉窯系青磁鎗蓮弁文碗片出土
平成25年11月22・23日	平成25年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成26年 1月 7日	第5回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成26年度	白山社及び駒形根神社（中川4、6地点）確認調査、中川4地点の塚の自然

	科学分析を実施、13世紀後半と推定
	梅木田遺跡確認調査、近世中後期の遺構変遷を推定
平成26年11月29・30日	平成26年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成27年1月6日	第6回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成27年1月26日	本寺地区の一部6.7haが重要文化的景観に追加選定 文部科学省告示第6号
平成27年度	白山社及び駒形根神社（中川6地点）確認調査、平場の造成時期を17世紀以降と結論付け 梅木田遺跡確認調査、17世紀以降掘立柱建物確認 平泉野遺跡（若井原194-115地点）確認調査、17世紀以降の段切り造成区画確認
平成27年11月14・15日	平成27年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成28年1月5日	第7回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成28年度	梅木田遺跡確認調査、掘立柱建物確認 白山社及び駒形根神社（駒形5、若井原194-1地点）確認調査、縄文土器、住居跡確認 平泉野遺跡（中川9、若井原194-115地点）確認調査、35m以上の溝確認、塚の構築年代を16世紀遺構と結論付け 山王窟三次元測量
平成28年8月4～6日	平泉の文化遺産世界遺産拡張登録委員と海外専門家との意見交換会 開催 （第8回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会と位置付け）
平成28年10月3日	第9回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成28年12月3・4日	平成28年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成29年1月12日	第10回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成29年度	平泉野遺跡（中川9、若井原194-1地点）確認調査、側溝とみられる溝2条、竪穴状遺構確認
平成29年6月22日	第11回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成29年8月5日	「平泉の文化遺産」国際会議 開催（平成29年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会と位置付け）
平成29年8月6日	第2回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録委員と海外専門家との意見交換会 開催（第12回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会と位置付け）
平成29年9月8日	第13回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成30年3月7日	第14回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成30年度	平泉野遺跡（中川9、若井原194-1、194-2地点）確認調査、竪穴状遺構、フラスコ状土坑確認 駒形45-4地点確認調査、柱穴、土坑確認
平成31年3月23日	第15回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
令和元年度	駒形45-4地点確認調査、遺構は発見されず、自然科学分析を実施し縄文時代と推定
令和2年度	駒形4-1地点確認調査 土坑確認
令和3年3月12日	第16回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催

令和3年度	駒形1-1地点確認調査
令和3年9月19日	骨寺村莊園遺跡研究集会 開催
令和4年1月6日	第17回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
令和4年3月18日	第18回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
令和4年度	平泉野遺跡（若井原194-1）確認調査、竪穴住居、竪穴遺構確認 白山社及び駒形根神社（駒形8-1）確認調査、8世紀の土師器確認
令和4年8月18日	第19回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
令和5年度	白山社及び駒形根神社（駒形8-1）確認調査、鉄磬、13世紀の灯明皿出土 慈恵塚確認調査 山王窟確認調査
令和5年8月30日	「平泉の文化遺産」拡張登録に係る関係者会議において、柳之御所のみを推薦書素案作成、関連資産を含んだ10資産を「ひらいずみ遺産」と位置づけ、一体的な保存管理・調査研究・活用及び発信に取り組むことを確認

(2) 令和5年度調査に至る経緯

一関市教育委員会は、平成8年度から骨寺村莊園遺跡の調査を始め、11年度から発掘調査を実施している。目的は、『陸奥国骨寺村絵図』の現地である本寺地区で、絵図に描かれた田圃、在家、宗教施設の痕跡を確認することである。

調査の結果、本寺地区北側の山裾には在家とみられる遺構が多く、その一部から中世の遺物が出土した。一方、宗教施設の調査については、令和5年度調査により駒形根神社境内から鉄磬が出土したことで、現在の宗教施設が中世に遡る可能性を見出した。今後の調査研究の進展が期待される。

市教育委員会は、平成15年から骨寺村莊園遺跡を平泉の文化遺産の一つとして、世界文化遺産への登録を推進してきた。しかし、20年に平泉は登録延期となり、骨寺村莊園遺跡は資産候補から外れ拡張登録を目指すことになった。その後、23年に「平泉一仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」が世界文化遺産に登録され、翌24年には、骨寺村莊園遺跡のほか、柳之御所遺跡、達谷窟、白鳥館遺跡、長者ヶ原廃寺跡の5つの拡張予定資産を想定した、「平泉一仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群（拡張）」が世界遺産暫定一覧表に記載された。

これを受け、拡張登録を目指す関係市町間で25～29年度、さらに平成30～令和4年度まで延長して調査を実施したが、拡張登録につながる顕著な普遍的価値の証明に至らなかった。令和5年の県市町関係者会議により、柳之遺跡のみの推薦書素案作成、関連資産を含む10資産を「ひらいずみ遺産」と位置付け、一体的な保存管理・調査研究・活用及び発信に取り組むこととなった。

令和5年度は、平成21年度から実施している発掘調査計画を改定した第3期計画（令和4～8年度）の2年目にあたる。駒形根神社境内に加え、慈恵塚、山王窟を調査した。

これまで（平成11～令和5年度）調査した地点を図2-1、図2-2、表1に示した。

（一関市教育委員会2023『骨寺村莊園遺跡確認調査報告書』「2 調査に至る経緯」を引用、加筆）
（菅原）

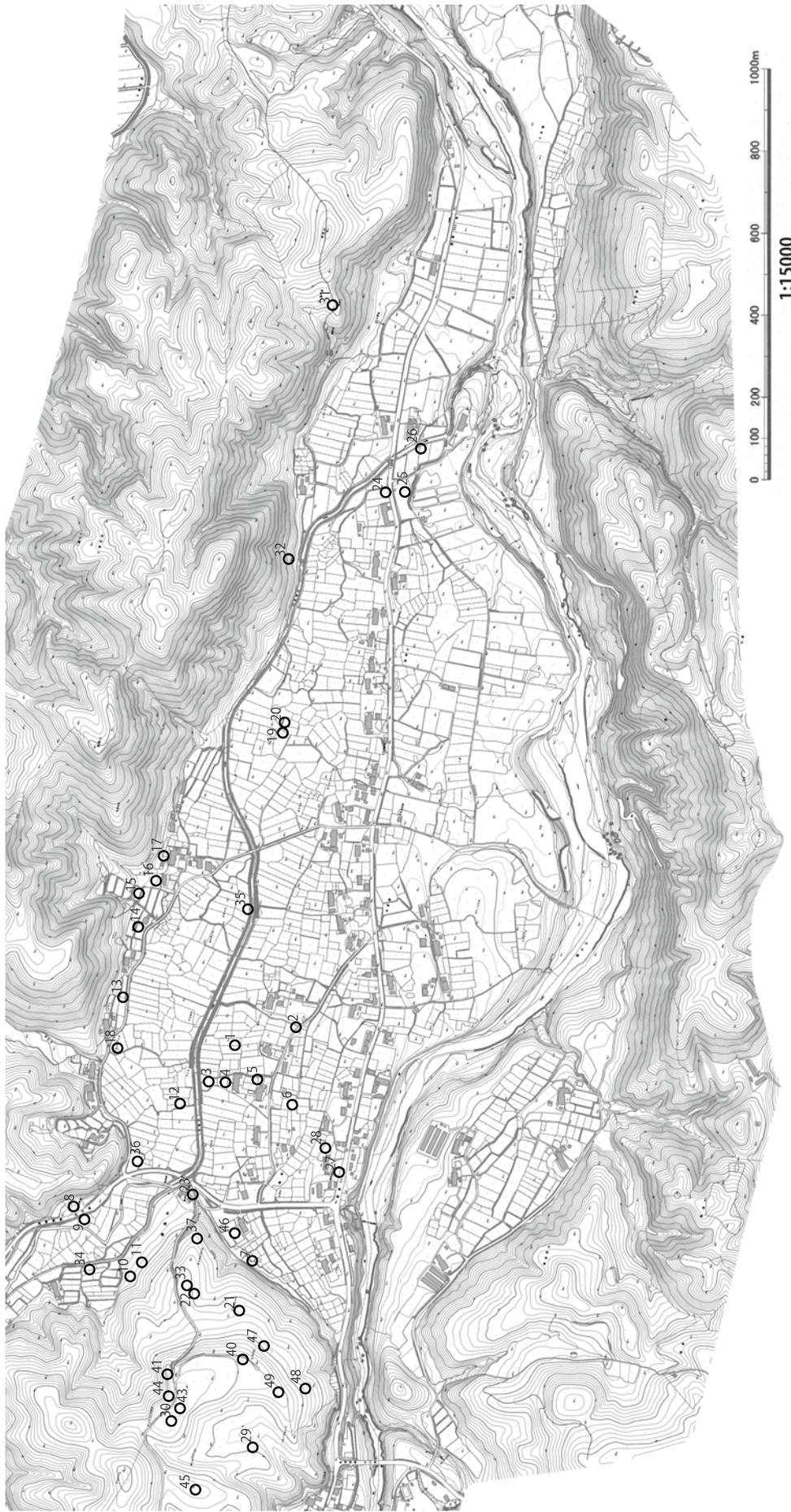


図2-1 骨寺村荘園遺跡における既調査地点（1）

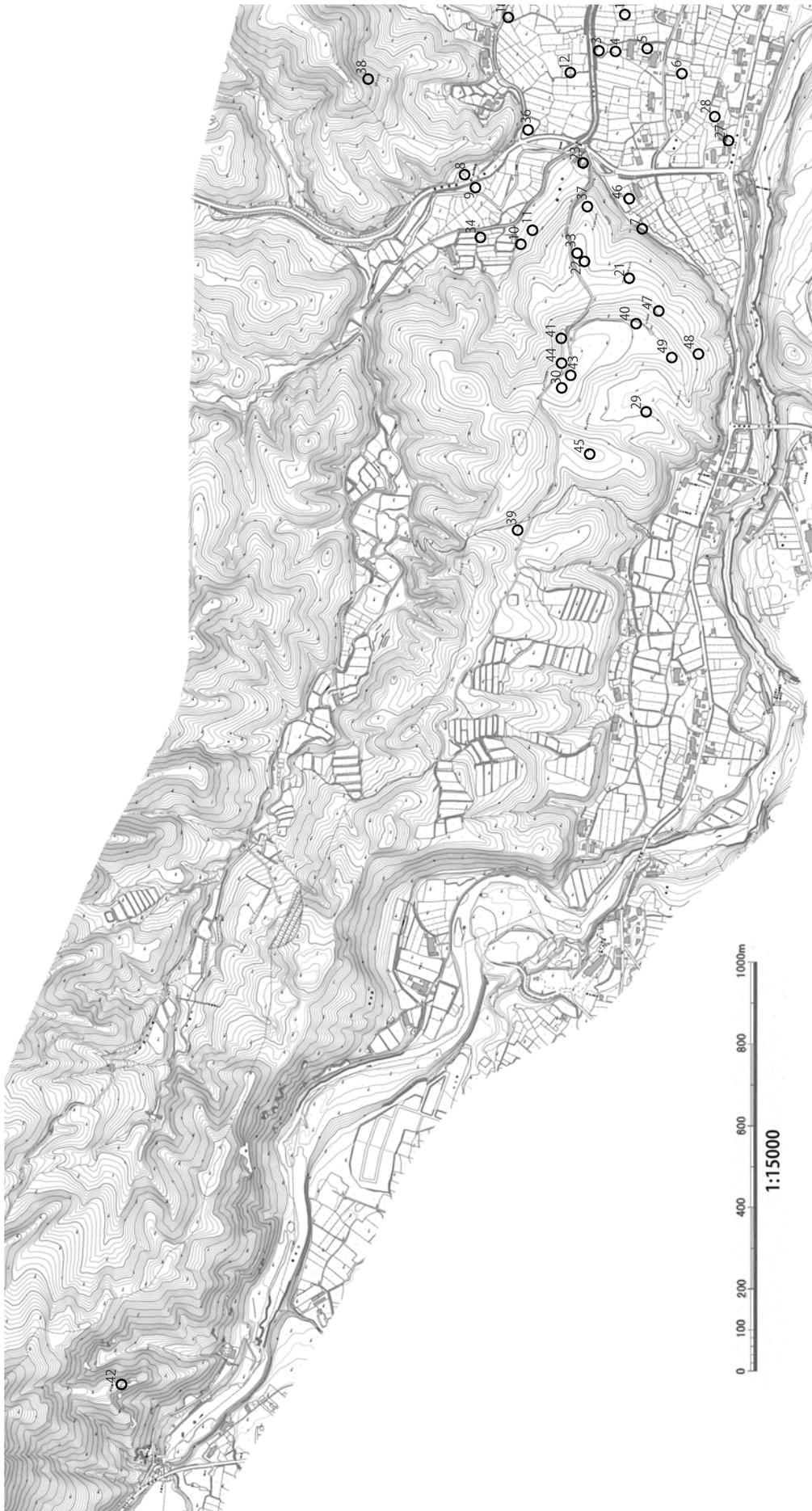


図2-2 骨寺村荘園遺跡における既調査地点（2）

番号	調査地	遺構・遺物	調査年度
1	沖要害52-1	なし	平成11年度
2	沖要害72、77、本寺中屋敷遺跡	掘立柱建物、石組井戸、銅製品	平成11年度
3	駒形85-1	柱穴、柱根、木製品	平成11年度
4	駒形86	小穴	平成11年度
5	駒形89-2	銅製品	平成11年度
6	駒形96-1、107-1	なし	平成11年度
7	駒形40-2、44	なし	平成11年度
8	中川32-1、梅木田遺跡	掘立柱建物、溝、柱根、陶器、中国産磁器	平成12・25～27年度
9	中川28-1、35	なし	平成12年度
10	中川6	近世造成面、掘立柱建物、建物礎石、池状遺構、近世磁器	平成12・25～27年度
11	中川4	塚	平成25・26年度
12	要害141-4、146-3	なし	平成12年度
13	要害118、119	なし	平成13年度
14	要害79-1、114-1、115-21、遠西遺跡	掘立柱建物、柱穴、土坑、井戸、溝、柱根、常滑三筋壺片、かわらけ片	平成13・14年度
15	要害70、72	柱穴、井戸、焼土・炭化物	平成14年度
16	要害69-1	なし	平成13年度
17	要害23、54-1	近世板蔵基礎	平成13年度
18	要害127-2	なし	平成14年度
19	若神子31-2、若神子社	石祠	平成16年度
20	若神子43、45、46	なし	平成16年度
21	駒形5、白山社及び駒形根神社	炭窯跡	平成17年度
22	駒形5、白山社及び駒形根神社	石匙	平成17年度
23	駒形8-1、白山社及び駒形根神社	小穴、石鏃、土師器片、かわらけ（灯明皿）、陶磁器片、鉄磬、鉄釘、近代銭	平成18・令和4・5年度
24	若神子85-3、87-1、90-4、92-2	なし	平成18年度
25	若神子88-1	なし	平成18年度
26	若神子81、86-1、86-4	なし	平成18年度
27	駒形153-1	なし	平成19年度
28	駒形151-1	溝、縄文土器片、石器	平成19年度
29	若井原188、194-35、194-36、平泉野遺跡	落とし穴、旧流路、縄文土器片、石器、土師器片、須恵器片	平成21年度
30	若井原194-1、平泉野遺跡	焚火跡、縄文土器片、石器剥片	平成22年度
31	下真坂25-5、25-7、慈恵塚	周溝、陶器片、石製品、鉄滓、銭貨	平成22・令和5年度
32	下真坂80-2、不動窟	洞窟、柱穴、縄文土器片、弥生土器片、石器剥片、近世銭	平成23～25年度
33	駒形5、白山社及び駒形根神社	土坑、縄文土器片、石器	平成23年度
34	中川19-1	土坑、縄文土器片、石器	平成20年度
35	要害59-1	小穴	平成20年度
36	要害194-1、194-2	柱穴、土師器片、須恵器片	平成23・24年度
37	駒形7、白山社及び駒形根神社	落とし穴、縄文土器片、石器剥片	平成24年度
38	要害204-1、伝ミタケ堂跡	なし	平成24・25年度
39	若井原194-115、平泉野遺跡	近世磁器、縄文土器片	平成27・28年度
40	若井原194-1、駒形5、白山社及び駒形根神社	竪穴住居、土坑、溝、縄文土器片、土偶、石器、近世陶磁器片	平成28年度
41	中川9、平泉野遺跡	道路遺構	平成28・29年度
42	若井原194-33、山王窟	近世石造物、土器、石器、鉄製品、銭貨	平成28・令和5年度
43	若井原194-1、平泉野遺跡	竪穴状遺構、縄文土器片、弥生土器片	平成29・30年度
44	中川9、平泉野遺跡	土坑、縄文土器、石器、陶器	平成30年度
45	若井原194-2、平泉野遺跡	溝	平成30年度
46	駒形45-4	土坑、ピット、縄文土器片、石器、土師器片、須恵器片、陶磁器片	平成30・令和元年度
47	駒形4-1	土坑、縄文土器片、礫石器、石製品	令和2年度
48	駒形1-1	炭窯跡、土坑、柱穴状ピット、溝、縄文土器片、石器	令和3年度
49	若井原194-1、平泉野遺跡	竪穴住居、竪穴遺構、土坑、落とし穴、埋設土器、柱穴状ピット、縄文土器片、石匙、削器、匏型石器、磨製石斧、磨石、凹石、台石、剥片、黒曜石	令和4年度

※番号は図2-1、図2-2と対応

表1 骨寺村荘園遺跡における既調査地点一覧表

3 白山社及び駒形根神社の調査

調査地点は、平泉野台地の北側斜面の南北に伸びる低位段丘上にあり、一関市巖美町字駒形8-1に所在する(図3)。白山社の北東約430mにある。標高は約183~184mである。駒形根神社境内を築造する際に、北西側にある南西から北東に伸びる尾根を削平し造成された平坦地である。駒形根神社と神楽殿に挟まれた南東側の平坦地及び斜面である。

『陸奥国骨寺村絵図』の簡略絵図では、「骨寺跡」の文字が見え、その東側に9個の礎石が描かれ、「六所宮」が書かれている。調査地点はその周辺にあたるものと考えられる。

今回の調査は、令和4年度の確認調査で、8世紀代の土師器坏形土器の破片が出土したことから、今年度はさらに南東側に拡大して調査区を設定して行う確認調査である。

調査期間は令和5年4月11日~6月23日、調査面積は約50㎡である。

調査区は拝殿と神楽殿に挟まれ場所を大きく40mごとにⅠ区、Ⅱ区のブロックに分け、さらに東西を西から4mごとに1、2、3・・・とし、南北を南から4mごとにa、b、c・・・とし、グリッドをⅠ1j、Ⅱ2a、Ⅱ3a、Ⅱ2b、Ⅱ3b、Ⅱ3b、Ⅱ2c、Ⅱ3cと呼ぶことにした。調査は土層観察用のベルトを設定し、手掘りで表土を掘り下げ、地山である黄褐色土の上面まで層ごとに掘り下げ、遺構、遺物の検出を行った。

図面の作成に当たっては、下記の基準杭の座標を基にして実測を行った。写真撮影は一眼レフ・デジタルカメラを用いた。

利用した測量基準杭の成果は以下の通りである。

基R4-No3 X = -113518.970、Y = 10025.534、H = 184.509

基R4-No4 X = -113530.681、Y = 10035.342、H = 183.704

調査の結果、新たな遺構はなく、遺物は、土師器、陶磁器、鉄製品(鉄磬、経筒の蓋、角釘)、銭貨、石製品、石器、フレークである。調査終了後、残土を用いて、人力で埋め戻し、現状の回復を行った。

(1) 基本土層

調査区南側のグリッドⅡ2a・3a、北側のグリッドⅡ2c・3cの土層を整合させながら基本土層とした。調査区南側には少なくとも2回、北東側には1回の人為的堆積層がみられる。

Ⅰ a 層：10YR2/3黒褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。表土。層厚約10cm。

Ⅰ b 層：10YR6/8明黄褐色砂質土。ややしまっている。粘性なし。径3~10cm大の亜円礫を少量含む。造成土①(人為的堆積土)、縄文土器片、石器、フレークを含む。層厚10~20cm。

Ⅰ c 層：10YR3/4暗褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。グリッドⅡ3aで陶器、寛永通宝を含む。旧表土。層厚20~30cm。

Ⅰ d 層：10YR5/6黄褐色砂質シルト層。しまっていない。粘性なし。全体に小円礫を多く含む。径10~20cm大の円礫を南側にやや多く含む。グリッドⅠ1j、Ⅱ2a・3a区で確認できる。造成土②(人為的堆積土)。層厚20~30cm。

Ⅱ a 層：10YR3/3暗褐色砂質シルト。しまっている。粘性なし。径5~10cm大の亜角礫を少量含む。褐色(10YR4/4)砂質シルトの小ブロックを少量含む。木痕による攪乱あり。銭貨、陶磁器、鉄製品(轡)を含む。寛永通宝が出土している。層厚10~30cm。

Ⅱ b 層：10YR3/3暗褐色砂質土。ややしまっている。粘性なし。下位に径10~20cm大の亜円礫を少

量含む。Ⅱa層より黒色帯びている。層厚約20cm。

※Ⅱa、Ⅱb層は独立した基本土層としてもよいと考えられるが、遺物を取り上げる際に、Ⅱ層上部、Ⅱ層下部、Ⅱ層として遺物を取り上げたため、整合性をとるため、Ⅱa層、Ⅱb層とした。

Ⅲ層：10YR2/2黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。下位層離面に径20cm大の亜円礫を少量含む。主に調査区中央（グリッドⅡ2a・3a、2b・3b、2c・3c）で確認できる。土師器、赤焼土器、かわらけ（灯明皿）を含む。層厚10～40cm。

Ⅳ層：10YR5/6黄褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。上位の層離面に径20cm大の亜円礫。下位の層離面に径20～40cm大の亜円礫をやや多く含む。地山。層厚20cm以上。

（2）確認した遺構と遺物（第4～10図、写真図版1～6）

調査区から巨木の根が検出されているが遺構は検出されていない。遺物は土師器3点（D2～D4）、赤焼土器1点（D1）、土器1点（D6）、縄文土器1点（D5）、陶器3点（T1～T3）、磁器9点（G1～G9）、鉄製品8点（F1～F8）、鋳銭7点（C1～C7）、石器類9点（S1～S9）が出土している。

土器 D1はグリッドⅡ2b区Ⅲ層の出土で、赤焼土器坏形土器の底部片である。ロクロ使用で、回転糸切痕があり、内面はロクロナデのみで、黒色処理は施されていない。平安時代後期に属すると考えられる。D2はグリッドⅡ2a区Ⅲ層の出土で、土師器甕形土器の頸部片である。ロクロ不使用で、内外面をヨコナデで調整されている。内面に輪積み痕がみられる。平安時代後期のものとする。D3はグリッドⅡ2b区Ⅱ層相当で、川原石で囲まれた窪み状の中から底が上を向いて出土したかわらけである。ロクロ使用でロクロ痕がある。底部には緻密な回転糸切痕がみられる。内面は全体をナデで、外面は下端の一部をナデで再調整されている。色調は橙色系で、胎土は砂粒などが入りやや粗い。底部内面は再調整で緩い凹凸がある。口縁部内面の上部には煤が付着し、底部内面中央部には1カ所、火熱により赤変している。器形は体部が底面から外傾しながら口唇部につながるものである。法量は口径9.4cm、底径7.6cm、高さ1.4cmである。灯明皿である。時期は鎌倉時代後期、13世紀後半から14世紀に位置づけられるものである。

D4はグリッドⅡ2b区Ⅲ層の出土で、土師器坏形土器の体部片である。ロクロ使用で、内面をヘラミガキ後、黒色処理が施されている。内面に炭化物が付着している。時期は平安時代である。D6はグリッドⅠ2d区Ⅰ層の出土で火消し壺土器の体部、底部片である。ロクロ使用で外面のロクロ痕は顕著である。底部外面は黒色になっている。外面下端をヘラケズリで調整されている。内面底部には火熱を受け変色している箇所がある。蓋つきの火消し壺であるが、蓋は検出されていない。時期は江戸時代以降である。D5はグリッドⅡ3a区Ⅰb層の出土で、縄文土器鉢形土器の口縁部片である。造成土の中からの出土である。外面に斜縄文（単節RL）、内面にも一部縄文（RL）が施されている。外面に炭化物が付着している。時期は縄文時代後期と推定される。

陶器 T1はグリッドⅡ2b区Ⅱ層の出土で、土瓶で口辺部が内傾している。外面と口唇部の内面に釉が施されている。口径は推定6.8cmである。在地産で時期は江戸時代後期から明治時代、19世紀のものである。T2はグリッドⅡ2a区Ⅰc層の出土で、T1と同一の土瓶の体部片である。T3はグリッドⅡ2a区Ⅰc層の出土で、在地産の瓶体部片である。内外面に灰色の釉が施されている。内面のロクロ痕の凹凸は大きい。時期は江戸時代後期から明治時代、19世紀と考えられる。

磁器 G1、G2はグリッドⅠ3j区Ⅰc層の出土で、小碗の口縁部片である。内外面に緑色の釉が施されている。外面は縦位の沈線を施した後に施釉され、緑色の濃淡がある。内径は推定7.6cmである。湯呑みとして使用されていたものである。時期は江戸時代以降である。G3はグリッドⅡ2a区Ⅱ層の

出土で、瓶の体部片である。肥前産の染付で、時期は江戸時代以降である。G4はグリッドⅡ3c区Ⅰ層の出土で、瓶の体部片である。肥前産の染付である。内面にも釉が施されている。時期は江戸時代である。G5はグリッドⅡ0c区Ⅰ層の出土で、盃の底部片で、台の口径は3.1cm、残存器高は2.7cmである。内外両面に釉が施されている。底部外面委は、赤色の「陶壱製陶」の字が打たれている。時期は明治時代以降である。G6はグリッドⅡ4b区Ⅱ層の出土で、盃の底部片である。台の口径は2.7cm、残存器高は1.5cmである。両面に釉が施され、外面には青色の平行線、連続U字形文が描かれている。底面の外面に青字で「カ」に小さな丸が打たれている。時期は明治時代以降である。G7はグリッドⅡ2a区Ⅱ層の出土で、碗の口縁部片である。口径推定9.6cm、残存高2.1cmである。内外面に釉が施され、外面には花鳥文が描かれている。型紙刷りである。時期は明治時代以降、19世紀から20世紀前半である。G8はグリッドⅡ2b区Ⅱ層からの出土で、碗の口縁部片である。G7と接合する。G9はグリッドⅠ2d区Ⅱ層の出土で、湯呑み碗の口縁部片である。口径推定7.2cm、残存高3.1cmである。内外面に釉が施され、外面に2色で花文が描かれている。内面の口唇部に釉が施されていないことから、蓋付き湯呑み碗である。時期は明治時代以降である。

鉄製品 F1はグリッドⅡ3a区Ⅱ層上部の出土で、鉄製の経筒蓋の一部であると推定される。蓋は口縁部から屈曲して天井部へと伸びている。天井部はやや膨らみをもって中央につながっている。端部はやや丸味を帯びている。天井部外面には圏線は巡っていない。推定口径は8.3cmで、最大の厚さは0.6cmである。内外面に錆が多く付着しているが、中身の鉄部分は断面から容易に把握でき、本来の質感は大きく損なわれていない。時期は鎌倉時代から江戸時代に属すると考える。

F2はグリッドⅡ2a区Ⅱ層の出土で、やや緩く湾曲している鉄製の平板である。内外面に錆がやや付着しているが、中身はしっかり保たれている。経筒の蓋の一部かと推定されるが、詳細は不明である。台形状の破片に切られており、再利用の材料である可能性も考えられる。時期は鎌倉時代から江戸時代に属する。

F3はグリッドⅡ3a区Ⅱ層の出土で、鉄製の蓋の一部と推定される。口辺部から屈曲し平らに1.5cmほど経て急に鋭く立ち上がる形状を呈している。端部は角ばっている。小破片で錆化が進み原形をとどめない部分もある。形状から小さなつまみ上をもつ蓋と推定される。再利用のための破片とも考えられる。時期は出土地点から江戸時代に属するものと推定される。

F4からF6は角釘で、出土地点はF4がグリッドⅡ3b区、F5がグリッドⅡ2a区、F6がグリッドⅡ3a区で、F4、F5がⅡ層、F6がⅡ～Ⅲ層である。F4とF5は曲がっており、F5は一方の先端が先細っている。時期はF4、F5は江戸時代、F6は鎌倉時代から江戸時代であると推定される。

F7はグリッドⅠ3d区Ⅱ層の出土である。鉄製轡の一部と考えられる。時期は鎌倉時代から江戸時代に属すると考えられる。

F8はグリッドⅡ2a区Ⅱ層の出土である。鉄製の磬で、素面の片面である。左右下端の先が両方とも欠損している。上縁左側には紐孔が半円状に突出した形で作られている。右側は破損しているが孔の一部だけが確認できる。ほぼ中央部には「大」の文字の陽鑄がある。「大」の右側のはねが左に比べて短く、文字以外の文様は描かれておらず、また撞座はみられない。裏面は無文である。上縁の形状は中央部が宝朱状に膨らみ、大小の2つの弧線の組み合わせ状になっている。側縁は台形状に下方に斜めに開く形で直線状に伸びているものと推定される。ただし、両下端側が欠損しているため、詳細は不明である。下縁は中央部の弧から大小2つの弧線を組み合わせたものになっているものと推定される。縁の内側に子縁と呼ばれる縁取りの稜線は描かれていない。現存での裾幅は15.5cm、肩幅6cmである。錆化が激しく、欠損している右側の先端はくずれかかっている。時期は、平安時代後期

から鎌倉時代と考えられる。

銭貨 銅銭7点(C1～C6)、鉄銭1点(C7)が出土している。古寛永は2点(C1、C5)である。C1はグリッドⅡ2c区Ⅱ層、C5はグリッドⅡ2a区Ⅱ層の出土である。新寛永は4点(C2、C3、C4、C6)である。C2、C3はグリッドⅡ3b区Ⅰc層、C4はグリッドⅡ2a区Ⅱ層、C6はグリッドⅡ3a区Ⅱ層から出土している。C6は文銭である。裏に「文」の文字がつけられている。古寛永は17世紀中葉以降、新寛永は17世紀後葉以降に流通している。C7は鉄一文でグリッドⅡ3a区Ⅱ層から出土している。時期は18世紀中葉以降である。

石器・石製品類 S1はグリッドⅡ3a区Ⅱ層の出土で、上面に3個、側面に3個、下面に1個の孔をもつ凹石である。孔の長径は1cm前後、深さは5mm前後で、形状は不整長方形、不整三角形である。長径5.5cm、厚さ3.6cmである。孔は自然のものと思われる。多孔の石を意図的に運んできたものと考えられる。石質は泥岩である。S2はグリッドⅡ2a区Ⅱ層出土で上面と側面が人為的に擦られている石製品の一部である。上面・下面・側面1つが擦られている扁平な石製品で片側が欠損している。残存形体は台形を呈している。長径4.1cm、厚さ1.5cmである。製品名は不明である。石質はデイサイトである。S3はグリッドⅡ3a区Ⅱ層出土で、上面と側面が擦られている石製品の一部である。欠損していない上面と3側面は丁寧に擦られて加工されている。残存する形状は五角形で、長径5.5cm、厚さ2.3cm、石質は砂岩である。扁平な台形状を呈していたかもしれない。用途、時代は不明である。S4はグリッドⅡ3b区Ⅱ層の出土で、台石である。扁平な不整台形で、長径は15.6cm、厚さは5cmで、両面に使用痕の擦痕がみられる。縄文人が使用した石を後世に再利用したものである。S5は排土からの出土で、台石である。片側が欠損している。残存する形状は不整台形で、長径12.9cm、厚さ5.1cmである。上面に擦痕がみられる。石質はデイサイトである。S4と同じく再利用されたものである。S6はグリッドⅡ2a区Ⅱ～Ⅲ層の出土で、上面が丁寧に擦られて加工されている石製品で一部欠損している。扁平で長径14cm、厚さ2.7cmである。擦られた上面に、線刻されたと推定される図柄が一部見えるが何であるかは不明瞭で、結論は出していない。ここでは石製品とした。石質は泥岩である。S7はグリッドⅡb区Ⅱ層の出土で、一部欠損している石製品である。上面を赤色の顔料で塗っており、下面には擦痕がみられ加工している。残存する形は台形で、右側と下側が欠損しているものである。長径3.6cm、厚さ1.6cmで、石質は泥岩である。用途は不明である。S8はグリッドⅡ3b区Ⅰ層の出土の凹石である。形状は不整菱形を呈し、長径7.6cm、厚さ2.3cmの扁平なものである。孔の形状はほぼ円形で長径1.6cm、深さ1.1cmである。自然の孔に手を加えて大きくしたと推定される。人間が運んできたものと考えられる。石質はデイサイトである。S9はグリッドⅡ2b区Ⅱ層出土のフレークである。長径5.6cm。厚さ1.3cmで、石質は頁岩である。

骨 B1、B2はグリッドⅡ0c区Ⅰ層から出土した馬歯である。土の状態から明治時代以降に埋められたものと考えられる。

(3) まとめ

現在の駒形根神社及びその周辺は、鎌倉時代の『陸奥国骨寺村絵図』に描かれている六所宮に比定されてきた。今回の確認調査で、出土した鉄磬は県内では5例目で、岩手町黄金堂遺跡(2点)、二戸市不動館遺跡、北上市上須々孫館遺跡に次ぐものである。本遺跡として梵音具の仏具は最初であり、現在の駒形根神社周辺で平安時代以降に仏事を行う宗教施設が存在することが、考古学的に裏付けられたことになった。さらに、13世紀後半から14世纪初にかけてのかわらけ(灯明皿)が出土し、その存在がより確かなものとなった。過去の調査で遠西遺跡から13世紀代と推定されるかわらけが2点出土

しているが、いずれも小破片のため機能、時期も断定できるものではなかった。今回出土のかわらけは底部から口縁部まで半分以上あり、内外面の調整痕、ロクロ回転糸切り痕が明瞭にわかり、しかも内面に煤の付着、火熱による斑状の赤変が確認でき、灯明皿と確定できるものであった。また経筒の蓋と推定される鉄製品も出土している。鉄磬、経筒の蓋、かわらけの3点の出土は、『陸奥国骨寺村絵図』の宗教施設の存在を考古学的に実証できるものであり、非常に貴重な発見といえる。

令和4年度の調査では、拝殿と神楽殿の平坦地は北西側の尾根を削平して、北東側、東側、南東側の縁辺部側が造成されたことが判明した。さらに今回の調査では、南東側の土層の断面（グリッドⅡ2a・3a）から、少なくとも2回以上の造成が繰り返され、拡張されていたことが確認できた。詳しくは調査区南東側の斜面方向、グリッドⅠ1jからⅡ2a・3aにかけての地点である（図5を参照）。造成土①（Ⅰb層相当）の下位（Ⅰc層相当）から寛永通宝（C2、C3）、磁器（G1、G2）が出土している。造成土②の下位のⅡ層からも寛永通宝（C4、C5）が出土している。したがって17世紀以降の江戸時代の間にも少なくとも2回の拡張工事が行われていたことがわかる。造成土①と造成土②の間には暗褐色土層が20～30cm形成されており、ある程度の時間差があったことが確認できる。具体的な時間差はわからない。造成土①は江戸時代以降、造成土②は江戸時代のものと考えられる。総合的に考えると、江戸時代以降の時期に大がかりな造成工事が複数回に渡って行われ、境内の整備がおこなわれていたことが明らかになった。確認調査をさらに南東から西側に広げることで造成の規模が判明すると思われる。

調査区のグリッドⅠ1j、Ⅱ3b、Ⅱ3cの場所から境内の法面に植えられていたと考えられる木の根がJ字形に並ぶ形で検出され、境内の旧地形を復元する手掛かりが得られた。

令和4年度の調査では奈良時代後半の土師器坏形土器が見つかり、今回の調査では平安時代の土師器坏形土器・甕形土器、鎌倉時代のかわらけ（灯明皿）、鉄磬、江戸時代の銭貨（寛永通宝）、陶磁器、明治時代以降の銭貨、陶磁器が出土した。これらのことから、現在の駒形根神社が存在する境内は、平安時代から現代に至るまで、人々に利用されてきた神聖な土地であったといえる。

調査を実施した駒形8-1地点は、地形的に北西から南東に楕円状に広がる低位段丘の南東縁部にあたる。この段丘の中央部には、13世紀と推定されるものを含む塚が約30基（平成26年度発掘調査）検出されている。段丘が乗るこの平坦面は、鎌倉時代からの神聖な場、霊場として人々に認識されていたことが今までの調査からいえると考えられる。今後、駒形根神社周辺の発掘調査を計画しており、これから更なる遺構、遺物を検出することにより、さらに骨寺村荘園遺跡の実像解明が進むと確信している。

（光井）

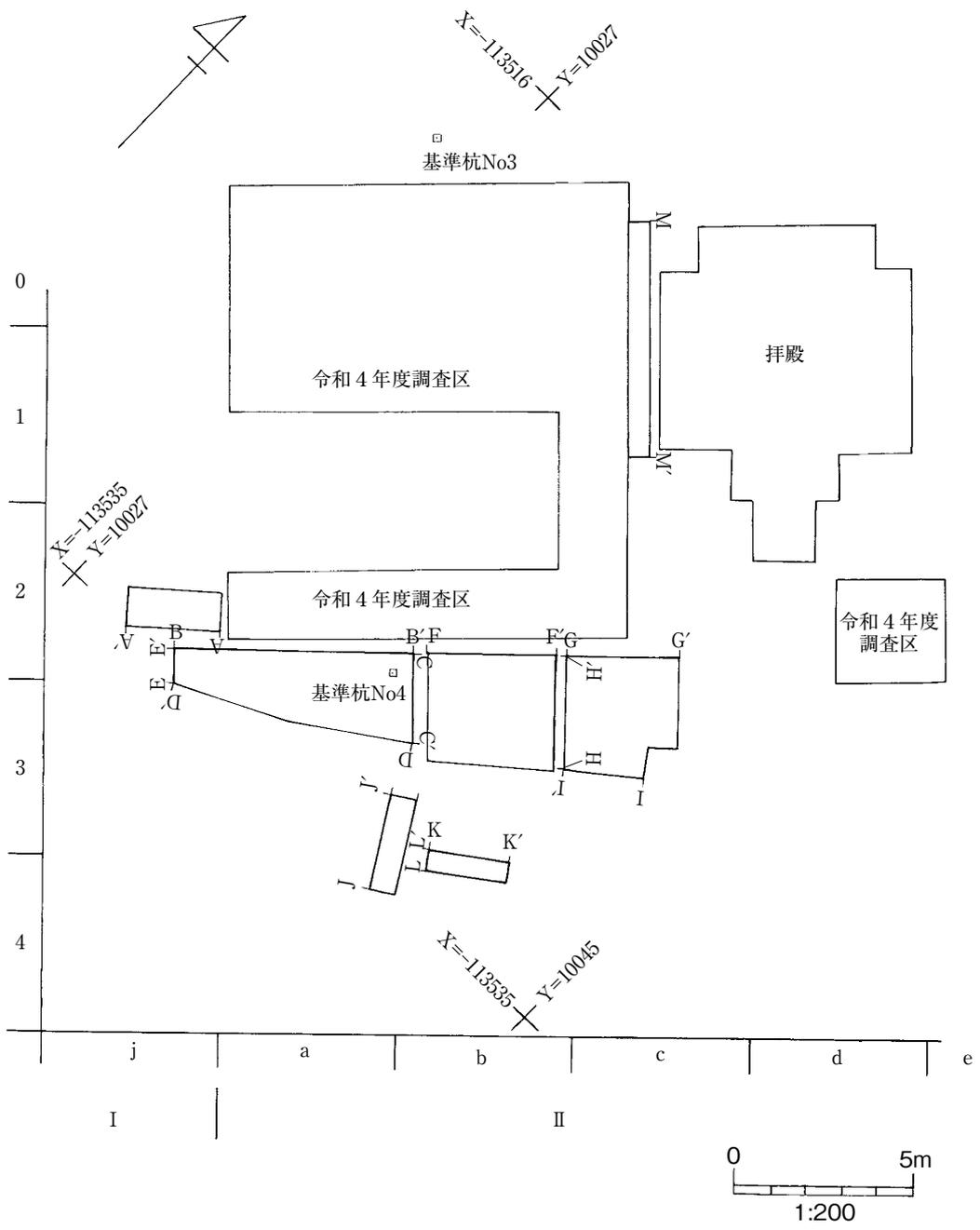


図4 駒形根神社調査区配置図

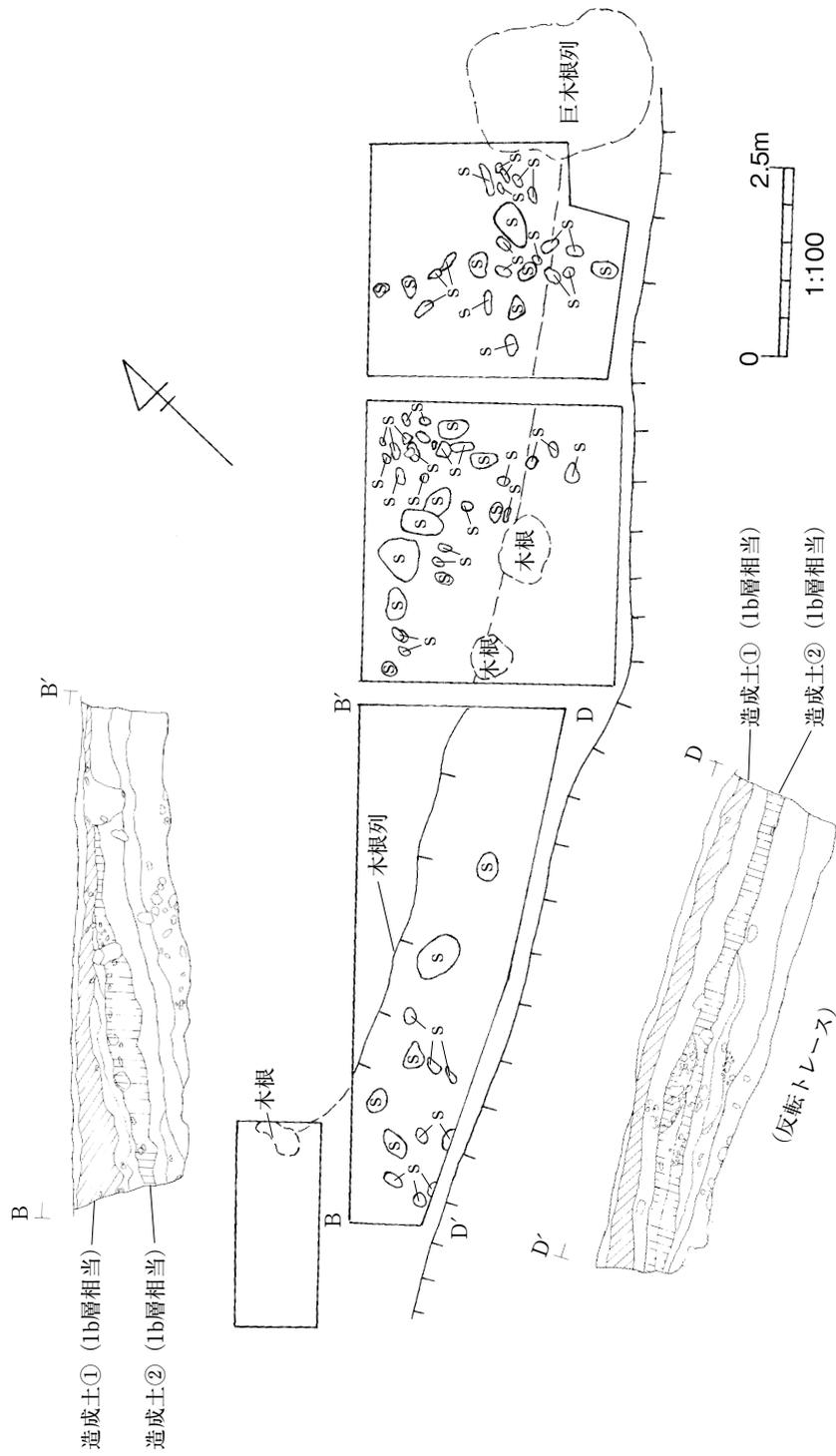
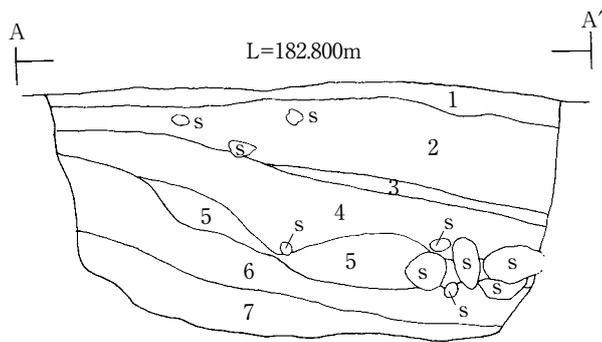


図5 駒形根神社遺構図

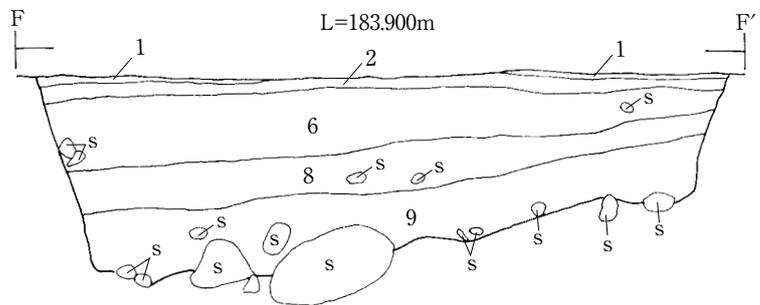
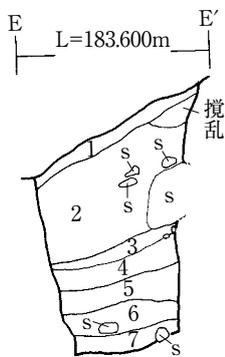
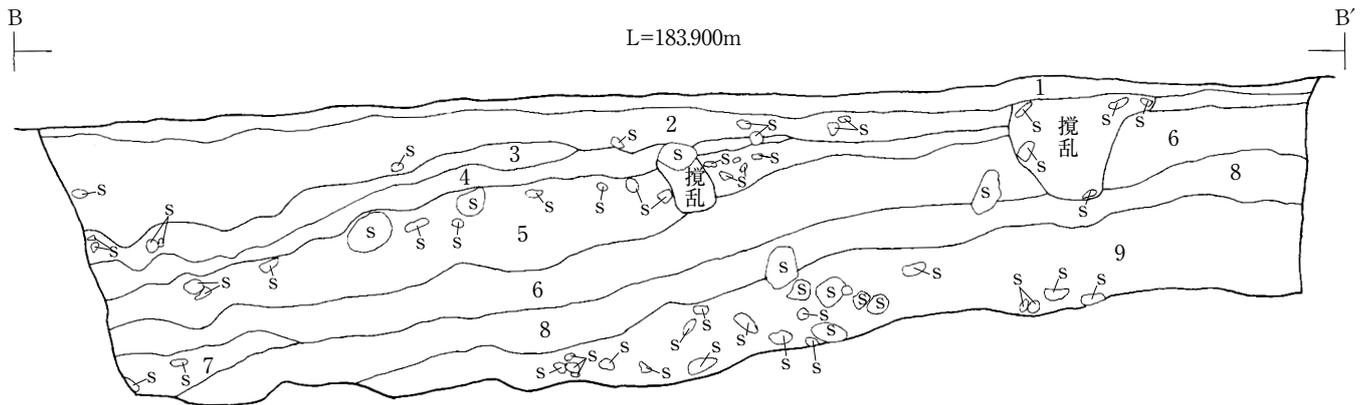


I 2j 区西断面

土層注記 (A-A')

- 1 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。しまっている。粘性なし。表土。(I a層相当)
- 2 10YR5/6 黄褐色砂質シルト。しまっている。粘性なし。径5~10cm中心の円礫をやや多く含む。全体に径2cm大の小円礫を多く含む。人為的堆積土。(I b層相当)
- 3 10YR3/3 暗褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。径5cm大の円礫をやや多く含む。(I c層相当)
- 4 10YR5/6 黄褐色砂質シルト。しまっている。粘性なし。全体に径5cm未満の小円礫を多く含む。人為的堆積土。(I d層相当)
- 5 10YR4/4 褐色砂質シルト。しまっている。粘性なし。径20~30cm大の亜円礫を南側に多く含む。(I d層相当)
- 6 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。やや粘性あり。全体に径5cm未満の小円礫をやや多く含む。(II a層相当)
- 7 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。径5cm未満の小円礫を少量含む。(II b層相当)

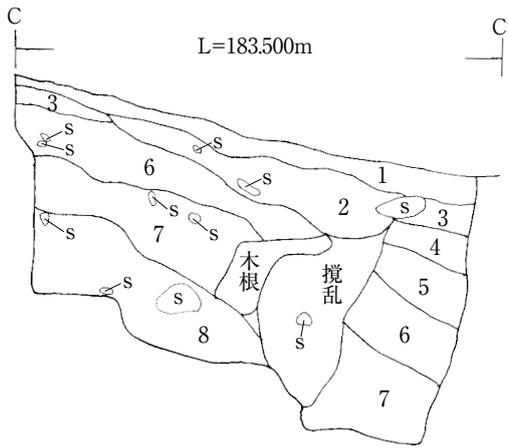
II 2a・2b 区 東、南断面



土層注記 (B-B'), (E-E'), (F-F') 共通

- 1 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性なし。植物根が多い。表土。(I a層相当)
- 2 10YR5/6 黄褐色砂質シルト。しまっている。粘性なし。径5~10cm中心の円礫をやや多く含む。全体に径2cm大の小円礫をやや多く含む。人為的堆積土。(I b層相当)
- 3 10YR3/3 暗褐色シルト。しまっていない。粘性なし。黄褐色 (10YR5/6) 砂質シルトの小ブロックをやや多く含む。径5cm大の円礫を少量含む。(I c層相当)
- 4 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性ややあり。人為的堆積の腐植土。旧表土。(I d層相当)
- 5 10YR4/4~5/6 褐色~黄褐色砂質シルト。上下が褐色。しまっている (かたい)。粘性なし。中位は黄褐色が中心である。上位に径20~30cm大の円礫を少量含む。全体に径5cm未満の小円礫を多く含む。人為的堆積土 (I d層相当)
- 6 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。やや粘性あり。径3cm未満の小円礫を全体に含む。(II a層相当)
- 7 10YR3/3 ややしまっている。粘性あり。黄褐色粘土質シルトの小ブロックをやや多く含む。6層と同じ。(II a層相当)
- 8 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。径2cm大の小円礫を少量含む。炭化物も少量含む。北側の地点で寛永通宝2枚出土。(II b層相当)
- 9 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。下位の層離面に径15~30cm円礫を少量含む。(III層相当)

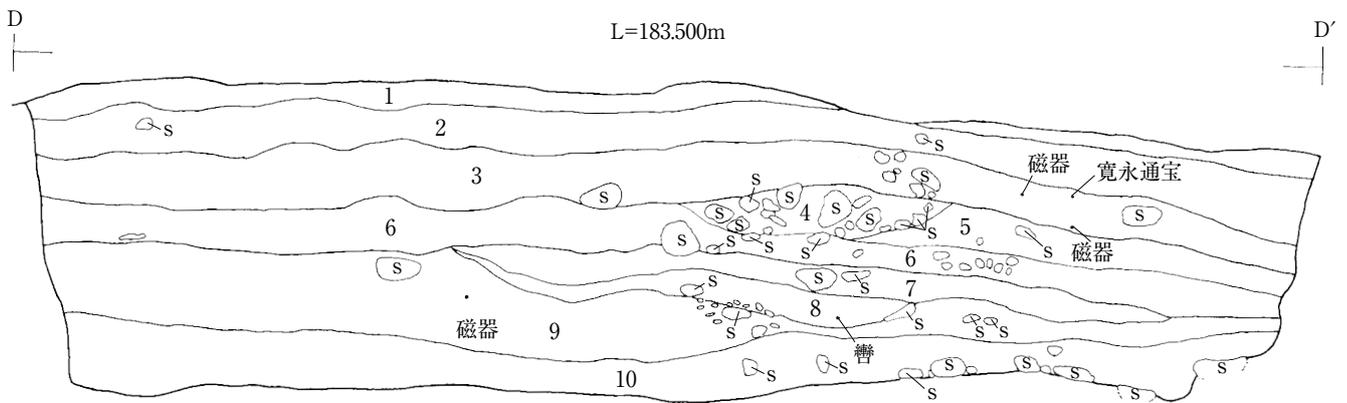
図6 駒形根神社 I 2j区、II 2a・2b区断面 (1)



II 2・3a区南断面

土層注記 (C-C')

- 1 10YR3/3~3/2 暗褐色~黒褐色砂質シルト。ややしまっている~しまっていない。粘性なし。食物根多し。ガラスなどを含む。表土。(I a層相当)
- 2 10YR3/2 黒褐色砂質シルト。しまっていない。粘性なし。径10~20cm大の亜円礫を少量含む。
- 3 10YR5/6~5/8 黄褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。径5~10cm大の円礫を多く含む。人為的堆積。(I b層相当)
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。木根による攪乱あり。径2cm未満の亜円礫を少量含む。(I c層相当)
- 5 10YR5/8 黄褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。全体に径2cm未満の亜円礫をやや多く含む。(I d層相当)
- 6 10YR4/4~3/3 褐色シルト~暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。径2~10cmの亜円礫を少量含む。(II a層相当)
- 7 10YR2/3~3/3 黒褐色シルト~暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。(II b層相当)
- 8 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。20cm大の円礫を含む。(III層相当)

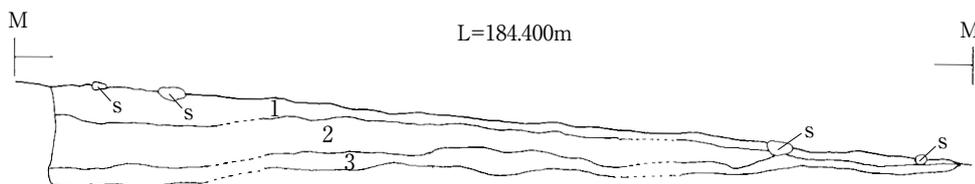


※磁器・寛永通宝・轆出土相当層を示す

II 3a区 西断面

土層注記 (D-D')

- 1 10YR3/3 暗褐色砂質シルト。しまっていない。粘性なし。ガラス等を含む。表土。(I a層相当)
- 2 10YR5/8 黄褐色砂質シルト。しまっている。粘性なし。径5~10cm大の亜円礫を少量含む。人為的な堆積土。上位との層理面に径10cm以上の礫を僅かに含む。(I b層相当)
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。木根による攪乱あり。6層の盛土に堆積した土。径2cm未満の亜円礫を少量含む。黄褐色砂質シルトの小ブロック(径5cm)を全体に多く含む。(I c層相当)
- 4 10YR4/6 褐色砂質シルト。しまっていない。粘性なし。径10~20cm大の亜円礫を多く含む。最大30cm以上のものも含む。(I d層相当)
- 5 10YR3/4 暗褐色砂質シルト。しまっていない。粘性なし。径1cm大の小円礫をやや多く含む。(I d層相当)
- 6 10YR5/8 黄褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。径15~20cm大の礫を少量含む。全体に径2cm未満の亜円礫をやや多く含む。人為的堆積土。(I d層相当)
- 7 10YR3/3 暗褐色砂質シルト。ややかたくしまっている。粘性なし。径10cm大の亜円礫を少量含む。(II a層相当)
- 8 10YR3/4 暗褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。小円礫を多く含む。(II a層相当)
- 9 10YR4/4 褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。径2~10cmの亜円礫を下位に少量含む。木根による攪乱あり。径2cm未満の亜円礫を全体に多く含む。最大径30cm以上の円礫を含む。(II a層相当)
- 10 10YR2/3 黒褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。径5~10cm大の亜円礫を少量含む。木根による攪乱あり。(II b層相当)

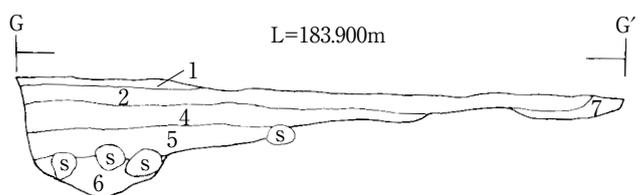
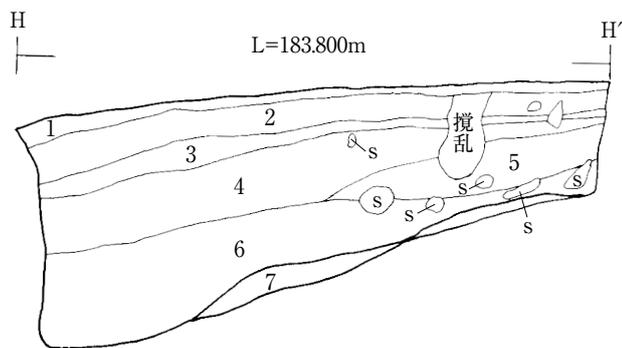


IOc区 南断面

土層注記 (M-M')

- 1 10YR3/4 暗褐色砂質シルト。しまっていない。粘性なし。小円礫(径3cm大)を少量含む。木根による攪乱(西側)近代の陶磁器、馬歯が出土。
- 2 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。木根による攪乱あり。
- 3 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。黄褐色粘土質シルトの小ブロックを含む。

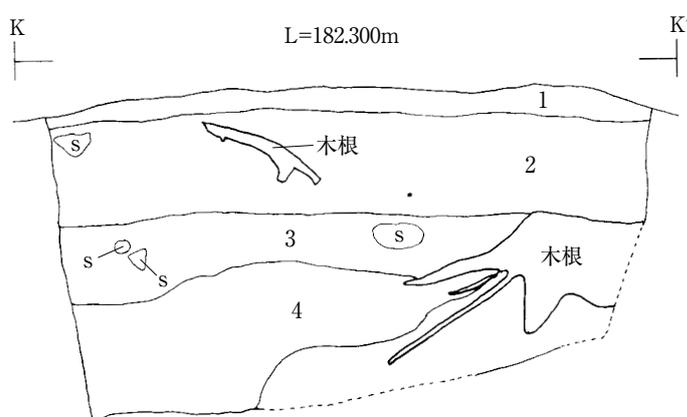
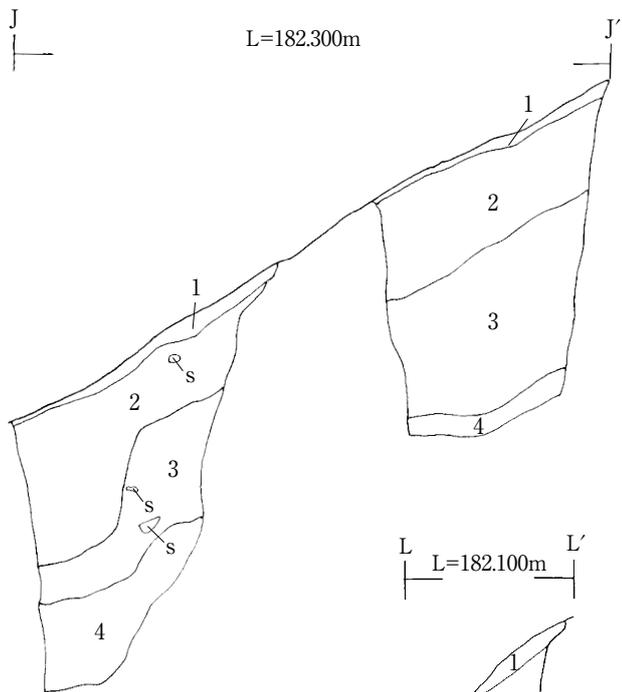
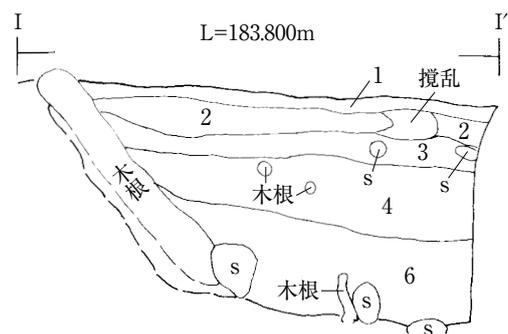
図7 駒形根神社II 2・3a区、II 3a区断面図(2)



II 2・3c区 北断面

土層注記 (H-H'), (G-G'), (I-I') 共通

- 1 10YR3/3 暗褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。表土。(I a層相当)
- 2 10YR6/8 明黄褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。径3~10cm大の亜円礫を少量含む。(I b層相当)
- 3 10YR3/4 暗褐色砂質シルト。しまっている。粘性なし。(I c層相当)
- 4 10YR3/3 暗褐色砂質シルト。しまっている。粘性なし。径5~10cm大の亜円礫を少量含む。褐色(10YR4/4)砂質シルトの小ブロックを少量含む。木根の攪乱あり。陶磁器、鉄製品、寛永通寶出土。(II a層相当)
- 5 10YR3/3 暗褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。下位に径10~20cm大の亜円礫を少量含む。4層より黒色帯びている。(II b層相当)
- 6 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。下との層離面に径20cm大の亜円礫を少量含む。土師器、赤焼土器、かわらけを出土。(III層相当)
- 7 10YR5/6 黄褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。全体に径2cm未満の小円礫を多く含む。下位に径50cm以上の大円礫を少量含む。地山。(IV層相当)



II 3・4a, 4b区 東・北断面

土層注記 (K-K'), (L-L'), (J-J') 共通

- 1 10YR2/3 黒褐色シルト。しまっていない。粘性なし。植物根多し。表土。(I a層相当)
- 2 10YR4/4 褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。木根による攪乱あり。最下部に近代のおちよこ出土。人為的堆積土。(I b層相当)
- 3 10YR4/4 褐色シルト。しまっていない。粘性なし。径15~25cm大の亜円礫を少量含む。旧表土。(I c層相当)
- 4 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。やや粘性あり。木根による攪乱あり。(II層相当)

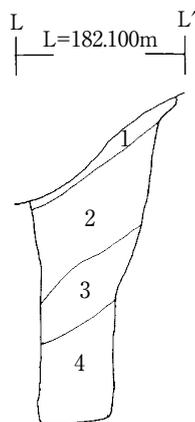


図8 駒形根神社 II 2・3c区、II 3・4b区断面 (3)

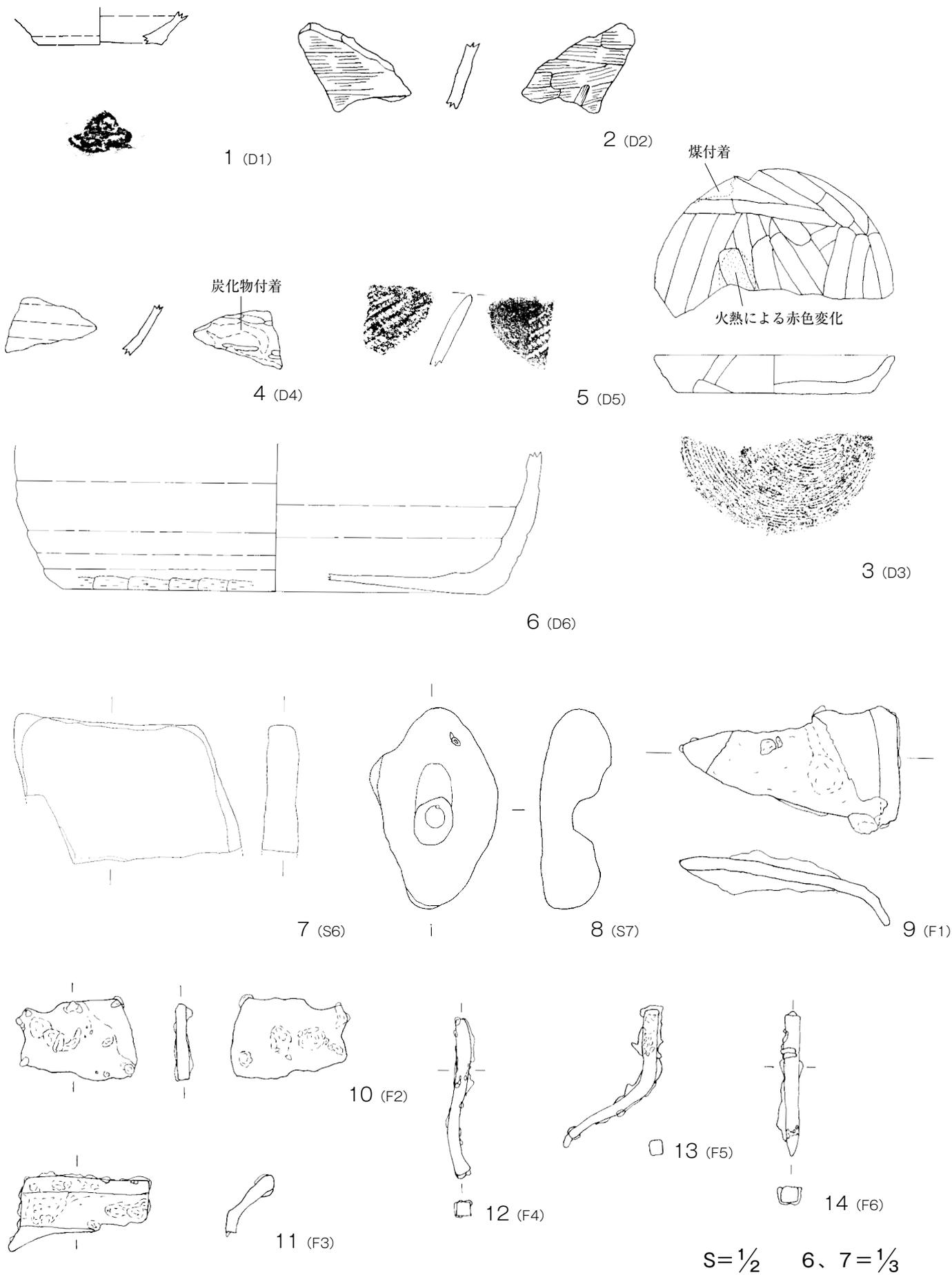
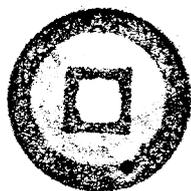
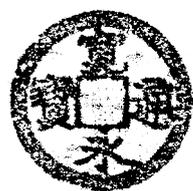
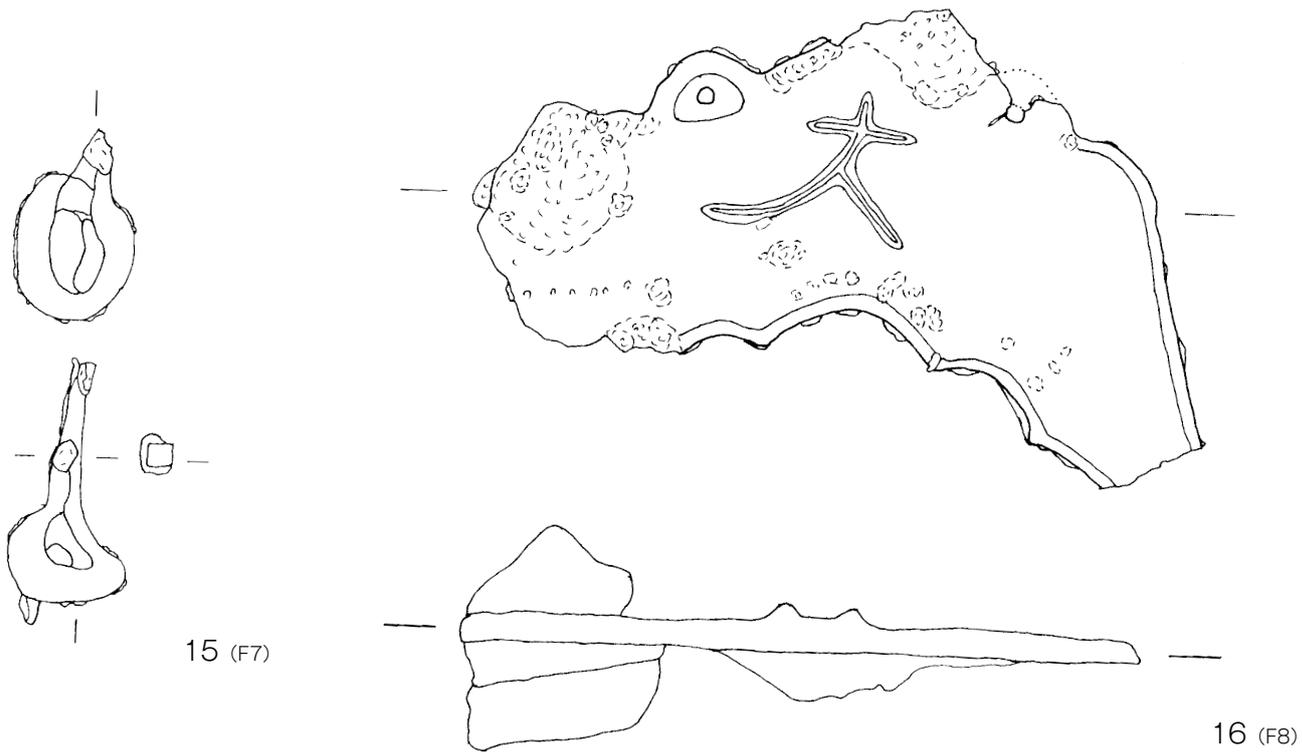
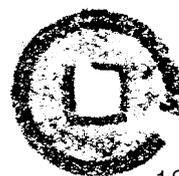


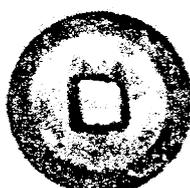
図9 駒形根神社遺跡出土遺物 (1)



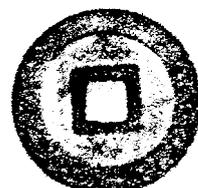
17 (c1)



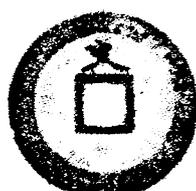
18 (c2)



19 (c4)



20 (c5)



21 (c6)

$S = \frac{2}{3}$

17、18、19、20、21 = $\frac{1}{4}$

図10 駒形根神社遺跡出土遺物 (2)

4 慈恵塚の調査

調査地点は、骨寺村荘園遺跡北側丘陵東端にあり、一関市巖美町字下真坂25-7に所在する（図11）。標高は約207～210mである。

『陸奥国骨寺村絵図』の簡略絵図では、「慈恵塚」の文字が見え、その下に「御拝殿」の文字と建物の絵がみえる。詳細絵図では「大師堂」の文字と建物の絵がみえる。絵図が描かれているあたりに平安・鎌倉時代からのものと伝えられている塚が現存し、慈恵塚と呼ばれている。平成22年度の慈恵塚現状確認調査では、基壇内の復元と地形測量及び物理探査（電気探査、地中レーダー探査）が行われている。電気探査では塚中央部、深さ1.5～2mの地点で高比抵抗値が認められ物体の存在を検知している。石でも金属器でもないものである。出土遺物は、江戸時代から明治時代以降のもので金銅製香炉、灯明具、火鉢、陶磁器、石製品（穴あき石）、銭貨（寛永通宝）である。灯明具は18世紀後半から19世紀前半の瀬戸窯産のものである。

今回の確認調査は、平成24年度に石材復旧した慈恵塚の北側半分、周溝とその北側部分である。

調査期間は令和5年6月23日～7月31日、調査面積は約100㎡である。

調査区は塚中央部を中心に四分し、北東側を1a、北西側を2a、南東側を1b、南西側を2bとして、さらに1区画を中心に合わせて30°毎に3等分し、東からQ1、Q2、Q3として、遺物を取り上げる際には、1aQ2、2aQ1として記した。土層観察用のベルトを設定し、手掘りで表土を取り除き、地山である黄褐色土の上面まで掘り下げて精査を行った。平成22年度の現状確認調査で表層土は除去されていた。そのため表土は浅く、1回のクリーニングで地山が検出できた。今回の調査は北側半分（1a、2a）を中心に、精査を行った。

図面の作成に当たっては、下記の基準杭の座標を基にして実測を行った。写真撮影は一眼レフ・デジタルカメラを用いた。

利用した測量基準杭の成果は以下の通りである。

基T.1 X = -113849.032、Y = 12180.766、H = 207.059

基T.2 X = -113874.162、Y = 12182.727、H = 208.453

調査の結果、新たな遺構はなく、出土した遺物は、表層土、周溝から陶器、鉄滓、銭貨、石製品である。調査終了後、残土を用いて、人力で埋め戻し、現状の回復を行った。

（1）基本土層

I層：10YR3/4暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。食物根が多く含まれる。木の根による攪乱がある。表土。層厚約10cm。

II層：10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。地山。層厚約15～30cm。

III層：10YR5/6黄褐色粘土質シルト。ややしまっていない。粘性あり。地山。層厚約30cm以上。

（2）確認した遺構と遺物（第12～16図、写真図版7～12）

確認した遺構は、慈恵塚の周溝である。塚表土および周溝から出土した遺物は、陶器片4点、鉄滓2点、石製品40点、銭貨4点である。

慈恵塚 平成22年度に現状確認調査、平成24年度に石材復旧が行われている。東方向に向いてつく

られ、形状は東西に長い楕円形を呈し、規模が東西径約10m、南北約8mを測る。塚の平坦面と周溝底面との最大比高差は約2.8mである。今回の確認調査は、北側半分を中心に周溝及び周溝の外側の土堤と呼ばれている部分である。

周溝 中央部の入り口面を除いて、塚全体に巡っている。雨水による自然浸食により、外側の壁が崩壊したり、周溝底部が削られたりしており、斜面下方の西側ほど塚上部との比高差が高くなっている。また南東部は木の根により変形を受けている。周溝の規模は、外径で東西径約14m、南北径約9m、最大幅約3m、最大の深さ約1.1mで、断面形はU字状を呈し、底面は斜面下方に低く傾斜し、幾分凹凸がある。全体としては不整楕円形を呈しており、塚下方は西側が長くなっている。周溝の埋土は、雨水で常に浸食され、残存する部分は浅く、暗褐色粘土質シルト層で主に占められている。

出土遺物 周溝では埋土表面直上から寛永通宝1点(C1)、底面直上から石製品3点(S5、S7、S8)が出土している。C1は寛永通宝の銅銭で、背波のある四文銭である。新寛永で18世紀後半以降のものである。S5は隅丸四角柱の頸部上面から3cm下の側面を0.7cmほど削って段をつけて、一回り小さい柱状に仕上げている。大半は欠損しており頭部の一部が残存しているのみである。石質は溶結凝灰岩である。製品名は不明である。S7は円柱状のもので、大半が破損している。残存率は5分の1以下である。製品名は不明である。自然石を加工して利用したとも考えられる。S8は厚さ約4.5cmの四角形の盤上に宝珠状のものを付けた形態を呈している。宝珠の径は9~11cm、高さ10.2cmである。宝珠の形状はいびつで左右対称でない。底面の裏側は中央よりややずれて窪んでいる。石質は軽石質凝灰岩である。塚頂部にある基壇を構成する一部と推定される。時期の詳細は不明であるが、江戸時代に属するものと考えられる。

塚斜面の表土直上から陶器片2点(T2、T4)、鉄滓2点(F1、F2)、銭貨2点(C2、C3)、石製品36点、(S1~S3、S6、S9~S40)である。T2、T3は瓶の体部片で、染付で肥前産の可能性があり、江戸時代のものである。T2は小舟が描かれている。同一個体と推定される。

F1とF2とは接合し同一個体のものである。形状は逆お椀状で半分が欠落している。大きさは径約9.4cm、長さ約6cmで、中身は一部空洞になっている。周辺に鍛冶跡の遺構が見つかっていないことから、参拝の時に持ち込まれたものと考えられる。時期は不明である。

C2は寛永通宝の鉄銭、四文銭である。新寛永で19世紀後半以降のものである。C3寛永通宝の銅銭、一文銭である。新寛永で19世紀後葉以降のものである。

S1は面に線刻状の沈線が見られるものである。沈線は、縦状が多く、斜めにもあり、一見人為的にもみえるが、自然にできたものである。石質は泥岩である。信仰のために奉納したものと考えられる。時期は不明である。S2、S3、S9は穴あき石である。S2、S9は穴があいている自然石を利用したものである。S3は楕円盤状のもので、上と下の両方向から人為的に穴を穿ったものである。石質はS2が流紋岩、S3が砂岩、S9が泥岩である。3点とも参拝の時に持ち込まれたものである。時期は不明である。S6は四角柱状のもので、上面と下面を磨いて平坦に加工している。石質は泥岩である。参拝の時に持ち込まれたものである。S16、S29は印刻状の沈線がみられる形状が隅丸長方形の盤状のものである。横、縦と斜めに沈線状のものが見える。印刻状のものは自然にできたものである。上と下の2面に磨痕がある。石質は緑色凝灰岩である。参拝の時に持ち込まれたものである。時期は不明である。S38も隅丸長方形の盤状のものである。一面に磨痕がみられ石製品としたものである。石質は頁岩である。参拝の時に持ち込まれたものである。時期は不明である。S29、S36は三角柱状のもので、2側面を磨いている。石質はS29が泥岩、S36は砂岩である。信仰のために持ち込まれたものと考えられる。時期は不明である。S10~S15、S17~S28、S30~S35、S37、S39、S40の27点のうち円盤状(9点)

または楕円盤状（18点）の形態を呈するものである。片面ないし両面に磨痕がみられるもので、人為的な加工が施されているので石製品とした。表面に文字や文様らしきものは確認されていない。大きさは、円盤状のものでは、最小で径2.5～3.5cmが1点、最大で径7～8cmが1点、径4.5～6cmが7点で最も多い。楕円盤状では長さ3.5～5.5cm、幅3～4cmが14点、長さ5.5～7.5cm、幅4～5cmが4点で、前者のものが多。石質を形態から、円盤状のもの（A）、楕円状のもの（B）に分けてみると、砂岩が（A）－3点、（B）－4点、軽石質凝灰岩が（A）－2点、（B）－6点、泥岩が（A）－1点、（B）－5点、流紋岩が（A）－2点、（B）－1点、緑色凝灰岩が（A）－1点、頁岩が（B）－1点である。全体として、砂岩、軽石質凝灰岩、泥岩が多く使用されている傾向にある。

参道付近の表土から出土したものは、陶器片2点（T1、T3）、銭貨1点（C4）である。T1、T3は肥前産の染付と推定される瓶の体部と頸部である。T3には山水画が描かれている。時期は江戸時代以降のものである。C4は文字が不明瞭であるが、新寛永通宝の鉄銭で一文銭であると推定される。時期は18世紀以降のものである。

遺構外出土遺物としては、S4は塚の北西側の表土から出土した砥石である。両面に使用痕である擦痕が多くみられる。形態は直方体で一面が傾斜し研ぎやすい形になっている。側面は原石から切り出して、切断して製品にした加工痕が鮮明に残っている。石質は粘板岩である。時期は不明である。

（3）まとめ

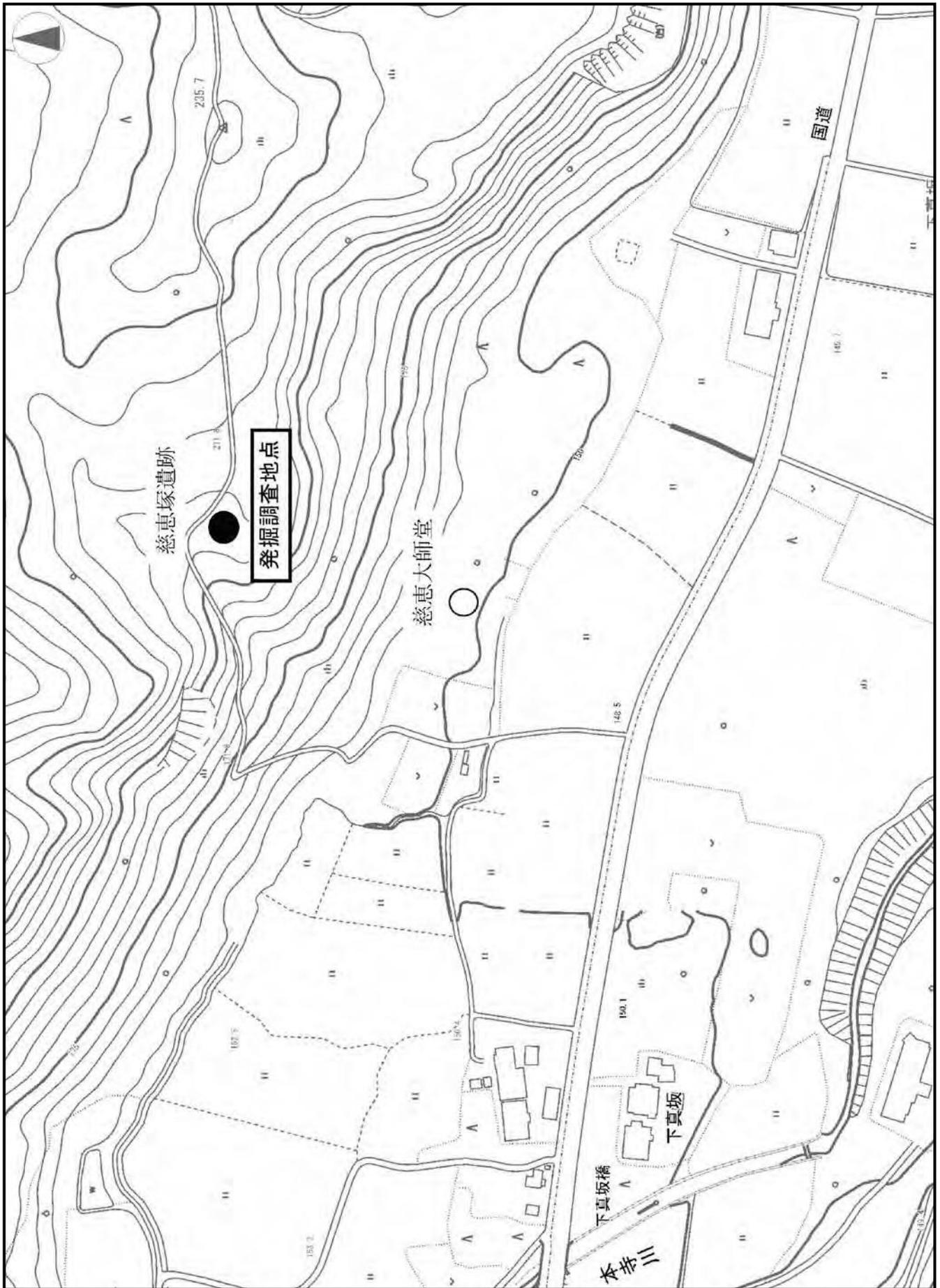
今回の確認調査では穴あき石、線刻状の凹凸をもつ石、両面あるいは片面に磨いた擦痕がある石製品が出土している。穴あき石は平成22年度の調査でも4点確認されている。周辺では一関市花泉町にある大門地藏堂の境内で多数見られるという。また、県内では、西和賀町薬師神社（穴薬師）で確認されている。穴あき石、鉄滓、線刻状の凹凸がある石、加工が施された小判状の石製品は、人々が住んでいる地域等から慈恵塚まで参拝する際に持ち込まれた、信仰とかかわるものである。塚の葺石の間や、周溝の埋土から、寛永通宝も出土していることから、江戸時代以降のものと考えられる。

現在慈恵塚頂部には小さな石塔があるが、今回出土した宝珠は過去の石塔の部材や屋根頂部の露盤の上につけられたものとも考えられ、今後さらに、慈恵塚の調査とともに検討する必要がある。

今回の確認調査で周溝の外側の土堤と呼ばれている部分を掘り下げて、土の観察を行ったが、人為的堆積土は見つからなかった。周溝等を掘った土で盛り上げた痕跡は確認できなかった。

出土遺物は、江戸時代から明治時代以降のもので、慈恵塚が平安時代から鎌倉時代に築造されたことを裏付ける考古学的資料は確認できなかった。したがって、今後は物理調査で物体の存在が確認された塚中央部を含めた精査が、慈恵塚の築造年代解明につながると考えられる。

（光井）



※敷地の境界、その他掲載されている情報の内容を証明するものではありません。

縮尺 1 / 2500

図11 慈恵塚調査区位置図

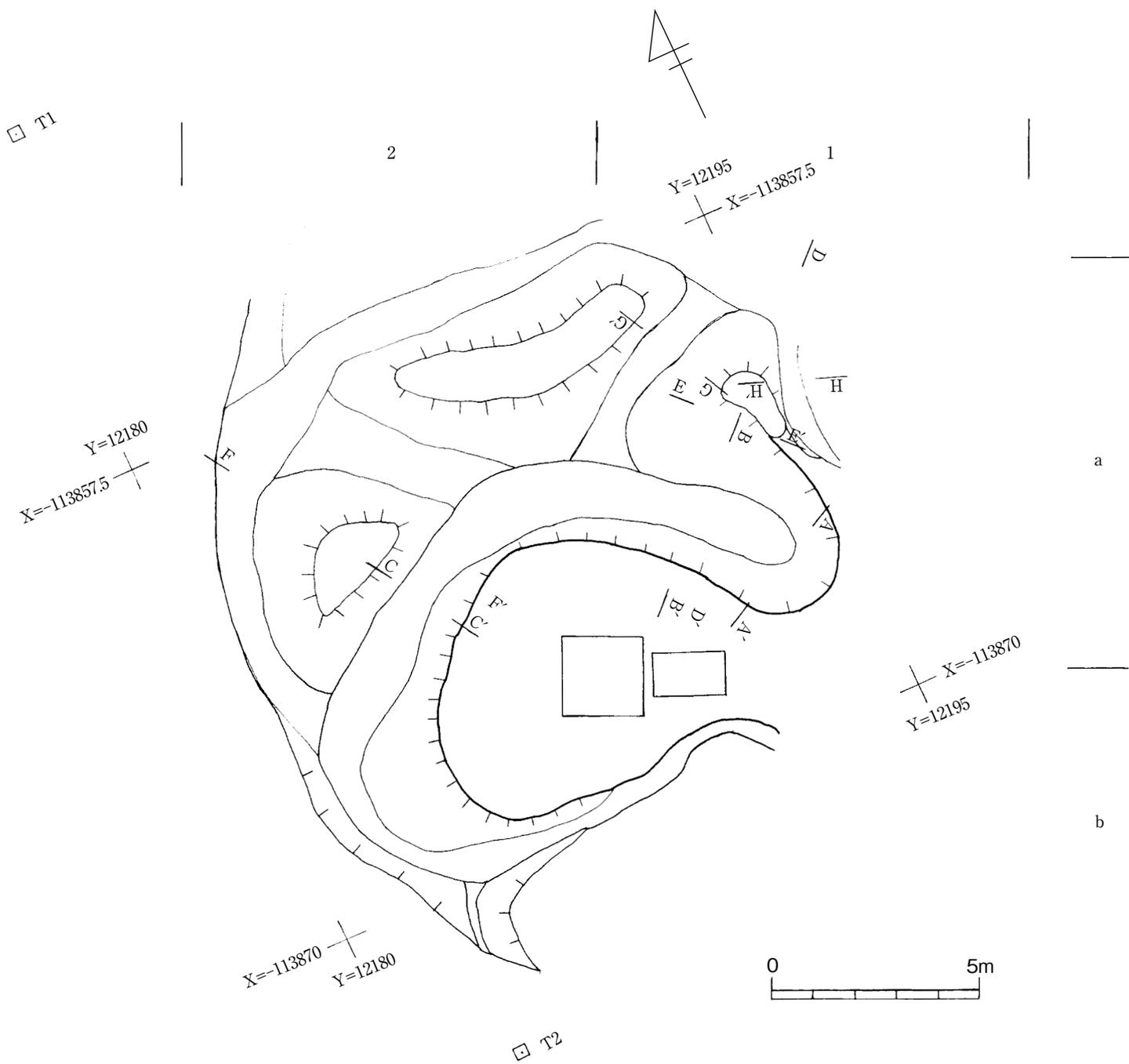
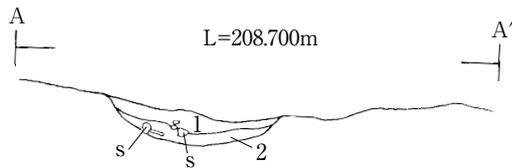
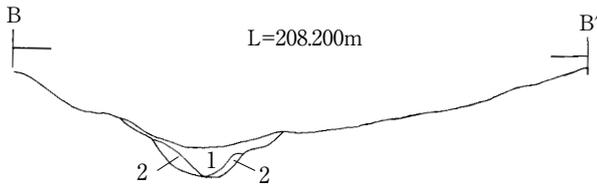


图12 慈恵塚調査区平面図



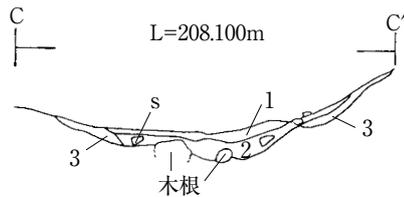
土層注記 (A-A')

- 1 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性ややあり。上位に植物根を多く含む。
- 2 10YR4/4 褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。小円礫 (径3~5 cm) を少量含む。



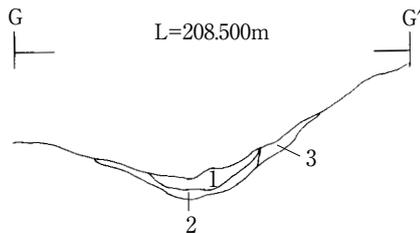
土層注記 (B-B')

- 1 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性あり。上位に植物根が集中し、小円礫を少量含む。
- 2 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性あり。



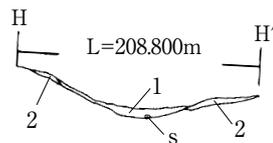
土層注記 (C-C')

- 1 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性ややあり。植物根多く含む。
- 2 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性あり。上方から落ちてきた川原石を上位に埋没している。木根による攪乱あり。
- 3 10YR5/8 黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。



土層注記 (G-G')

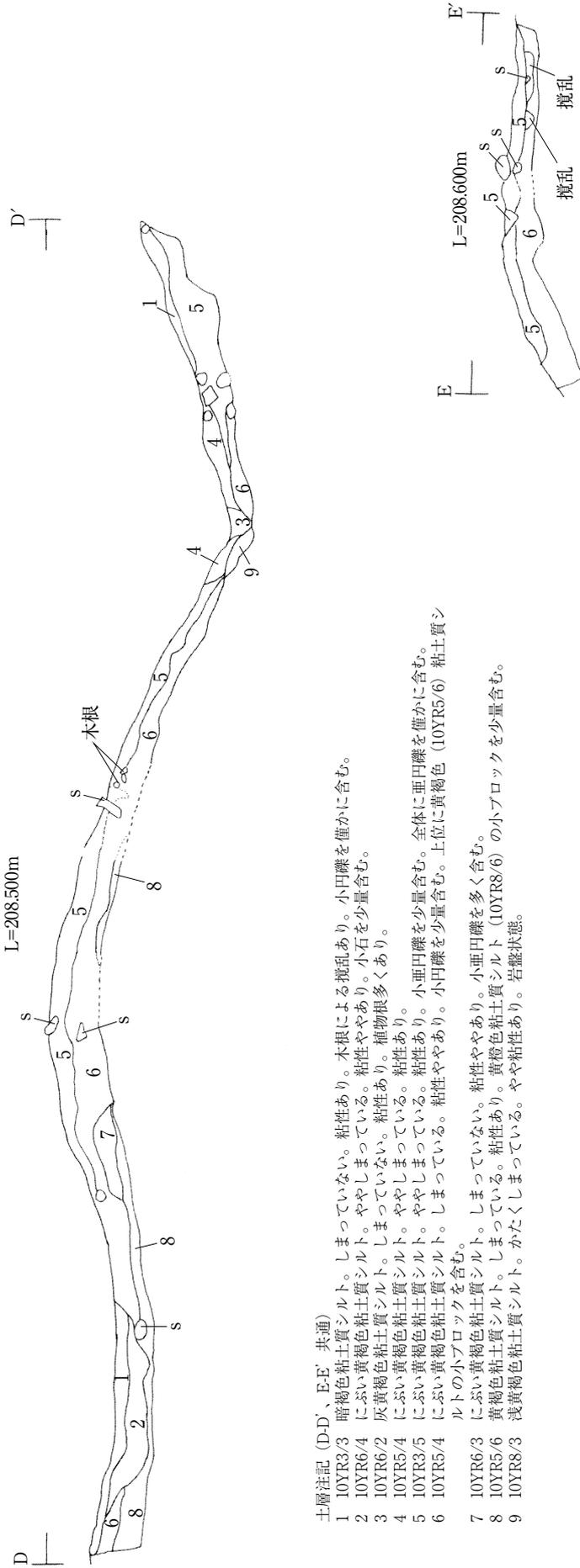
- 1 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。植物根を多く含む。木根による攪乱あり。周溝をきった周溝の埋土である。
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性あり。木根による攪乱あり。
- 3 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。パミスを含む。地山。



土層注記 (H-H')

- 1 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。植物根、小亜円礫を全体に少量含む。
- 2 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。地山、小亜円礫を全体に少量含む。

図13 慈恵塚周溝断面図 (1)



- 土層注記 (D-D', E-E' 共通)
- 1 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性あり。木根による攪乱あり。小円礫を僅かに含む。
 - 2 10YR6/4 灰黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。小石を少量含む。
 - 3 10YR6/2 灰黄褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性あり。植物根多くあり。
 - 4 10YR5/4 黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。
 - 5 10YR3/5 黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。小亜円礫を少量含む。全体に亜円礫を僅かに含む。
 - 6 10YR5/4 黄褐色粘土質シルト。しまっている。粘性ややあり。小円礫を少量含む。上位に黄褐色 (10YR5/6) 粘土質シルトの小ブロックを含む。
 - 7 10YR6/3 黄褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性ややあり。小亜円礫を多く含む。
 - 8 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト。しまっている。粘性あり。黄褐色粘土質シルト (10YR8/6) の小ブロックを少量含む。
 - 9 10YR8/3 浅黄褐色粘土質シルト。かたくしまっている。やや粘性あり。岩盤状態。

- 土層注記 (F-F')
- 1 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。植木根あり。雨水溝の埋土。
 - 2 10YR4/3 黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性少しあり。下に小円礫がある。
 - 3 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト。しまっている。粘性強くあり。木根による攪乱あり。
 - 4 10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト。しまっている。粘性強くあり。パミスを含む。亜円礫を少量含む。

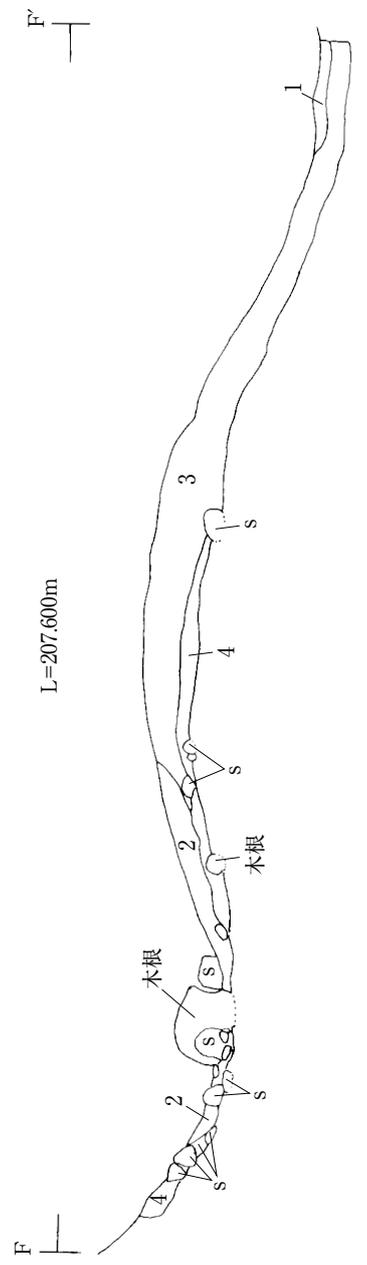


図14 慈恵塚周溝断面図 (2)

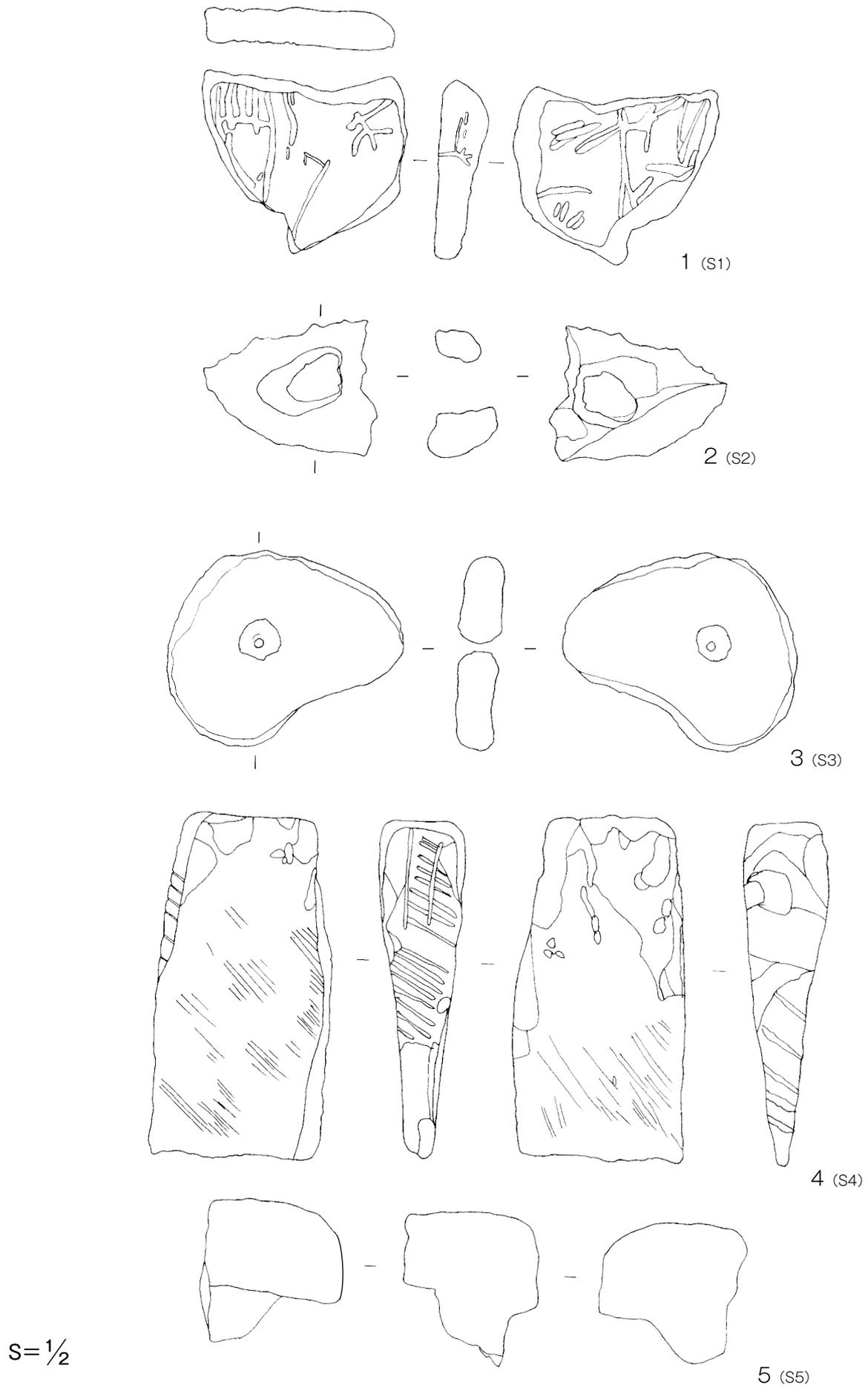


图15 慈惠塚遺構内出土遺物（1）

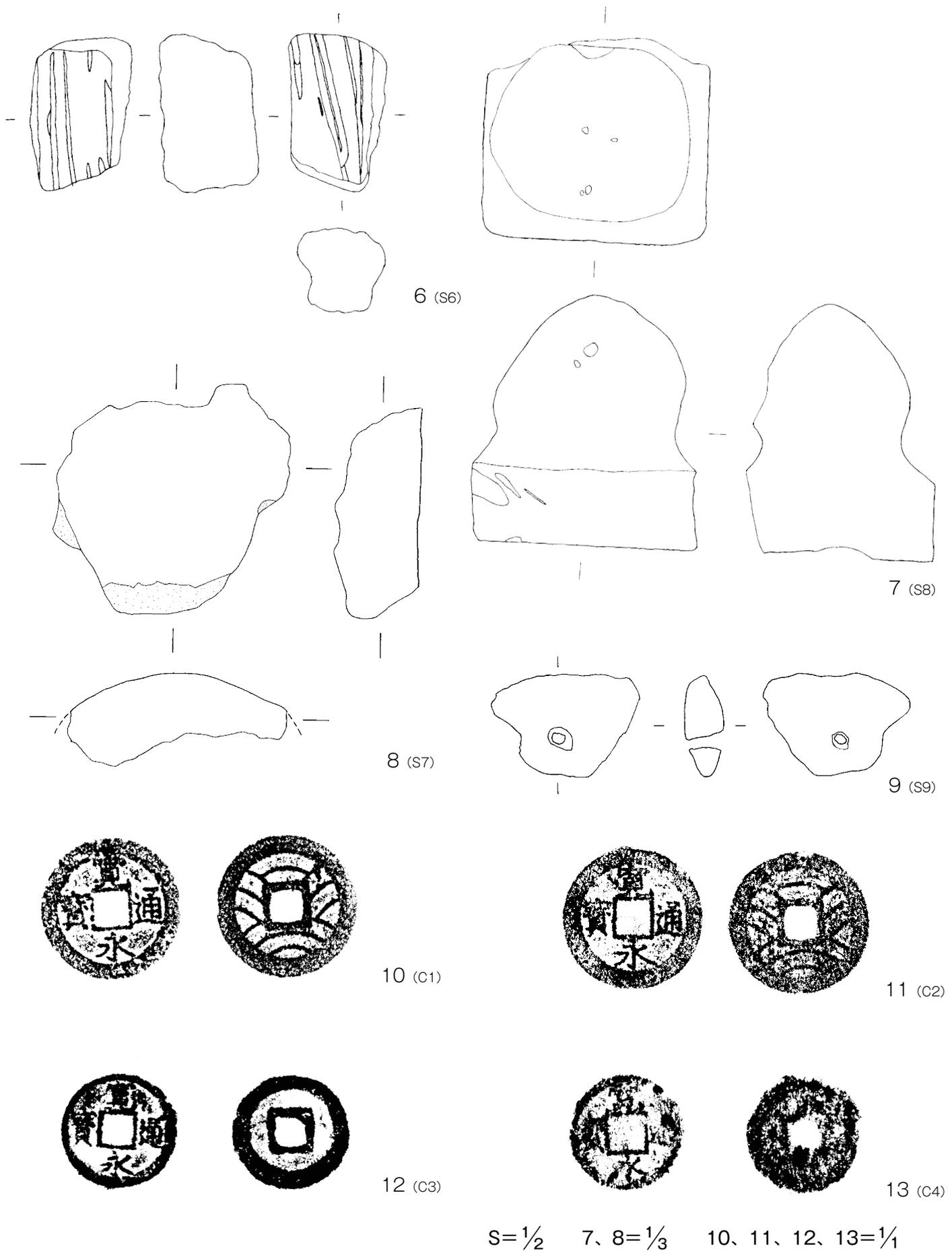


图16 慈惠塚遺跡出土遺物 (2)

5 山王窟の調査

調査地点は、山王山（標高570m）の中腹にあり、一関市巖美町字若井原194-33に所在する（図17）。駒形根神社の北西約3.2kmにあり、標高は約298～302mである。山王窟は南西に開口し、眼下に磐井川が東流している。調査区は山王窟からつながる急斜面にある。

『陸奥国骨寺村絵図』の詳細絵図では、「山王石屋」の文字が見え、正面（西）の「駒形根」の手前に重なる山稜の一部に描かれている。また、『吾妻鏡』にも骨寺村の西の四至として「山王窟」の名前が記されている。遅くとも鎌倉時代から山王窟が存在し、山王を祀る岩屋として理解され、修験者の修行の地であったことがうかがわれる。

山王窟の発掘調査は今まで行われておらず、考古学的資料は得られてないことから、正確な年代は不明である。窟内部からも平安時代や鎌倉時代にかかわる遺物は見つかっていない。今回の調査は、山王窟の歴史的な性格を明らかにするための確認調査である。

調査期間は令和5年5月18日～8月31日、調査面積は約20㎡である。

調査は調査区を1mのメッシュを組み、西から順にa、b、c、d、e、f、gとし、南北を北から1、2、3、4、とし、グリッド1a、グリッド1bと命名して遺物を取り上げた。急斜面な地形の関係等から、実際に調査したグリッドは1c～1f、2c～2f、3b～3h、4c～4h、5g、5hである。グリッドの四方に土層観察用のベルトを設定し、手掘りで表土を掘り、岩盤の凝灰岩直上まで掘り下げ、遺構、遺物の検出を行った。

図面の作成に当たっては、下記の基準杭の座標を基にして実測を行った。写真撮影は一眼レフ・デジタルカメラを用いた。

利用した測量基準杭の成果は以下の通りである。

基T.1 X = -112411.885、Y = 7014.209、H = 302.555

基T.2 X = -112420.264、Y = 7014.188、H = 298.482

調査の結果、新たな遺構はなく、遺物は、土師質土器1点、かわらけ4点、鰐口6点、鉄釘2点、銭貨11点、火打石1点である。調査終了後、残土を用いて、人力で埋め戻し、現状の回復を行った。

(1) 基本土層

I層：10YR3/3暗褐色砂質土。しまっていない。粘性なし。小亜角礫、中亜角礫（径15～20cm大）を全体に多く含む。上部に現代のガラス、トタン、木片を多く含む。植物根が多い。層厚約10cm。

II層：10YR2/2黒褐色砂質土。ややしまっている。粘性なし。小亜角礫（径10cm未満）を多く含む。斜面下方に大きい亜角礫（径20～30cm）が含まれる。植物根が多い。土師質土器、かわらけ、鉄製品（鰐口、角釘）、銭貨、火打石を含む、層厚約10～20cm。

III層：10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト。しまっている。粘性なし。全体に小亜円礫（径10cm未満）、下部に大きい亜角礫（径20～30cm）を多く含む。遺物はなし。層厚約10～20cm。

※III層の下は凝灰岩の岩盤で大小の孔があり凹凸が激しい。調査区の東側は表土がなく岩が露出しており、勾配もさらに急である。

(2) 確認した遺構と遺物 (第18～22図、写真図版13～16)

遺構は検出されていない。出土した遺物は土器4点、磁器3点、鉄製品8点、銭貨8点である。

土器 かわらけ3点(D1、D2、D3)と土師質土器1点(D4)である。D1はグリッド2g区Ⅱ層下部から出土したかわらけの口縁部片である。ロクロ使用で、口唇部の内外面に細沈線がみられる。外面にはロクロ痕の凹凸がある。内面には黒褐色状のものが付着している。色調は橙色系で、胎土は緻密である。推定口径は9.8cmである。D2はグリッド2g区Ⅱ層出土のもので、3gⅡ層、4gⅡ層出土の破片と接合している。口縁部片で、ロクロ使用である。内面の一部が暗褐色状に変色している。色調は橙色系で胎土は緻密である。D3はグリッド3g区Ⅱ層からの出土である。ロクロ使用で、ロクロ痕の凹凸がある。右回転の回転糸切り痕がある。細い糸を称している。内面の一部に暗褐色状に変色している斑状の部分がある。器形は底部から緩く外反しているものである。法量は推定で、口径10cm、底径6.2cm、器高2.1cmである。色調は橙色系、胎土は緻密である。D1、D2、D3の3点はかわらげで、神前の器や灯明皿として使用されたと考えられる。時期は共伴遺物から江戸時代である。D4はグリッド2d区Ⅱ層からの出土で、出土遺物が集中する調査区東端から離れて出土した唯一のものである。土師質土器甕形の体部片で長さ1.5cmと小さい。ロクロ不使用で内外面ともヘラナデで調整されている。色調は橙色系で、胎土は小石が含まれるやや粗いものである。胎土、色調、調整から土師器の可能性もあるが、小破片であること、共伴遺物がないことから判断できず土師質土器としたものである。したがって詳細な時期は不明である。

磁器 G1はグリッド3g区Ⅰ層から出土した盃である。内面に花びらが描かれている。高台の外面には波状文が施文されている。体部は底部から内湾して立ちあがる。口径7.0cm、底径3.0cm、器高3.2cmである。時期は明治時代以降である。G2は排土から見つかった盃である。内面に花びらの文様が描かれている。体部は底面から内湾して立ち上がり、口唇部でわずかに外反するものである。推定口径は7.6cmである。時期は明治時代以降である。G3はグリッド2g区Ⅰ層から出土の盃の口縁片である。内外面に透明の釉が施されているが、文様はない。体部は内湾している。時期は明治時代以降である。

鉄製品 F1はグリッド4g区Ⅱ層から出土した鰐口片である。肩部は緩く膨らむ。側面の天井部は中央に向かってやや膨らむ形状を呈する。側面中央部には圏線が縁から3.0cm内側に2本見られる。側面の大きさは推定口径約12cmである。肩部は幅の長さが2.0cm、厚さが0.4～0.5cmである。側面部の厚さ0.3～0.4cmである。時期は、江戸時代の遺物と同じ層から出土しているが、詳細は不明である。F2はグリッド3g区Ⅱ層下部から出土している鰐口片である。肩部がやや膨らむもので、端部にもう一つ片側の鰐口と合わせるための受け部がついている。肩部は幅1.6～1.7cm、厚さが0.6～0.7cmである。残存する受け部は、最大幅1.1cm、厚さが0.1～0.2cmである。側面の天井部はやや膨らみ、並行する2本と1本の圏線が巡っている。推定する側面の口径は約16cmで、厚さは0.1～0.2cmある。縁部に紐を取り付ける耳部の一部と推定される凸部が2か所残っている。時期は江戸時代の遺物が出土するⅡ層でも下部であり、詳細は不明である。F3はグリッド5g区Ⅱ層上部から出土した、鰐口片である。肩部と側面の天井部がやや膨らんでいる。残存する肩部は幅が1.0～1.1cm、厚さが0.1～0.2cmである。側面に縁から約3.0cmの位置に圏線が1本確認できる。さらに内側に複数あると思われるが、破損していて不明である。側面の厚さは0.2～0.3cmである。推定口径は約12cmである。時期は江戸時代と考えられるが、詳細は不明である。F4はグリッド2g区Ⅱ層上部出土の鰐口の側面片である。側面の天井部はやや膨らんでおり、外面に2本の圏線がみられる。厚さは、0.2～0.3cmである。時期は江戸時代の遺物が同じ層から出土しているが、詳細は不明である。F5はグリッド3g区Ⅱ層からの出土し

た鰐口片である。端部がややU字形を呈し、口部の一部と推定される。厚さは0.3cmである。同じ層から江戸時代の遺物が出土しているが、詳細は不明である。F6はグリッド3g区Ⅱ層上部から出土した鉄製品の口縁部～体部片である。口辺部の片側の端部は弧の曲がりがあり、器壁も厚くなっていることから、注ぎ口につながる一部であったと推定される。体部は内湾しながら口縁部につながる鍋状の形態を呈している。器壁は0.3～0.5cmである。鉄製品の器種は不明である。時期は、同じ層から江戸時代の遺物が出土しているが、詳細は不明である。小型の鉄製の鰐口（径約6.3～6.6cm）は岩手町大森・どじの沢遺跡どじの沢小堂跡から1点出土している。F7はグリッド5h区Ⅱ層から出土した角釘である。頭部が幾分曲がるものである。F8はグリッド4g区Ⅰ層下部～Ⅱ層から出土した角釘で、頭部が幾分曲がり、先の方に向かって細くなっていっている。共伴遺物から、江戸時代以降のものである。

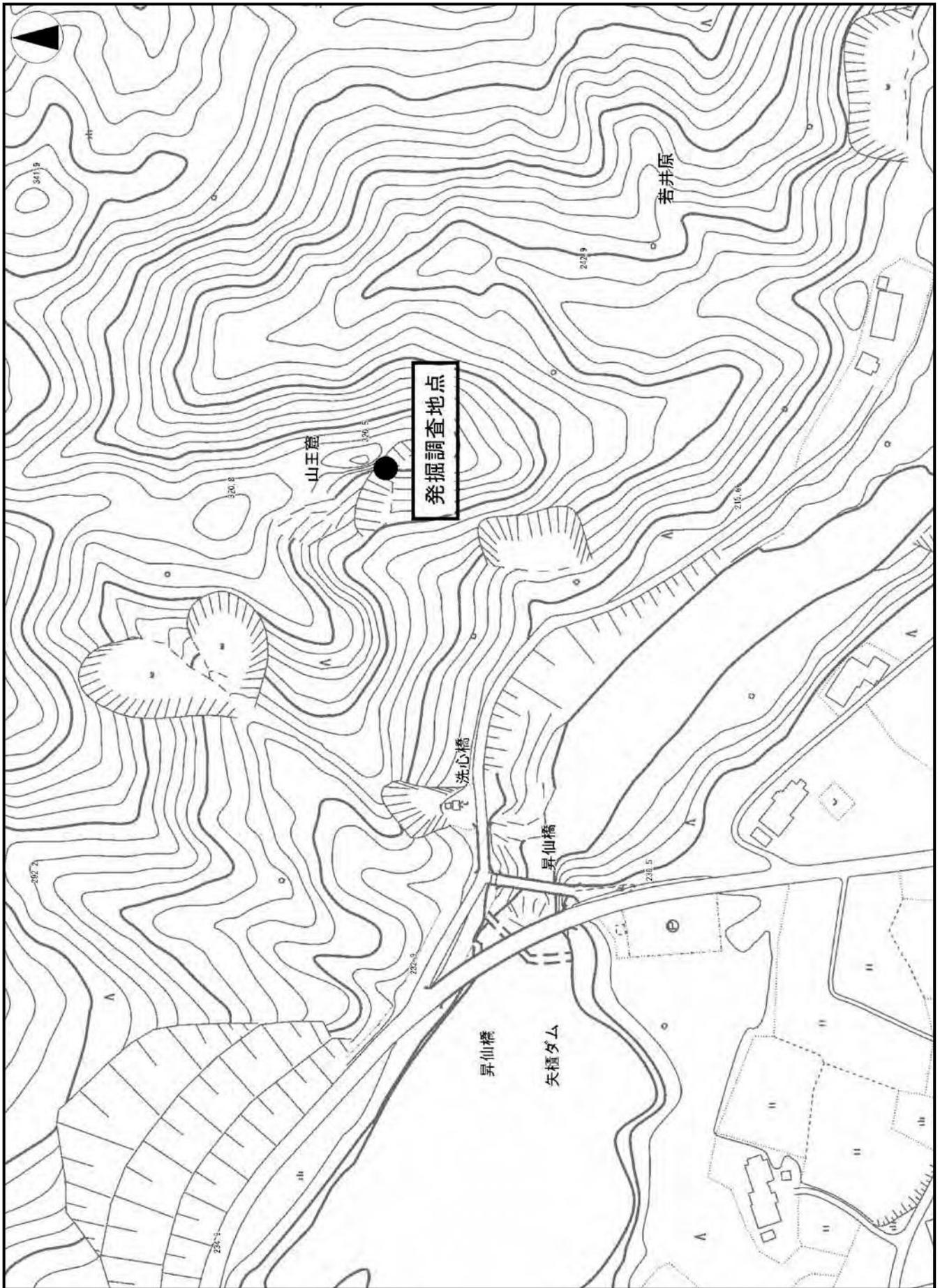
銭貨 銭貨が7点出土している。C1はグリッド2g区Ⅱ層から出土した寛永通宝の銅銭である。摩耗が激しいが、新寛永で18世紀以降のものである。C2はグリッド3g区Ⅱ層から出土した寛永通宝の銅銭ある。背面に「元」と推定される文字がある新寛永で18世紀後半以降のものである。C3はグリッド4g区Ⅱ層から出土した鉄銭である。腐食が著しく詳細は不明である。C4はグリッド4g区Ⅱ層下部から出土した寛永通宝である。新寛永で18世紀以降のものである。C5は3gⅡ層から出土した寛永通宝である。新寛永で18世紀以降のものである。C6はグリッド5h区Ⅱ層から出土した角銭の鉄銭である。18世紀後葉以降のものである。C7はグリッド2gⅡ層から出土した寛永通宝である。新寛永で18世紀以降のものである。C8はグリッド2g区Ⅰ層から出土した二十銭硬貨で「明治十八年」の記名がある。C9、C10は2gⅠ層から出土した十銭硬貨でC9には「明治二十四年」、C10には「明治二十六年」の記名がある。C11はグリッド4g区表土から出土した五円硬貨で「平成元年」の記名があるものである。

火打石 S1はグリッド4g区Ⅱ層から出土した石製品で、形状は菱形を呈し、長さ3.1cm、幅2.0cm、厚さ0.9cmの大きさである。石質は瑪瑙で白色を帯びている。縁部に使用痕があり、石質、色調、形状から、火打ち石として使用されていたものと考えられる。時期は出土した土層から、江戸時代のものと推定される。

(3) まとめ

今回の調査で、江戸時代以降の遺物を検出することができ、江戸時代以降から平成時代まで信仰の場であることが確認できた。山王窟は江戸時代には中尊寺大長寿院の管理下にあり、護摩焚きや配札などの儀式が行われていたことが知られている。江戸時代の包含層から、かわらけ、火打石のほか、多くの木炭が寛永通宝とともに出土しており、宗教的な儀式が行われてことを裏付けられる証になる可能性がある。また、鰐口が出土したことより、遅くとも江戸時代には、窟の入り口に鰐口を取り付け、奉納の場として存在したこともわかった。『陸奥国骨寺村絵図』が製作された鎌倉時代の遺物は見つからなかった。しかし、駒形根神社境内の発掘調査で絵図の製作時期と同じ13世紀後半から14世紀のかわらけ（灯明皿）や8世紀代後半の土師器坏形土器が出土している。また周辺の遺跡から少数であるが平安時代の土師器、須恵器も見つかっている。このことから、山王窟が平安時代から修験者の修行や信仰の場として存在していたことが、考古学的資料からうかがえる。今回の調査では江戸時代以降の信仰の場であることが考古学的に裏付けられた。今後も、本格的に発掘調査をして、山王窟の歴史的な性格を解明しようと計画している。

(光井)



※敷地の境界，その他掲載されている情報の内容を証明するものではありません。

縮尺 1 / 2500

図17 山王窟調査区位置図

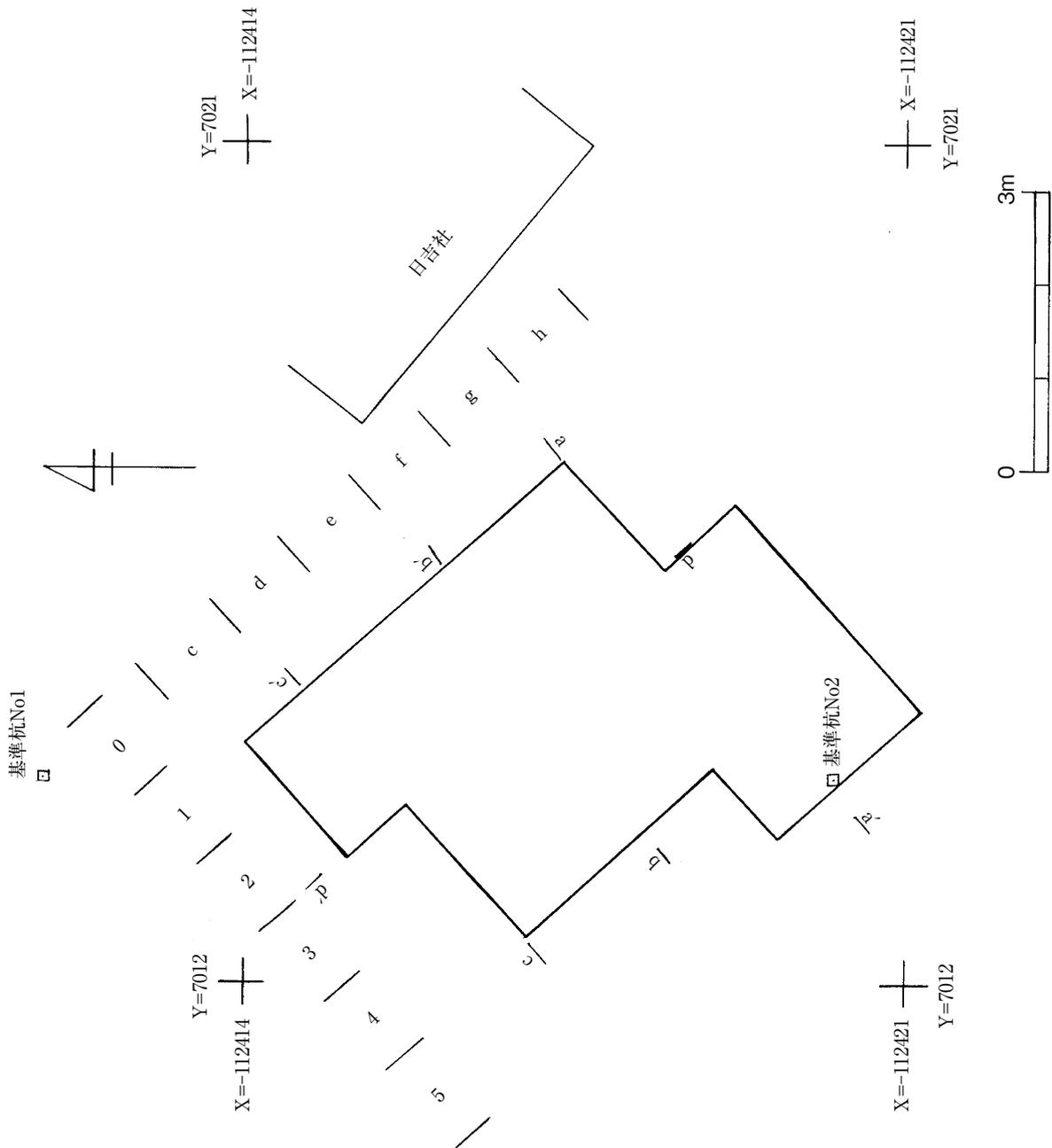
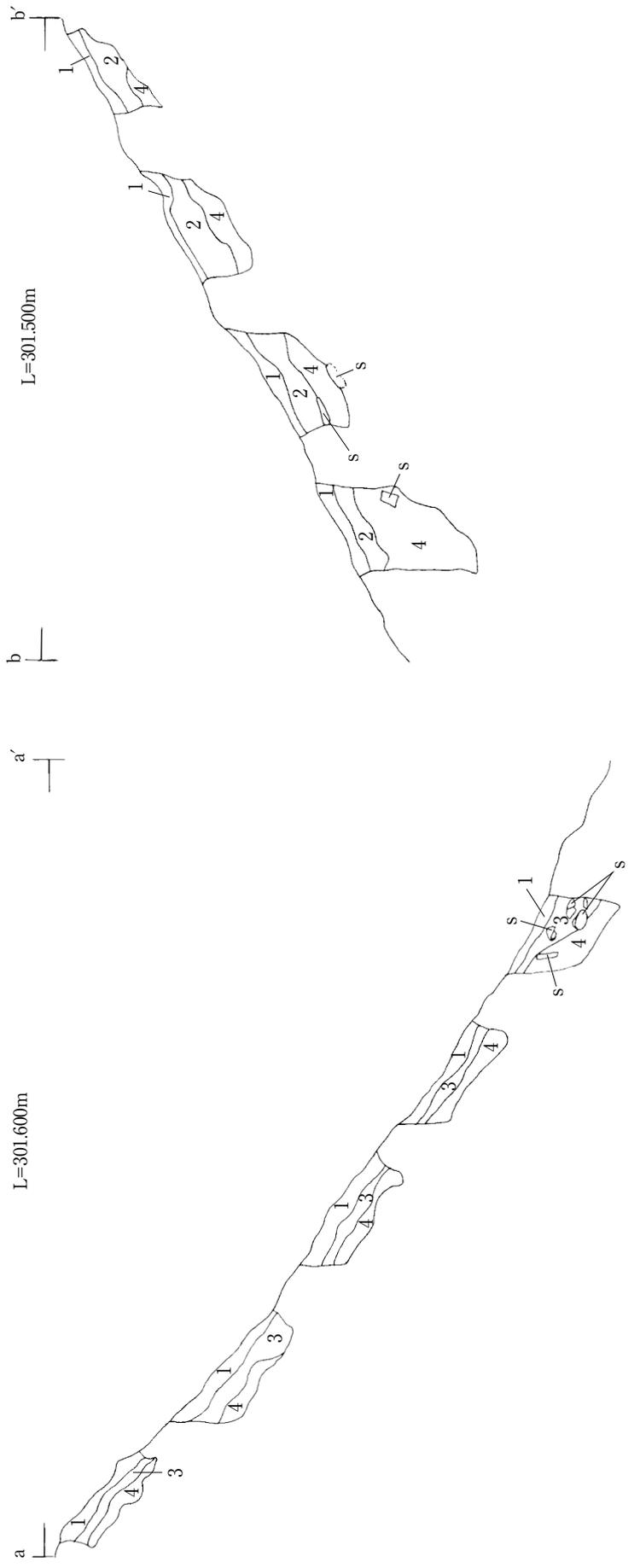
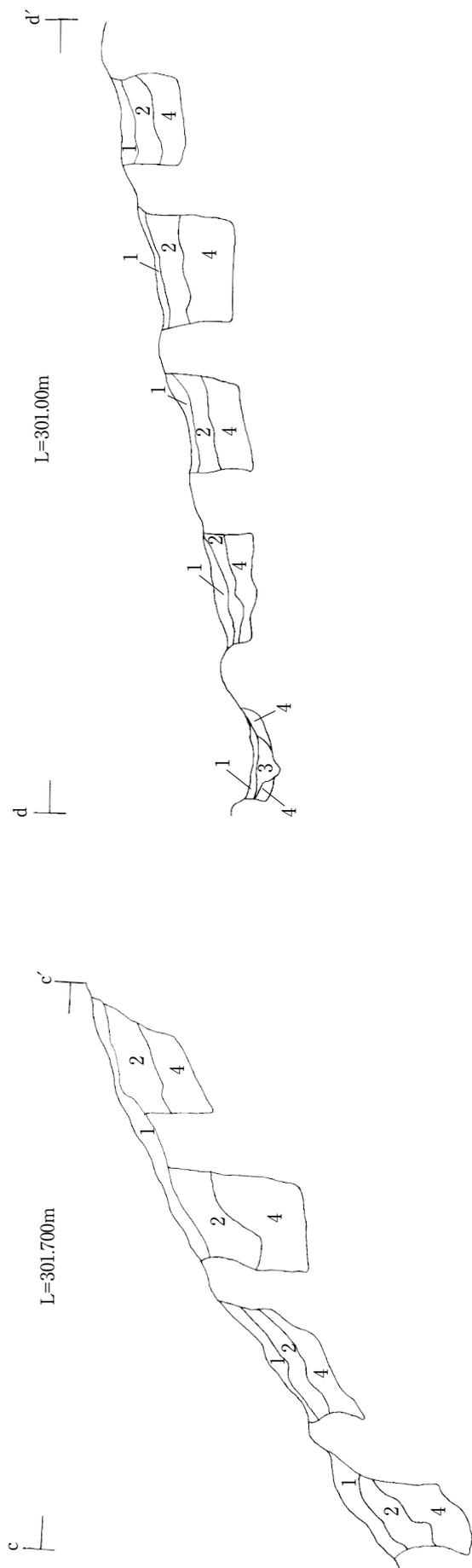


图18 山王窟調査区配置図



土層注記 (aa', bb' 共通)
 1 10YR3/3 暗褐色砂質。ややしまっている。粘性なし。植物根多く含む。ガラス、トタン等現代遺物を含む。亜角礫 (径15~20cm六) をやや多く含む。
 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。亜角礫を少量含む。植物根を多く含む。
 3 10YR2/2 黒褐色砂質。ややしまっている。粘性なし。小亜角礫を多く含む。植物根を多く土師質土器を含む。
 4 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト。しまっている。粘性なし。全体に小亜角礫を多く含む。斜面下位に大きな亜角礫 (径20~30cm) を多く含む。

図19 山王窟土層断面図2-1



土層注記 (c-c'、d-d' 共通)

1 10YR3/3 暗褐色砂質。ややしまっている。粘性なし。植物根多く含む。ガラス、トタン現代遺物を含む。亜角礫(径15~20cm大)をやや多く含む。

2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト。ややしまっている。粘性なし。亜角礫を少量含む。植物根を多く含む。

3 10YR2/2 黒褐色砂質。ややしまっている。粘性なし。小亜角礫を多く含む。植物根を多くあり。かわらけ、銭貨、鉄製品を含む。

4 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト。しまっている。粘性なし。全体に小亜角礫を多く含む。下に大きい亜角礫(径20~30cm)を多く含む。

図20 山王窟土層断面図2-2

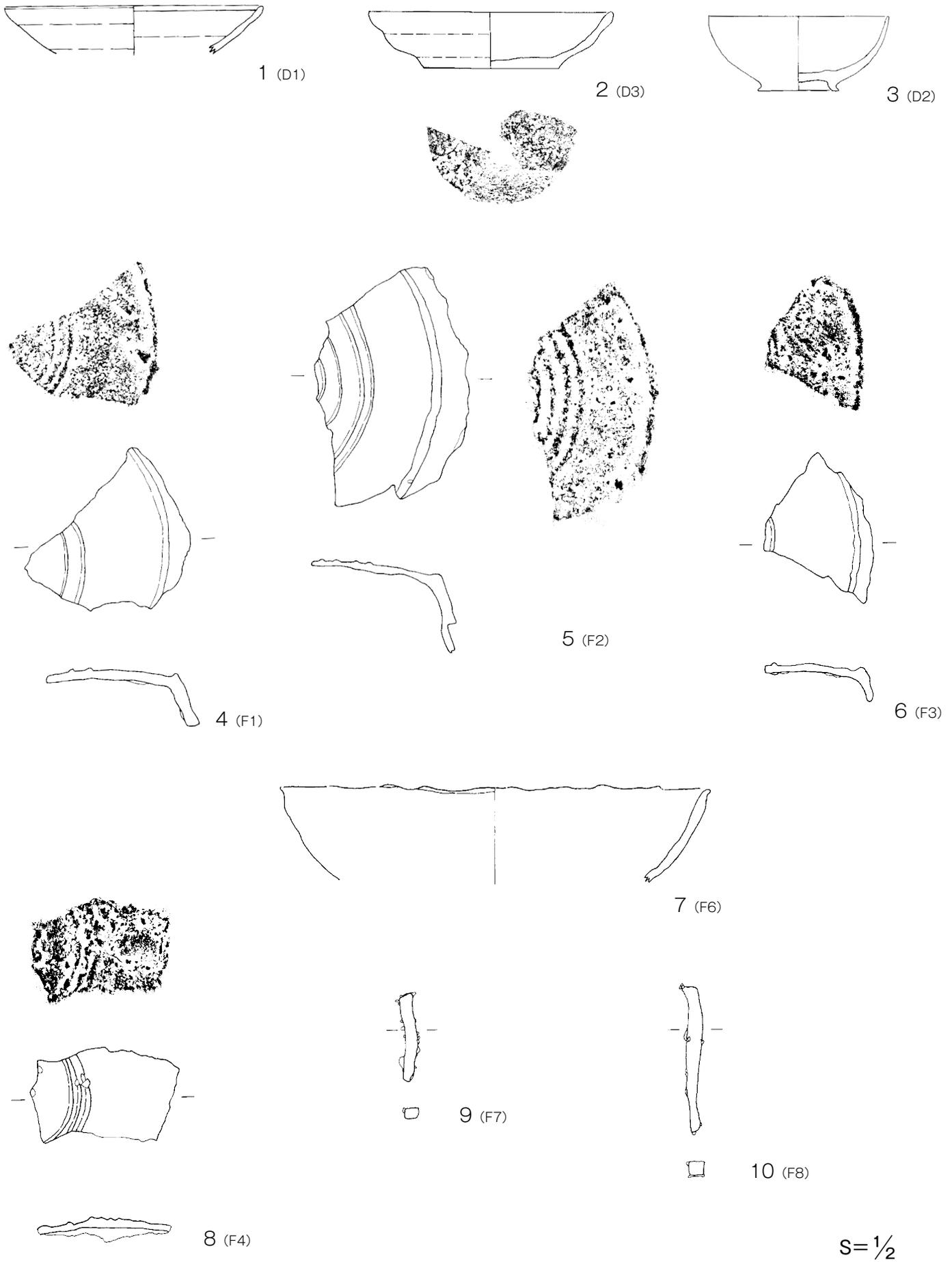
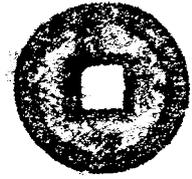
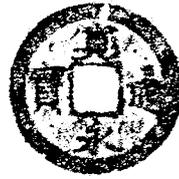


图21 山王窟遺跡出土遺物（1）



11 (C2)



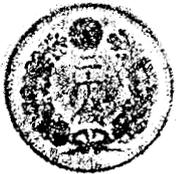
12 (C4)



13 (C5)



14 (C7)



15 (C8)



16 (C9)



17 (C10)

S=1/4

图22 山王窟遗迹出土遗物(2)

6 総括

令和5年度は、白山社及び駒形根神社（駒形根神社境内）、慈恵塚、山王窟の3か所を調査した。

白山社及び駒形根神社（駒形根神社境内）では、遺構はなく、土師器、陶磁器、石製品、鉄製品、銭貨といった遺物を確認した。慈恵塚では、周溝を確認したほか、陶器、鉄滓、石製品、銭貨といった遺物を確認した。山王窟では、遺構はなく、土器、磁器、鉄製品、銭貨といった遺物を確認した。

特に駒形根神社境内では、鉄磬、経筒の蓋、かわらけ（灯明皿）といった遺物を確認したことは大きな成果である。これまでの骨寺村荘園遺跡確認調査では、仏教の儀礼に直接かかわる遺物を確認できていなかったのである。今回の調査成果により、現在の駒形根神社境内のある場所は、『陸奥国骨寺村絵図』が描かれた頃から現在に至るまで、宗教的に聖なる場所として認識され、人々に利用されてきたことを裏付けることができた。

今回の調査成果を受けて、骨寺村荘園遺跡の研究がさらに進むことが期待される。

（菅原）

【参考文献】

- 一関市1977『一関市史 第1巻通史』
- 一関市教育委員会2006『岩手県一関市埋蔵文化財調査報告書第1集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』
- 一関市教育委員会 2011『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第13集骨寺村荘園関連遺跡確認調査報告書』
- 一関市教育委員会2015『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』
- 一関市教育委員会2017『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第21集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』
- 一関市教育委員会2018『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第24集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』
- 一関市教育委員会2019『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第27集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』
- 一関市教育委員会2020『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第29集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』
- 一関市教育委員会2021『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第32集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』
- 一関市教育委員会2022『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第34集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』
- 一関市教育委員会2023『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第37集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』
- 一関市博物館2011『骨寺村荘園遺跡村落調査研究報告書』
- 一関市博物館2014『小さき杜に座す神』
- 一関市博物館2015『骨寺村荘園遺跡村落調査研究報告書』
- 一関市博物館2016『骨寺村荘園遺跡村落調査研究報告書』
- 伊藤信1957「辺境在家の成立—中尊寺領陸奥国骨寺村について—」『歴史』第15号 東北史学会
- 入間田宣夫2016「骨寺村の成立は、いつまで遡るのか—骨寺村絵図研究の過去・現在・未来（1）—」『一関市博物館研究報告』第19号
- 大石直正1984「中尊寺領骨寺村の成立」『東北文化研究所紀要』第15号
- 菅野成寛2020「平泉藤原氏と仏教」『平泉野仏教史』吉川弘文館
- 草間俊一1960「岩手県岩手町豊岡遺跡」『岩手大学学芸学部研究年報』第17巻
- 黒田日出男1995「陸奥国中尊寺領骨寺村との対話—描かれた東国の村と境相論—」『描かれた荘園の世界』新人物往来社
- 佐藤弘夫2006「霊場—その成立と変貌」東北中世考古学会編『中世の聖地・霊場』高志書院

佐藤弘夫2010「霊場と巡礼」『兵たちの極楽浄土』高志書院

島田直明2012「Ⅲ. 骨寺村荘園遺跡の植生・植物相—特に丘陵地の植生」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班

関根達人2009「北奥の一二世紀一堂ヶ平経塚の検討—」『平泉文化研究年報』第9号 岩手県教育委員会
平泉町教育委員会1995『志羅山遺跡第35次発掘調査報告書』岩手県平泉町文化財調査報告書第51集

松本博明2011『一関市巖美町本寺の民俗—骨寺村荘園遺跡のくらし—』一関市教育委員会

村田淳2021「岩手県内出土の古代馬具集成」『紀要』第40号（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

土井宣夫2012「Ⅱ. 地形地質」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班

広田純一・菅原麻美2018「骨寺村荘園遺跡における田越し灌漑システムの実態と骨寺村絵図（詳細絵図）に描かれた水田の推定」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究総括報告書』一関市博物館

平塚明・島田直明・吉木岳哉・吉川昌伸2012「Ⅳ. 一関巖美町本寺地区岩井川左岸の旧河道における花粉分析」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班

吉田敏弘1989「骨寺村の地域像」葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー』下巻 地人書房

吉田敏弘2008『絵図と景観が語る 骨寺村の歴史～中世の風景が残る村とその魅力～』本の森
（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1985『黄金堂遺跡発掘調査報告書』岩埋文第86集
（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2014『不動館跡発掘調査報告書』岩埋文第624集

土器・陶磁器観察表

駒形根神社

番号	No	出土地点	層位	器種	部位	法量				特徴	図版番号	写真図版	備考
						口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	厚さ (cm)				
1	D1	II 2b	III層	坏	底部	—	4.8	(1.1)	0.5	赤焼土器、ロクロ使用、回転糸切痕、内面-ロクロナデ、非黒色処理、平安後期	図9出土遺物(1)-1	写真図版4-5、6	
2	D2	II 2a	III層	甕	頸部	3.0	0.6	2.4	0.6	土師器、ロクロ不使用、内外面-ナデ、平安時代	図9出土遺物(1)-2	写真図版4-5、6	
3	D3	II 2b	II層	かわらけ	底部	9.4	7.6	1.4	0.5	灯明皿、回転糸切痕あり、内面-ナデ再調整、煤が付着、赤変部あり、鎌倉前期7(13C後半~14C初)	図9出土遺物(1)-3	写真図版4-7,8	
4	D4	II 2b	III層	坏	体部	—	—	1.9	0.5	土師器、ロクロ使用、内面黒色処理、ヘラミガキ、内面に炭化物付着、平安時代	図9出土遺物(1)-4	写真図版4-5、6	
5	D5	II 3a	1b層 (造成土)	鉢	口縁部	—	—	—	0.5	縄文土器、外面-斜縄文(単節RL)、内面-一部斜縄文(単節RL)、外面炭化物付着、縄文中期~後期	図9出土遺物(1)-5	写真図版4-5、6	
6	D6	I 2d	I層	火消壺	底部と体部接合	—	24.8	8.3	0.52~1.57	ロクロ使用、外面ロクロ痕顕著、蓋付壺、表面底部に黒色塗があり、近世以降	図9出土遺物(1)-6	写真図版5-1、2	
7	G1	I 3j	I c層	小碗	口縁部	(7.6)	—	—	0.3	湯呑、内外面緑色釉、近代以降		写真図版5-3、4	G2と接合
8	G2	I 3j	I c層	小碗	体部	(7.6)	—	—	0.3	湯呑か?、内外面緑色釉、近代以降		写真図版5-3、4	G1と接合
9	G3	II 2a	II層	瓶	体部	—	—	—	0.4	肥前産、染付、近代以降		写真図版5-3、4	
10	G4	II 3c	I層	瓶	体部	—	—	—	0.3	肥前産、染付、近世以降		写真図版5-3、4	
11	G5	II 0c	I層	盃(坏)	底部	台3.1	—	(2.7)	0.3	台付、底部に「東亜製陶」印あり、近代以降		写真図版5-3、4	
12	G6	II 4b	I層	盃	底部	台2.7	—	(1.5)	0.2	近代以降		写真図版5-3、4	
13	G7	II 2a	II層	碗	口縁部	(9.6)	—	(2.1)	0.2	型紙刷り、花鳥文、19C~明治以降20C前半		写真図版5-3、4	G8と接合
14	G8	II 2b	II層	碗	口縁部	—	—	—		19C~明治以降20C前半			G7と接合
15	G9	II 2d	II層	湯呑碗	口縁部	(7.2)	—	(3.1)		蓋付(内面の口唇部に釉なし)、明治以降			
16	T1	2b	II層	土瓶	口縁部	6.8	—	(2.1)	0.4	在地産、外面-釉、19C(幕末)~近代		写真図版5-3、4	
17	T2	2a	I c層	土瓶	口縁部	—	—	—	0.4	在地産、外面-釉、19C(幕末)~近代		写真図版5-3、4	
18	T3	2a	I c層	瓶	胴部	—	—	—	0.4	在地産、ロクロ使用、内外面-釉、19C		写真図版5-3、4	

石器石製品観察表

駒形根神社

番号	No	出土地点	層位	器種	計測値 (cm・g)				石質	特徴	図版番号	写真図版
					長さ	幅	厚さ	重さ				
1	S1	II 3a	II層	凹石	5.5	4.5	3.6	139.4	泥岩	孔-最大径1.4cm最大深0.5cm、奉納か?		写真図版6-3、4
2	S2	II 2a	II層	石製品	4.1	3.7	1.5	35.6	デイサイト			写真図版6-3、4
3	S3	II 3a	II層	石製品	5.5	4.5	2.3	61.6	砂岩			写真図版6-3、4
4	S4	II 3b	II層	台石	15.6	13.0	5.0	1742.0	デイサイト			写真図版6-5
5	S5	排土		台石	12.9	12.5	5.1	1395.0	デイサイト			写真図版6-5
6	S6	II 2a	II層~III層	石製品	14.0	9.5	2.7	706.0	泥岩		図9出土遺物(1)-7	写真図版6-6
7	S7	II 2b	II層	石製品	3.6	3.3	9.6	15.5	泥岩	赤色顔料? 奉納か?		
8	S8	II 3b	I層	凹石	7.6	4.7	2.3	91.1	デイサイト	孔-長径1.6cm深さ1.1cm、奉納か?	図9出土遺物(1)-8	
9	S9	II 2b	II層	フレーク	5.6	4.1	1.3	18.6	頁岩			

表2 駒形根神社 土器観察表・石器石製品観察表(1)

金属製品・銭貨観察表 駒形根神社

番号	No	出土地点	層位	種類	計測値 (cm)			重量 (g)	遺存度	備考	図版番号	写真図版
					長さ	幅	厚さ (mm)					
1	F1	II 3a	II層	経筒蓋	8.3	4.9	6.1	80.6		経筒の一部の可能性あり	図9出土遺物(1)-9	写真図版5-5、6
2	F2	II 2a	II層	経筒の一部	4.4	3.1	5.0	22.6		経筒の一部の可能性あり	図9出土遺物(1)-10	写真図版5-5、6
3	F3	II 3a	II層	鉄蓋	2.4	5.0	4.3	26.2		鉄蓋	図9出土遺物(1)-11	写真図版5-5、6
4	F4	II 3b	II層	角釘	6.3	0.5	5.0	11.4			図9出土遺物(1)-12	写真図版5-5、6
5	F5	II 2a	II層	角釘	6.6	0.5	5.0	10.9		L字変形	図9出土遺物(1)-13	写真図版5-5、6
6	F6	II 3a	II～III層	角釘	5.7	0.7	6.0	9.0		釘、近世でなく古いかもしれない	図9出土遺物(1)-14	写真図版5-5、6
7	F7	I 3d	II層	轡	5.4	3.0	7.4	19.1		はみ	図10出土遺物(2)-15	写真図版5-5、6
8	F8	II 2a	II層	鉄幣	15.5	6.0	6.4	248.5		「大」一文字あり	図10出土遺物(2)-16	写真図版5-7、8 6-8
9	C1	II 2c	II層	銭貨	2.4	2.4	1.2	3.2	100	古寛永通宝、無背、銅銭、両面緑青、初鑄(1636～1659)	図10出土遺物(2)-17	写真図版6-1、2
10	C2	II 3b	I c層	銭貨	2.3	2.2	0.8	計測不可	95	新寛永通宝、無背、銅銭、2分割欠損あり、初鑄(1668～1768)	図10出土遺物(2)-18	写真図版6-1、2
11	C3	II 3b	I c層	銭貨	2.3	2.3	0.9	計測不可	98	新寛永通宝、無背、銅銭、両面緑青あり、3分割円周方向に欠損あり、初鑄(1668～1768)		写真図版6-1、2
12	C4	II 2a	II層	銭貨	2.4	2.4	1.0	2.3	100	新寛永通宝、初鑄(1668～1768)、無背、両面緑青あり	図10出土遺物(2)-19	写真図版6-1、2
13	C5	II 2a	II層	銭貨	2.5	2.5	0.9	2.9	100	古寛永通宝、無背、両面緑青あり	図10出土遺物(2)-20	写真図版6-1、2
14	C6	II 3a	II層	銭貨	2.5	2.5	1.0	2.4	100	新寛永通宝、初鑄寛文期(1668～1683)、背字文銭、両面緑青あり	図10出土遺物(2)-21	写真図版6-1、2
15	C7	II 3a	II層	銭貨	2.5	2.5	2.6	2.8	100	鉄一文銭、初鑄(1739)、茶錆厚い、		写真図版6-1、2

骨 観察表 駒形根神社

番号	No	出土地点	層位	種類	計測値 (cm)			重量 (g)	遺存度	備考	図版番号	写真図版
					長さ	幅	厚さ (mm)					
1	B1	II 0c	I層	馬歯	5.7	2.2	12.0	22.0				写真図版6-7
2	B2	II 0c	I層	馬歯	5.1	1.7	19.0	25.5				写真図版6-7

表3 駒形根神社 金属製品観察表(2)

陶磁器観察表 慈恵塚

番号	No	出土地点	層位	器種	部位	法量			特徴	図版番号	写真図版	備考
						長さ (cm)	厚さ (cm)	器高 (cm)				
1	T1	1bQ1	参道表土	瓶	体部	2.8	0.2	1.2	肥前産(?)、染付、近世		写真図版10-6	
2	T2	1aQ2	塚斜面表土	瓶	体部	3.5	0.2	3.1	肥前産(?)、染付(舟)、近世		写真図版10-6	
3	T3	1bQ3	参道表土	瓶	頸部	7.2	0.3	3.9	肥前産(?)、染付 山水画、近世		写真図版10-6	
4	T4	1aQ2	塚斜面表土	瓶	体部	1.1	0.2	0.9	肥前産(?)、染付、近世		写真図版10-6	

石器石製品観察表 慈恵塚

番号	No	出土地点	層位	器種	計測値 (cm・g)				石質	特徴	図版番号	写真図版
					長さ	幅	厚さ	重さ				
1	S1	1aQ3	塚斜面表土直上	石製品	8.1	7.1	1.8	127.8	泥岩	自然による線状のものあり	図15出土遺物(1)-1	写真図版11-3、4
2	S2	1aQ2	塚斜面表土直上	穴あき石	6.4	5.1	0.62-2.37	47.9	流紋岩	穴径17.0-22.7、自然石を利用	図15出土遺物(1)-2	写真図版11-3、4
3	S3	1aQ3	塚斜面表土直上	穴あき石	8.5	6.9	1.4	75.3	砂岩	穴径3.5、上下が穿孔	図15出土遺物(1)-3	写真図版11-3、4
4	S4	1bQ1	塚斜面表土直上	砥石	12.3	6.0	0.78-3.41	360.0	粘板岩	両面に使用痕、側面に加工痕	図15出土遺物(1)-4	写真図版11-5、6
5	S5	1aQ3	溝底面直上	石製品	6.4	5.4	5.1	135.3	デイスait	隅丸方形柱(大半欠損)、段をつける加工根あり	図15出土遺物(1)-5	写真図版11-5、6
6	S6	1aQ3	溝表土埋土	石製品	6.7	3.6	4.0	135.8	泥岩	四角柱状、上下面に磨痕あり	図16出土遺物(2)-6	写真図版11-3、4
7	S7	1aQ3	溝底面直上	石製品?	9.7	8.7	3.6	316	デイスait	巖美層構成で角閃石含む、円柱状(大半欠損)	図16出土遺物(2)-8	写真図版11-5、6
8	S8	1aQ2	溝底面直上	宝珠	13.4	11.1	14.7	2400	軽石質凝灰岩	四角形の盤上に宝珠がつく	図16出土遺物(2)-7	写真図版11-6、7、8
9	S9	1aQ3	塚斜面表土直上	穴あき石	5.9	4.2	1.8	57.3	泥岩	穴径4.5~6.0mm	図16出土遺物(2)-9	写真図版11-3、4
10	S10	2aQ1	塚斜面表土直上	石製品	8.5	7.2	2.6	207.5	砂岩	円盤状、1面に磨痕		写真図版12-1、2
11	S11	1aQ3	塚斜面表土直上	石製品	5.0	4.5	1.5	43.5	軽石質凝灰岩	円盤状、1面に磨痕		写真図版12-1、2
12	S12	1aQ3	塚斜面表土直上	石製品	5.2	3.9	1.5	38.9	軽石質凝灰岩	楕円盤状、1面に磨痕		写真図版12-1、2
13	S13	1aQ3	塚斜面表土直上	石製品	5.5	3.7	2.1	53.9	泥岩	楕円盤状、2面に磨痕		写真図版12-1、2
14	S14	1aQ3	塚斜面表土直上	石製品	5.2	3.0	2.0	43.7	軽石質凝灰岩	楕円盤状、1面に磨痕		写真図版12-1、2
15	S15	1aQ3	塚斜面表土直上	石製品	3.8	2.5	0.9	13.4	泥岩	楕円盤状、1面に磨痕		写真図版12-1、2
16	S16	1aQ3	塚斜面表土直上	石製品	6.2	4.1	2.4	92.5	緑色凝灰岩	隅丸長方形形状、自然による印刻状のものあり、2面に磨痕あり		写真図版12-1、2
17	S17	2aQ1	塚斜面表土直上	石製品	4.9	3.2	1.4	31.5	軽石質凝灰岩	楕円盤状、1面に磨痕		写真図版12-3、4
18	S18	1aQ2	塚斜面表土直上	石製品	3.9	3.3	1.5	24.6	砂岩	楕円盤状、(一部欠損)、1面に磨痕		写真図版12-1、2
19	S19	1aQ2	塚斜面表土直上	石製品	6.3	5.1	1.2	55.3	軽石質凝灰岩	楕円盤状、1面に磨痕		写真図版12-1、2
20	S20	1aQ3	塚斜面表土直上	石製品	3.5	2.9	1.0	12.4	砂岩	楕円盤状、1面に磨痕		写真図版12-3、4
21	S21	1aQ3	塚斜面表土直上	石製品	7.0	5.0	2.0	89.5	流紋岩	楕円盤状、1面に磨痕		写真図版12-1、2
22	S22	1aQ2	塚斜面表土直上	石製品	4.5	3.9	1.5	40.2	軽石質凝灰岩	楕円盤状、1面に磨痕		写真図版12-3、4
23	S23	1aQ3	塚斜面表土直上	石製品	4.2	2.8	1.1	19.7	泥岩	楕円盤状、1面に磨痕		写真図版12-1、2
24	S24	1aQ3	塚斜面表土直上	石製品	5.9	4.3	0.8	37.4	泥岩	楕円盤状、両面に磨痕		写真図版12-5、6
25	S25	1aQ2	塚斜面表土直上	石製品	4.8	3.5	1.4	27.4	砂岩	楕円盤状、両面に磨痕		写真図版12-3、4
26	S26	1aQ3	塚斜面表土直上	石製品	4.0	2.5	1.1	13.1	泥岩	楕円盤状、1面に磨痕		写真図版12-3、4
27	S27	1aQ3	塚斜面表土直上	石製品	4.3	3.4	1.5	31.5	軽石質凝灰岩	楕円盤状、両面に磨痕		写真図版12-1、2
28	S28	1aQ3	塚斜面表土直上	石製品	4.4	3.9	1.5	37.9	緑色凝灰岩	円盤状、1面に磨痕		写真図版12-3、4

表4 慈恵塚 陶磁器観察表・石器石製品観察表(1)

番号	No	出土地点	層位	器種	計測値 (cm・g)			重さ	石質	特徴	図版番号	写真図版
					長さ	幅	厚さ					
29	S29	1aQ3	塚斜面表土直上	石製品	4.3	2.0	1.6	18.6	泥岩	三角柱状、2面に磨痕		写真図版 12-3、4
30	S30	1aQ3	塚斜面表土直上	石製品	6.0	4.1	1.5	56.2	軽石質凝灰岩	楕円盤状、両面に磨痕		写真図版 12-5、6
31	S31	1aQ3	塚斜面表土直上	石製品	6.3	5.8	1.7	90.5	流紋岩	円盤状、1面に磨痕		写真図版 12-5、6
32	S32	1aQ3	塚斜面表土直上	石製品	5.6	4.7	1.5	57.5	砂岩	円盤状、両面に磨痕		写真図版 12-5、6
33	S33	1aQ3	塚斜面表土直上	石製品	4.3	3.7	1.1	22.7	流紋岩	円盤状、1面に磨痕		写真図版 12-3、4
34	S34	1aQ3	塚斜面表土直上	石製品	3.3	2.9	1.1	15.2	砂岩	円盤状、両面に磨痕		写真図版 12-3、4
35	S35	1aQ3	塚斜面表土直上	石製品	6.2	4.8	1.1	54.2	砂岩	楕円盤状、両面に磨痕		写真図版 12-5、6
36	S36	1aQ3	塚斜面表土直上	石製品	3.5	1.7	1.5	14.0	砂岩	三角柱状、2面に磨痕		写真図版 12-3、4
37	S37	1aQ3	塚斜面表土直上	石製品	5.0	4.7	1.2	34.6	泥岩	円盤状、1面に磨痕		写真図版 12-3、4
38	S38	1aQ3	塚斜面表土直上	石製品	5.0	4.7	2.0	75.5	頁岩	隅丸方形状、1面に磨痕		写真図版 12-5、6
39	S39	1aQ3	塚斜面表土直上	石製品	4.4	3.5	1.3	32.6	頁岩	楕円状、1面に磨痕		写真図版 12-3、4
40	S40	1aQ3	塚斜面表土直上	石製品	5.9	5.3	1.5	70.0	緑色凝灰岩	円盤状、1面に磨痕、穿孔痕あり		写真図版 12-5、6

金属製品・銭貨観察表 慈恵塚

番号	No	出土地点	層位	種類	計測値 (cm)			重量 (g)	遺存度	備考	図版番号	写真図版
					長さ	幅	厚さ (mm)					
1	F1	1aQ3	塚斜面表土	鉄滓	9.4	6.0	65.90	292.5				写真図版 10-7、8
2	F2	1aQ1	塚斜面表土	鉄滓	3.2	2.7	8.60	8.7		折り曲げられている、F2とF1が接合		写真図版 10-7、8
3	C1	1aQ2	周溝埋土	銭貨	2.8	2.8	1.00	4.3	100	新寛永通宝、背波11波、背字なし、四文銭、銅銭初鑄(1768~1859)、江戸深川千田新田鑄造か?	図16出土遺物(2)-10	写真図版 11-1、2
4	C2	1aQ3	塚斜面表土	銭貨	2.8	2.8	1.00	4.5	100	新寛永通宝、背波11波、背字なし、四文銭、鉄銭初鑄(1860~1869)、面背に砥石仕上げ?	図16出土遺物(2)-11	写真図版 11-1、2
5	C3	1aQ3	塚斜面表土	銭貨	2.3	2.3	1.00	2.9	100	新寛永通宝、無背、一文銭、銅銭、淡黄色、陸奥国仙台石巻鑄造初鑄(1728)	図16出土遺物(2)-12	写真図版 11-1、2
6	C4	2a	参道表土	銭貨	2.3	2.3	1.60	3.4	95	新寛永通宝、一文銭、鉄銭初鑄(1739~1867)、全体に茶色鉄さび有、面字は不明瞭	図16出土遺物(2)-13	写真図版 11-1、2

表5 慈恵塚 石器石製品観察表・金属製品・銭貨観察表(2)

土器・陶磁器観察表 山王窟

番号	No	出土地点	層位	器種	部位	法量			特徴	図版番号	写真図版	備考
						口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)				
1	D1	2g	II層		口縁部	-	-	-	ロクロ使用、口唇部内外面に細沈線、内面に暗褐色の物質付着、中世～近世	図21出土遺物(1)-1	写真図版15-6	
2	D2	2g	II層	かわらけ	口縁部	6.1	0.4	2.5	ロクロ使用、d6(3g II層)、d8(4g II層)と接合		写真図版15-6	外面炭化物付着
3	D3	3g	II層	かわらけ	口縁部～底部	10.0	6.2	2.1	ロクロ使用、右回転回転糸切痕、d5・d7・d9(3g II層)と接合、中世～近世	図21出土遺物(1)-2	写真図版15-6、7、8	
4	D4	2d	II層	土師質土器甕	体部	長さ1.9	-	幅1.6	ロクロ使用、内外面ナデ調整、時期不明			
5	G1	3g	I層	盃	残存6割	7.0	3.0	3.2	近代以降	図21出土遺物(1)-3	写真図版16-1	
6	G2	排土		盃	残存2割	7.6	-	3.1	近代以降		写真図版16-1	
7	G3	2g	I層	盃	胴部～口縁部	8.0	-	2.8	g4と接合、近代以降		写真図版16-1	

石器石製品観察表 山王窟

番号	No	出土地点	層位	器種	計測値 (cm・g)				石質	特徴	図版番号	写真図版
					長さ	幅	厚さ	重さ				
1	S1	4g	II層	火打石	3.1	2.0	0.9	8.0	瑪瑙			写真図版16-5

金属製品・銭貨観察表 山王窟

番号	No	出土地点	層位	種類	計測値 (cm)			重量 (g)	遺存度	備考	図版番号	写真図版
					長さ	幅	厚さ (mm)					
1	F1	4g	II層	鰐口	6.27	5.74	2.5～20.4	61.0	天井部～口縁部	鰐口、圏線3本、近世か	図21出土遺物(1)-4	写真図版16-2、3、4
2	F2	3g	II層下部	鰐口	8.6	5.8	3.0～28.7	152.6	天井部～口縁部	鰐口、近世か	図21出土遺物(1)-5	写真図版16-2、3、4
3	F3	5g	II層上部	鰐口	6.1	4.1	3.1～11.1	29.0	天井部～口縁部	鰐口、圏線あり、近世か	図21出土遺物(1)-6	写真図版16-2、3、4
4	F4	2g	II層上部	鰐口	5.4	3.4	2.4～8.3	35.2	天井部	鰐口、圏線2～3本、近世か	図21出土遺物(1)-8	写真図版16-3、4
5	F5	3g	II層	鰐口	4.4	2.8	3.6～13.8	16.1	口縁部	鰐口の口部分か、近世か		写真図版16-3、4
6	F6	3g	II層上部	不明	6.4	4.4	2.1～4.8	58.7	口縁部～体部	口縁部不整形、口唇部外反している、鍋状の胴部である、近世か	図21出土遺物(1)-7	写真図版16-3、4
7	F7	5h	II層	角釘	3.5	0.5	0.4	4.8			図21出土遺物(1)-9	写真図版16-5
8	F8	4g	I層下部～II層	角釘	6.0	0.5	0.5	11.8			図21出土遺物(1)-10	写真図版16-5
9	C1	2g	II層	銭貨	2.3	2.3	1.0	3.2	95	新寛永通宝、摩耗激、銅銭、両面緑青、初鑄(1668)		写真図版16-6、7
10	C2	3g	II層	銭貨	2.3	2.2	1.0	2.1	75	新寛永通宝(背字不明「元」か?)、鉄銭、十文銭、初鑄(1741) 摂津高津新地鑄造	図22出土遺物(2)-11	写真図版16-6、7
11	C3	1c	II層	銭貨	2.9	2.8	2.6	6.0	100	判別不明、鉄銭、両面茶錆で覆われた、丸内郭		写真図版16-8
12	C4	4g	II層下部	銭貨	2.3	2.3	0.8	2.4	100	新寛永通宝、無背、銅銭、鑄造不良陥没2か所あり、初鑄(1668～1768)	図22出土遺物(2)-12	写真図版16-6、7
13	C5	3g	II層	銭貨	2.3	2.3	0.9	2.4	99	新寛永通宝、無背、銅銭、孔郭欠けあり、初鑄(1668～1768)	図22出土遺物(2)-13	写真図版16-6、7
14	C6	5h	II層	銭貨	2.2	2.2	1.7	3.2	100	角銭22mm、鉄銭、全体に茶錆厚い、仙台通宝、初鑄(1784～1789)		写真図版16-6、7
15	C7	2g	II層	銭貨	2.4	2.4	1.3	4.3	100	新寛永通宝、無背、銅銭、初鑄(1668～1768)	図22出土遺物(2)-14	写真図版16-6、7
16	C8	2g	I層	銭貨	2.3	2.3	1.4	6.4	100	明治18年二十銭、緑青一部あり	図22出土遺物(2)-15	写真図版16-8
17	C9	2g	I層	銭貨	1.8	1.8	1.2	3.3	100	明治24年十銭、緑青一部あり	図22出土遺物(2)-16	写真図版16-8
18	C10	2g	I層下部	銭貨	1.8	1.8	1.2	3.1	100	明治26年十銭、緑青一部あり	図22出土遺物(2)-17	写真図版16-8
19	C11	4g	表土	銭貨	2.2	2.2	1.3	4.1	100	平成元年五円		写真図版16-8

表6 山王窟 土器・陶磁器・石器石製品・金属製品・銭貨観察表



1 調査区（北東から）



2 調査区（北西から）



1 I 2j区平面 (北東から)



2 I 2j区南東側断面 (南東から)



3 I 2j区北西側 (A-A') 断面 (北西から)



4 II 3b区北東側 (J-J') 断面 (北東から)



5 II 4b区北東側 (J-J') 断面 (北東から)



6 II 3a区南東側 (B-B') 断面 (1) (南から)



7 II 3a区南東側 (B-B') 断面 (2) (南東から)



8 II 3a区北西側 (D-D') 断面 (1) (北西から)



1 II3a区南東側 (D-D') 断面 (2) (南東から)



2 II2·3b区南東側 (F-F') 断面 (南東から)



3 II2·3b区北東側断面 (北東から)



4 II3b区南東側 (K-K') 断面 (南東から)



5 II2·3c区北東側 (H-H') 断面 (北東から)



6 II2·3c区北西側 (I-I') 断面 (北西から)



7 II0c区平面 (南東から)



8 II0c区南西側 (M-M') 断面 (1) (南西から)

写真図版4 駒形根神社



1 II 0c区南西側 (M-M') 断面 (2)



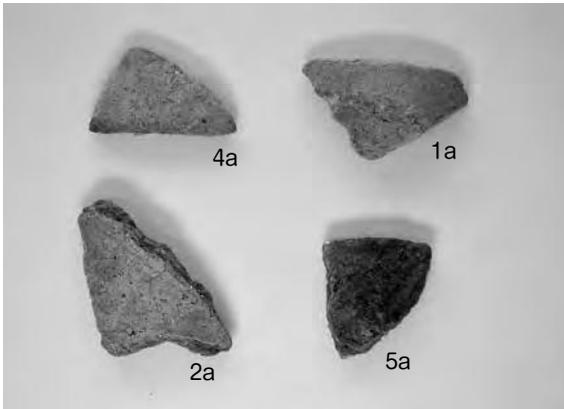
2 遺物 (かわらけ) 出土状況 (南東から)



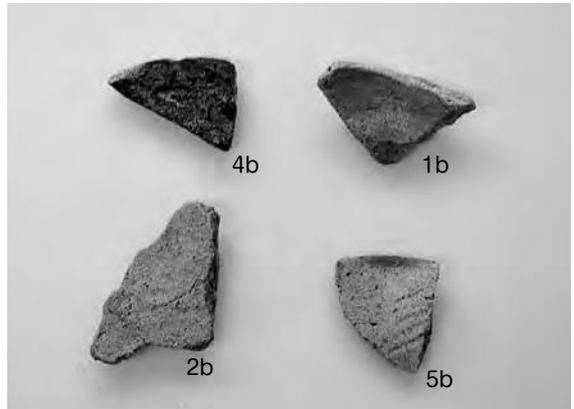
3 II 3c区旧木根出土状況 (西から)



4 II 3c区 旧木根出土状況 (北東から)



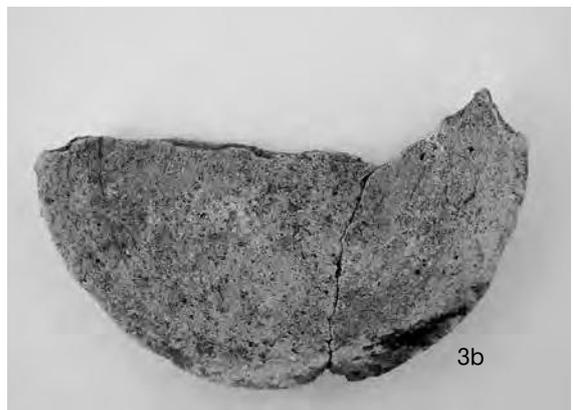
5 出土遺物 (1)



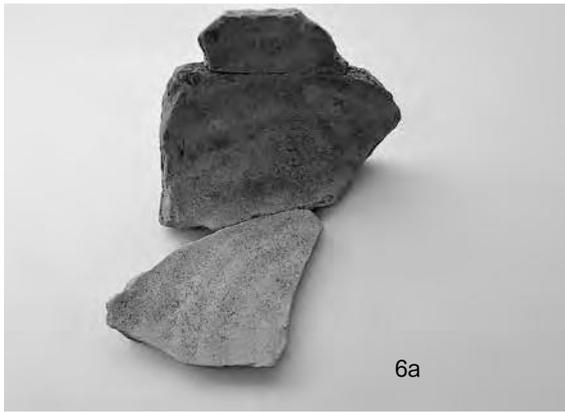
6 出土遺物 (2)



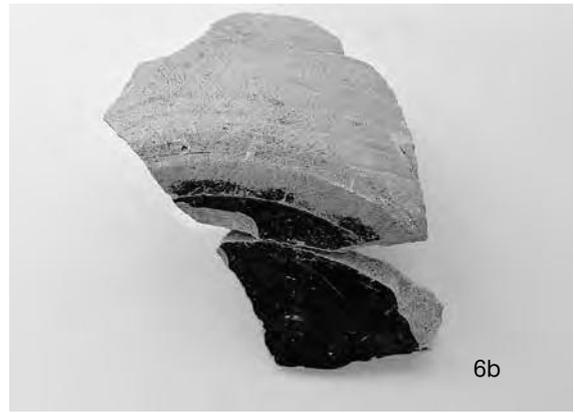
7 出土遺物 (3)



8 出土遺物 (4)



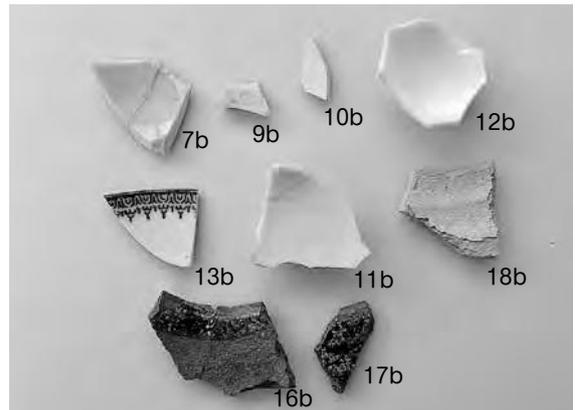
1 出土遺物 (5)



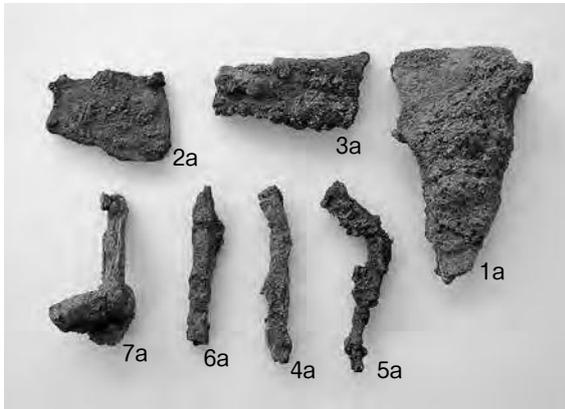
2 出土遺物 (6)



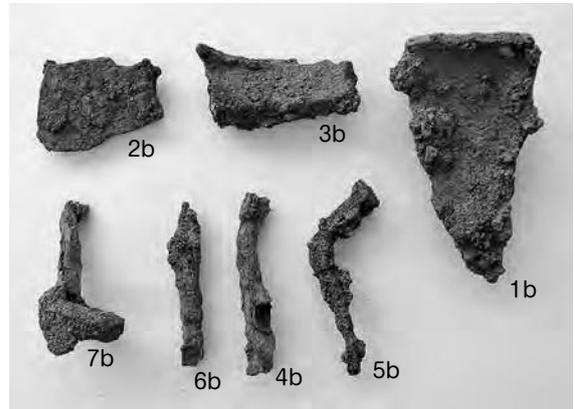
3 出土遺物 (7)



4 出土遺物 (8)



5 出土遺物 (9)



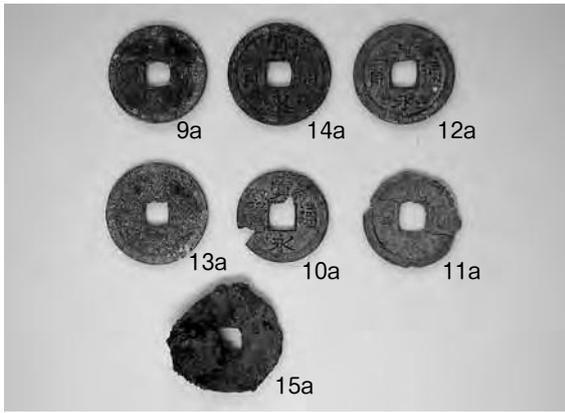
6 出土遺物 (10)



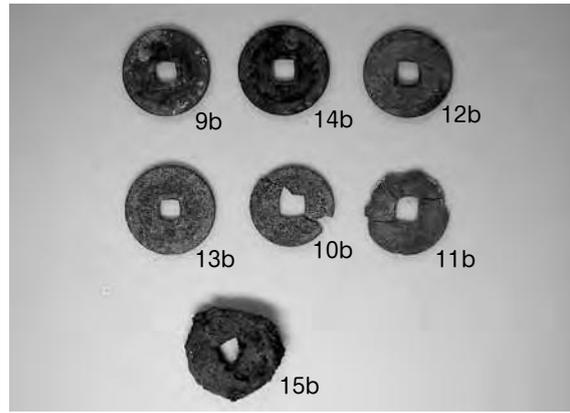
7 出土遺物 (11)



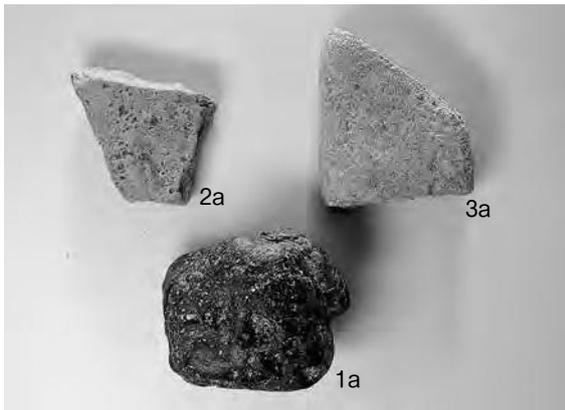
8 出土遺物 (12)



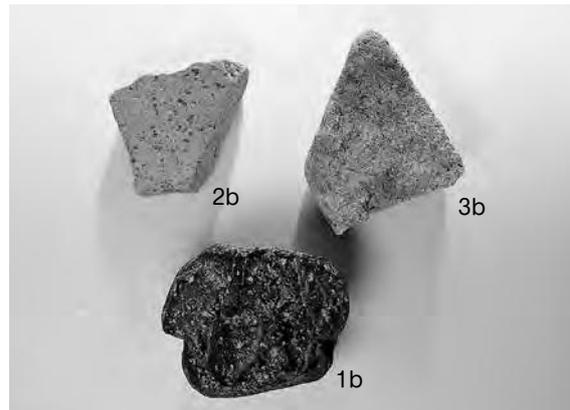
1 出土遺物 (13)



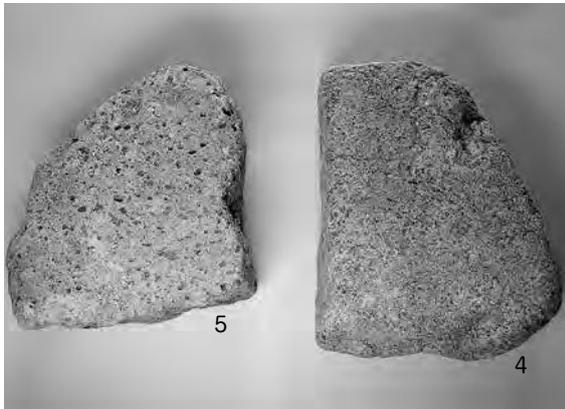
2 出土遺物 (14)



3 出土遺物 (15)



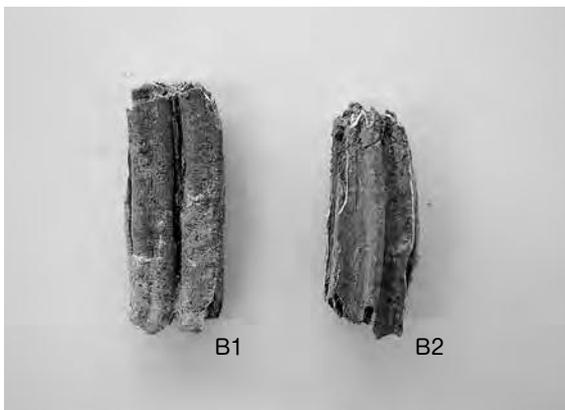
4 出土遺物 (16)



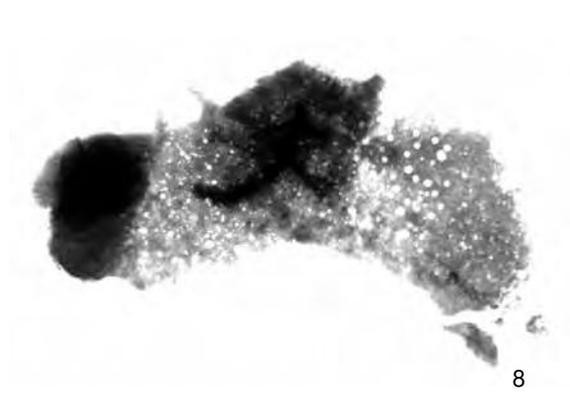
5 出土遺物 (17)



6 出土遺物 (18)



7 出土遺物 (19)



8 出土遺物 (20) エックス線写真



1 調査前（東から）



2 調査前（北西から）



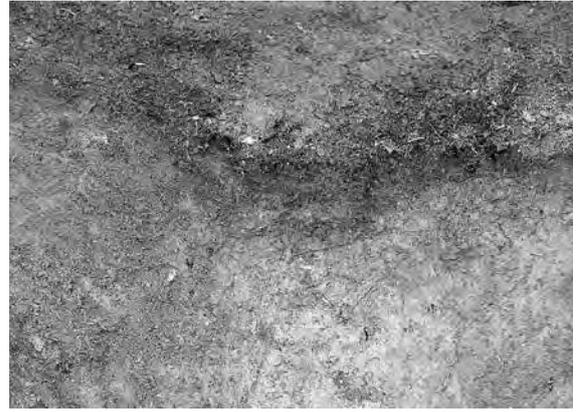
1 表土除去後（北東から）



2 葺石状況（西から）



1 周溝埋土断面（1）（西から）



2 1a区・1b区周溝埋土断面（西から）



3 1a区・2a区周溝埋土ベルト（北から）



4 2a区周溝埋土断面（1）（北西から）



5 1a区南北断ち割り断面（1）（北西から）



6 1a区南北断ち割り断面（2）（北西から）



7 1a区東西断ち割り断面（3）（北西から）



8 1a区東西断ち割り断面（1）



1 1a区東西断ち割り断面 (2) (南東から)



2 2a区断ち割り断面 (1)



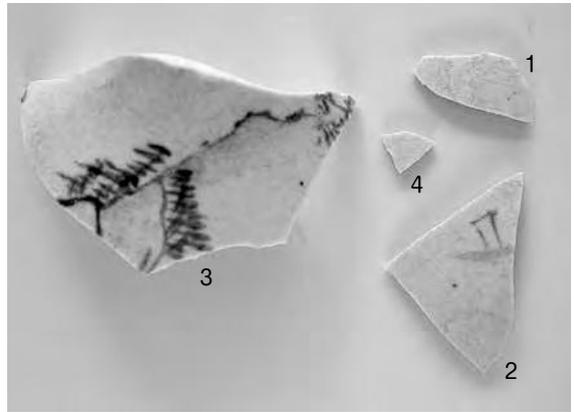
3 2a区断ち割り断面 (2) (南西から)



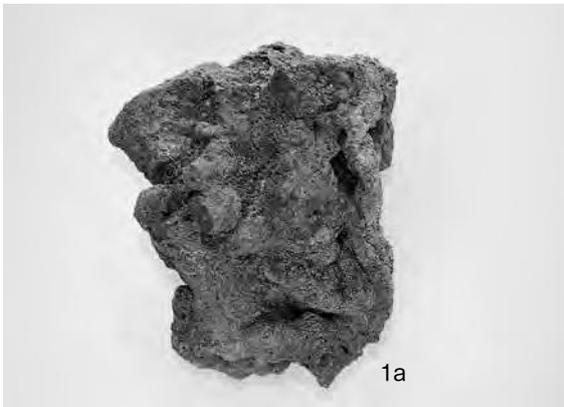
4 2a区断ち割り断面 (3) (北東から)



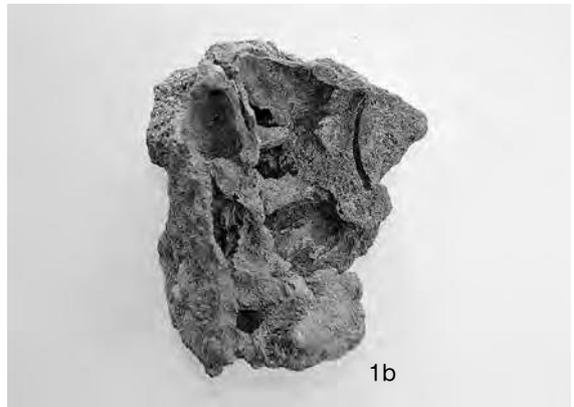
5 2a区断ち割り断面 (4) (南東から)



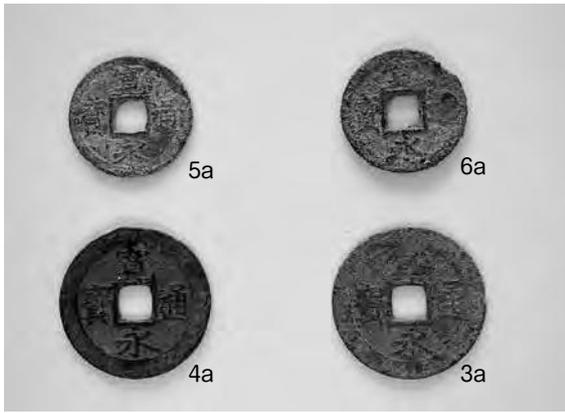
6 出土遺物 (1)



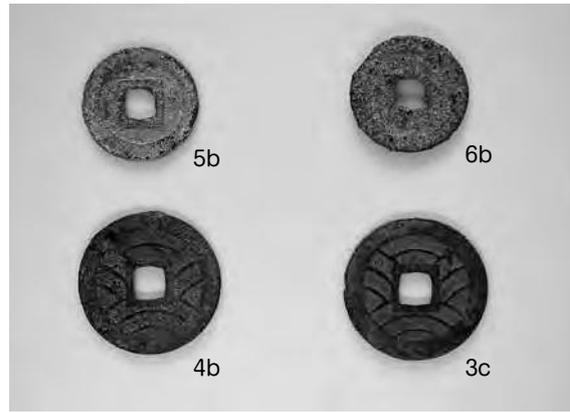
7 出土遺物 (2)



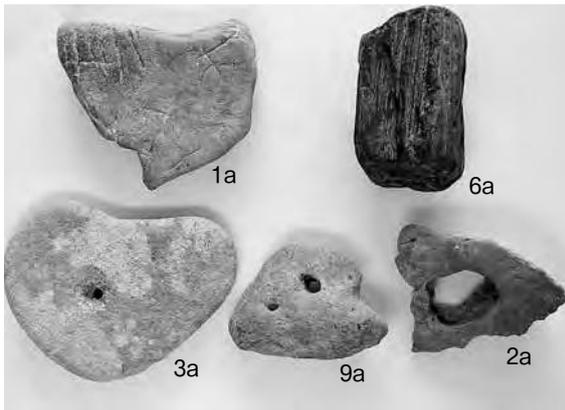
8 出土遺物 (3)



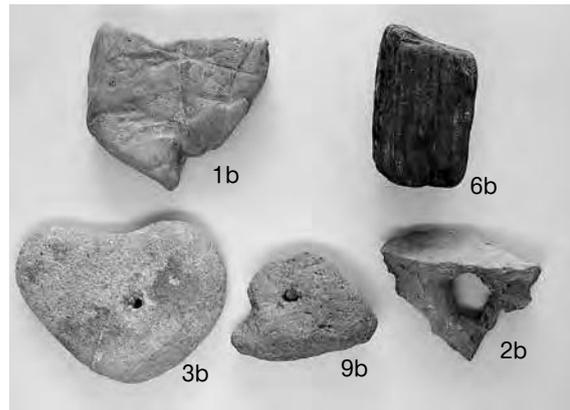
1 出土遺物 (4)



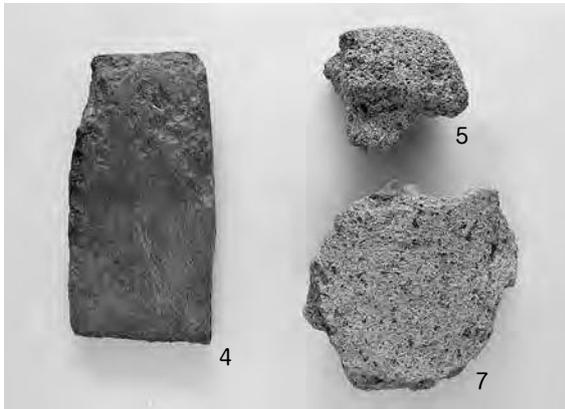
2 出土遺物 (5)



3 出土遺物 (6)



4 出土遺物 (7)



5 出土遺物 (8)



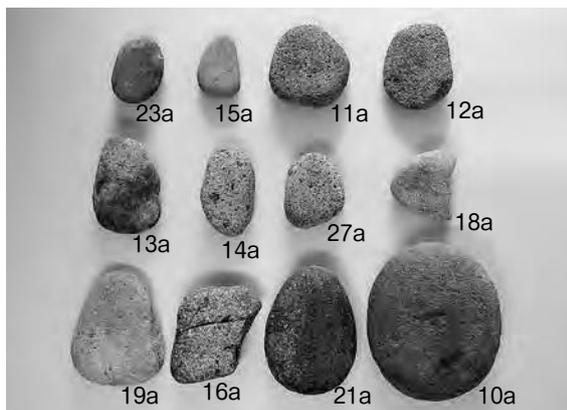
6 出土遺物 (9)



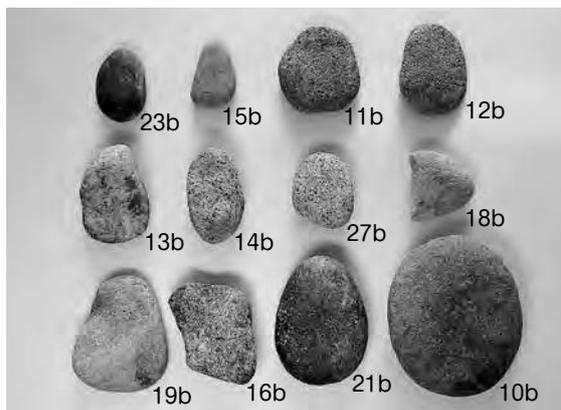
7 出土遺物 (10)



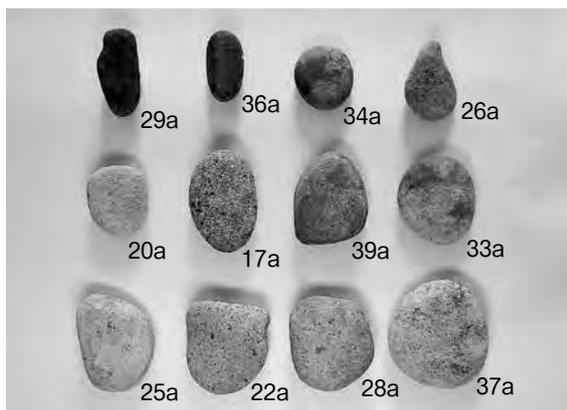
8 出土遺物 (11)



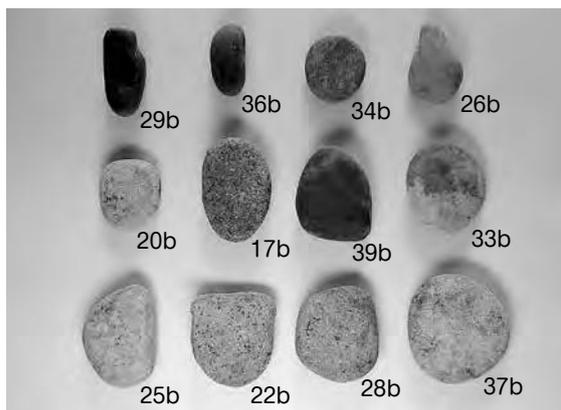
1 出土遺物 (12)



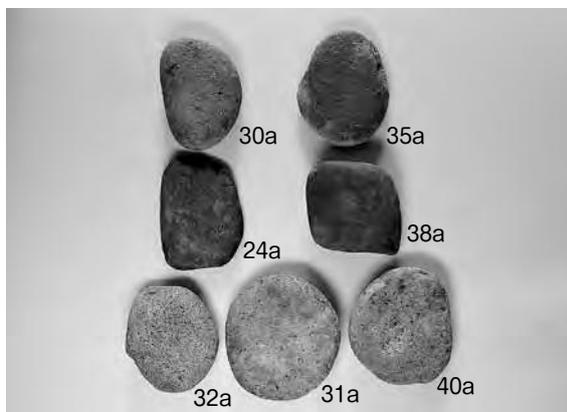
2 出土遺物 (13)



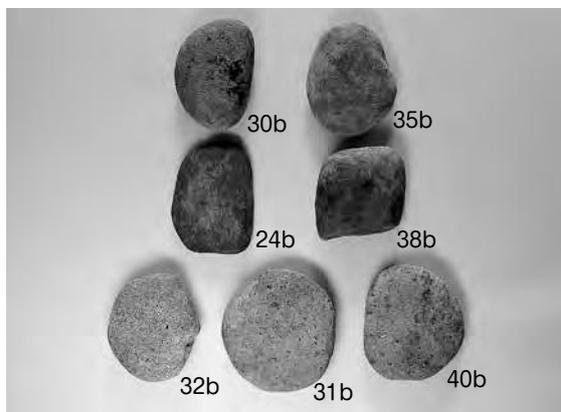
3 出土遺物 (14)



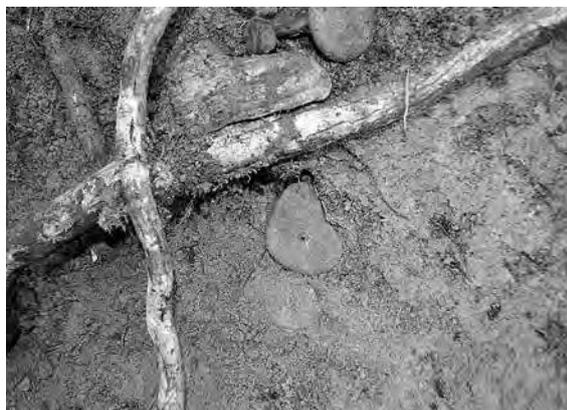
4 出土遺物 (15)



5 出土遺物 (16)



6 出土遺物 (17)



7 遺物出土状況 (1) (北西から)



8 遺物状況 (2)



1 山王窟遠景（南西から）



2 調査前（安全ネット設置）（北から）



1 調査トレンチ（1）（北から）



2 調査トレンチ（2）（北東から）



1 d区北西側断面 (d1、d2) (東から)



2 fg区南西側断面 (2f、2g、3f、3g) (北西から)



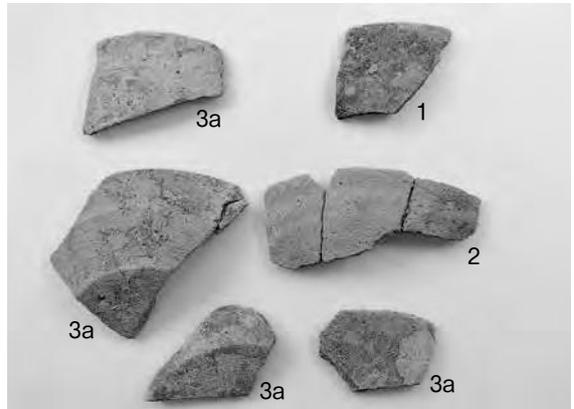
3 ef区北西側断面 (1e~4e、1f~4f) (東から)



4 g区南東側断面 (1g~3g) (北西から)



5 g区北西側断面 (4g、5g) (南東から)



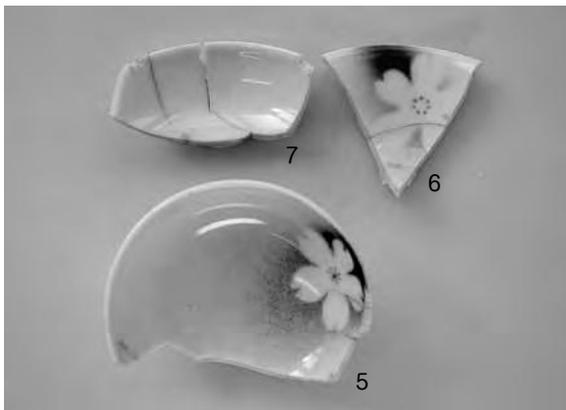
6 出土遺物 (1)



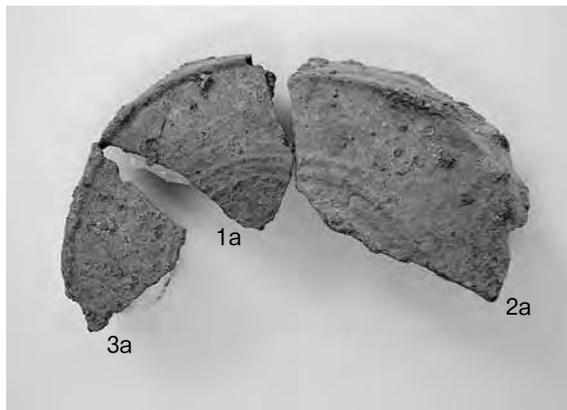
7 出土遺物 (2)



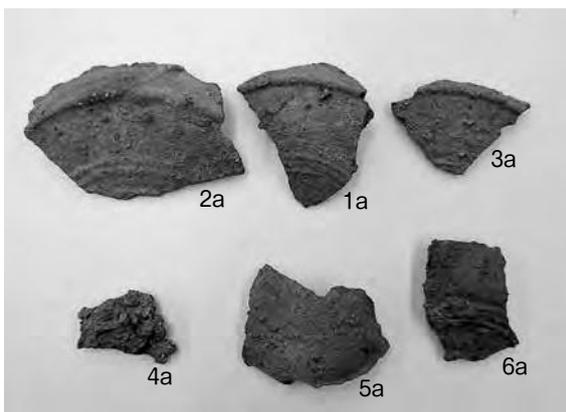
8 出土遺物 (3)



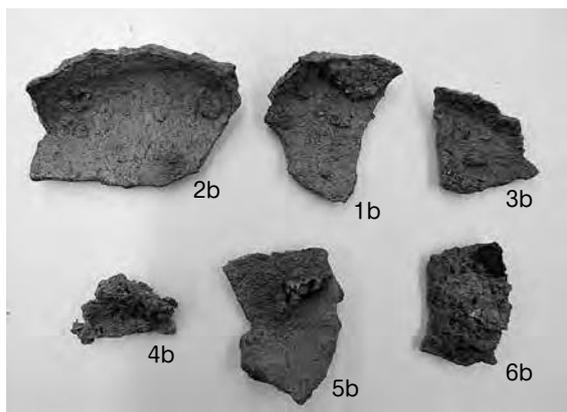
1 出土遺物 (4)



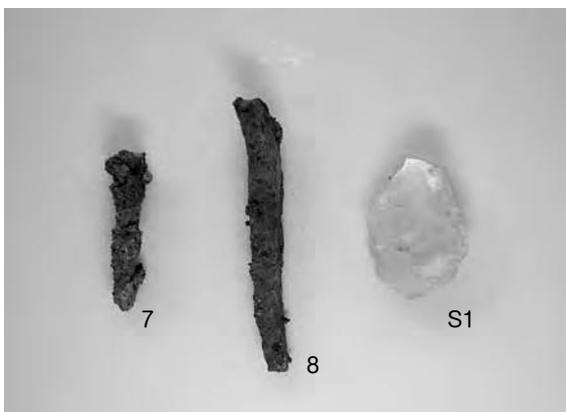
2 出土遺物 (5)



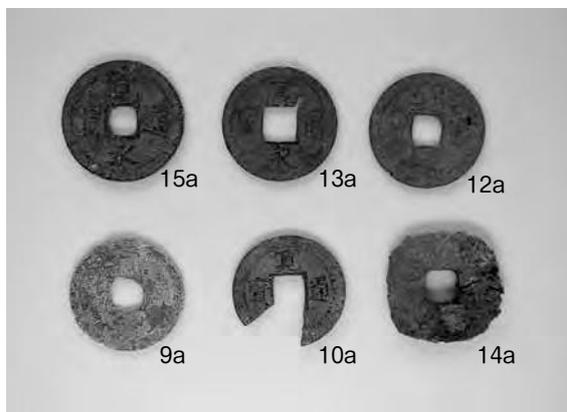
3 出土遺物 (6)



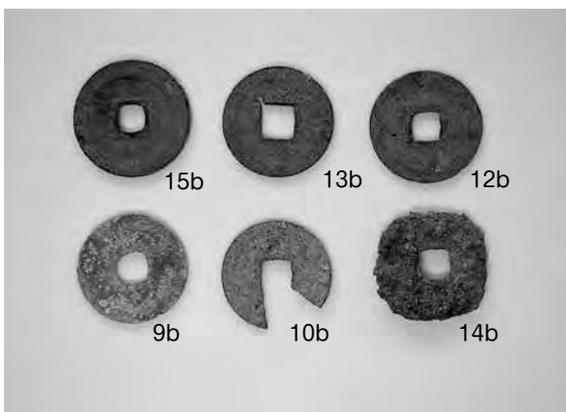
4 出土遺物 (7)



5 出土遺物 (8)



6 出土遺物 (9)



7 出土遺物 (10)



8 出土遺物 (11)

抄 録

ふりがな	ほねでらむらしょうえんいせきかくにんちょうさほうこくしょ							
書名	骨寺村荘園遺跡確認調査報告書							
副書名	白山社及び駒形根神社・慈恵塚・山王窟							
巻次								
シリーズ名	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第41集							
編著者名	菅原孝明・光井文行・阿部充							
編集機関	一関市教育委員会							
所在地	〒029-3105 一関市花泉町涌津字一ノ町29 TEL0191-82-2242							
発行年月日	2024年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほねでらむらしょうえん 骨寺村荘園	いちのせきしげん びちょうあざ 一関市巖美町字 こまがた 駒形8-1	03209	NE72- 2283	38°58'35"	140°56'55"	20230411 ～ 20230623	50㎡	確認調査
じえづか 慈恵塚	いちのせきしげん びちょうあざ 一関市巖美町字 しもまさか 下真坂25-7	03209	NE83- 0015	38°58'26"	140°58'27"	20230623 ～ 20230731	100㎡	確認調査
さんのうのいわや 山王窟	いちのせきしげん びちょうあざ 一関市巖美町字 わかいはら 若井原194-33	03209	NE71- 1393	38°59'13"	140°54'52"	20230518 ～ 20230831	20㎡	確認調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
骨寺村荘園	荘園	縄文、古代、 中世、近世、 近代	なし		土師器、陶磁器、石 製品、鉄製品、銭貨		鉄磬、経筒蓋の一 部出土	
慈恵塚	その他の 遺跡	中世、近世、 近代	周溝		陶器、鉄滓、石製品、 銭貨			
山王窟	社寺跡	中世、近世、 近代	なし		土器、磁器、鉄製品、 石製品、銭貨		鰐口の一部出土	
要約	令和5年度は、駒形根神社・慈恵塚・山王窟を調査した。その結果、鉄磬、経筒の蓋、灯明皿といった遺物を確認した。特に鉄磬は仏具の一つであり、それが駒形根神社境内から出土したことは、この場所が中世から宗教的な様相であったことを示している。							

岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第41集
骨寺村荘園遺跡確認調査報告書
白山社及び駒形根神社・慈恵塚・山王窟

発行 令和6年3月22日

発行・編集 一関市教育委員会
〒029-3105
岩手県一関市花泉町涌津字一ノ町29
電話 0191-82-2242

印刷 川嶋印刷株式会社
〒029-4194
岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21
電話 0191-46-4161(代)